

靈界物語 第五九卷 眞善美愛 戌の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五十九卷』愛善世界社

2007(平成19)年04月08日 發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序^{じよ}

總説歌^{そうせつか}

第一篇 毀譽の雲翳^{きよ うんえい}

第一章 逆艦^{さかろ} 一五〇一

第二章 歌垣^{うたがき} 一五〇二

第三章 蜜議みつぎ 〔一五〇三〕

第四章 陰使いんし 〔一五〇四〕

第五章 有升あります 〔一五〇五〕

第二篇 厄氣恪々やくきりんりん

第六章 雲隱くもがくれ 〔一五〇六〕

第七章 焚付たきつけ 〔一五〇七〕

第八章 暗傷あんしやう 〔一五〇八〕

第九章 暗内あんない 〔一五〇九〕

第一〇章 變金へんきん 〔一五一〇〕

第十一章 黑白あやめ 〔一五一一〕

第一二章 狐穴こけつ 〔一五一二〕

第三篇 地底の歡聲ちてい ぐわんせい

第一三章 案知あんち（一五一三）

第一四章 舖照ほてる（一五一四）

第一五章 和歌意わかか（一五一五）

第一六章 開窟かいくつ（一五一六）

第一七章 倉明くらあき（一五一七）

第四篇 六根猩猩ろくこんしやうじやう

第一八章 手苦番てくばん（一五一八）

第一九章 猩猩舟しやうじやうぶね（一五一九）

第二〇章 海龍王さいあがらじうわう（一五二〇）

第二一章 客々舟きやくやくぶね（一五二一）

第二章	五葉松（一五二二）
第三章	鳩首（一五二三）
第四章	隆光（一五二四）
第五章	歡呼（一五二五）

序

天氣晴朗一點の空には雲影も無く日本最初の山嶺と稱へられたる伯耆大山は、
 白雪の頭巾を頂き高麗山を壓して聳え立ち、神素盞鳴大神が八岐大蛇の憑依せる
 印度の國ハルナの都に暴威を振ひて、天下を體主靈從的に混亂せしめつつありし
 その曲業を悔悟せしめ、地上に天國を建設せむと、數多の三五教の宣傳使を派遣
 し嚴の言靈を以て言向和さむと爲たまひし時、大黒主は風を喰つて印度の都を九
 十五種外道を引率し、遠く海を渡りて淤能碁呂島の要なるこの大山に姿を隠し、

暴風雨を起し妖邪の氣を放射して人畜を苦しめたるを、大神は自ら數多の天使や
宣傳使を率ゐて安く來りまし、天下の災害を除き、天の叢雲の劍を獲て之を高天
原に坐します天照大御神に獻り、清淨無垢の大精神を大神竝に天神地祇八百萬神
及び天下萬民の前に顯はし玉ひし靈界物語に取つて尤も由緒深き神山を朝夕打ち
ながめ、ノアの方舟なす口述臺に横はりつつ、四月一日より本日正午にかけ、眞
善美愛の戎の卷（五十九卷）を編著し了りたり。
白砂青松の海岸を四五の信徒と共に逍遙しつつ、松露の玉を拾ひ拾ひホテルの
二階に歸り、大山の靈峰と差向ひ互に黙々として睨み合ひつつ認め了りぬ。

大正十二年四月三日

於皆生温泉

總説歌

昨夜見た見た不思議な夢を
顔さへ知らぬ神人と

日本海の空高く
黄金の翼に乗せられて

金剛不壞の山の根に
何の苦も無く降りて行く

彌勒菩薩と呼ぶ聲に
ハツと氣が付き我身を見れば

紫磨黄金の肌となり
諸々の天人に圍まれて

世界の人の前に立ち
宣る言靈は苦聖諦

世界一度に集聖諦
神に反きし曲靈の

終りを示す滅聖諦
漸く至誠が現はれて

公平無私の更生主と
仰がれ乍ら道聖諦

完全に委曲に説き出す
天地忽ち震動し

山の尾の上や河の瀬や
海を披いて寄り來たる

神かみの出口でぐちの口車くちぐるま 道法だうほふ禮節れいせつ遲滞ちたいなく
治をさまり海うみの内外うちそとも 互たがひに睦むつび親したしみて
一いつてん天一いちち地いっしん一神いっしんの 治世ちせいをみ見るこそ尊たふとけれ
折をりから過すぐる春風はるかぜの 窓まど打うつ聲こゑに眼めさむれば
月つきの光ひかりはキラキラと 二階にかいの方舟はこぶね照てらしつつ
ニコニコニコと笑ゑみたまふ あゝ惟かむながらかむながら神々々
御靈みたま幸さちはへましませよ。

大正十二年四月三日

於皆生温泉場

王仁識

今日けふ京けふへ上のぼりて【きのゑ】のたび休やすみ

第一篇 毀譽の雲翳

第一章 逆艦〔一五〇一〕

廣袤千里のキヨの湖 俄に天候一變し

逆巻浪に船體を 上下左右に奔弄され

惡虐無道のワックスも 肝腎要の機關手を

逆巻波に攪はれて 進みもならず退きも

ならぬ海路の苦しさに 氣を取直し立上り

無性矢鱈に櫓を漕いで 何れの岸にか辿らむと

心あせれど生れつき テルモン山の片隅に

鳥なき里の蝙蝠を 氣取つて威張りちらしたる

其天罰は忽ちに

報み來りて湖の上に

心焦れば焦る程

老朽船はキリキリと

浪の面で目を眩す

ワツクス初め三人は

舟諸共に目を眩し

方角さへも見失ひ

逆巻波と鬪ひて

運をば天に任しつ

ワツクス 梵天帝釋自在天

大國彦の大御神

守らせ玉へ吾々は

この海上の暴風に會ひ

神の試練と畏みて

いよいよ改心仕り

サツトワ (衆生)

濟度のそのために

此長髪を剃りおとし

此世を捨てて比丘となり

ニテヨーデユクタ (常精進) を勵みつつ

至仁至愛の大神の

誠の教に仕ふべし

あゝ皇神よ皇神よ

吾等四人の改心を

憫れみ玉ひて此颯風を

とめさせ玉へ惟神

赤心籠めて願ぎ奉る

惡魔は如何に強く共

憑つき物もの如何いかに多くおほとも 假令たとへスマートが來きたる共とも

誠まこと一つのバラモンの 教をしへの道みちは世よを救すくふ

テルモン山ざんの山風やまおろし 早くはや治をさまり吾々われわれの

行手ゆくての幸さちを守まもりませ 偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

テルモン山ざんの聖地せいちをば 痛いたい苔しもとを加くはへられ

追放つゐほうされた吾々われわれは 最早もはや詮せんなし月つきの國くに

ハルナの都みやこに立出たちいでて 心こころの底そこより改良かいりやうし

命いのちを惜をしまず魂たましひを 大黒主おほくろぬしに奉たてまつり

一心いっしん不亂ふらんに神かみの旨むねを 四方よもに開ひらかむ吾わが覺悟かくご

此海このうみ無事ぶじにキヨ港こうの 花はな咲さく岸きしに安々やすやすと

進すすませ玉たまへ惟神かむながら 神かみかけ念ねんじ奉たてまつる

と一生いっしやう懸命けんめいに歌うたひ乍ながら櫓ろを操あやつてゐる。バラモンの大神おほかみがワツクスワツクスの願ねがひを聽許遊ちやうきよあそ
ばしたのか、或あるは三五教あななひけうの大本大神おほもとのおほかみがお許ゆるし遊あそばしたのか、不思議ふしぎにも颯風さつふうはピ

タリと止まり、見るも恐ろしき激浪怒濤は漸く凪いで鏡面の如く鎮まり、浪キラキラと日光に輝き初めた。テルモン山は前方に當つて、雲表に高く其雄姿を現はし、中腹に雲の帯を締めて、泰然として此湖面を眺めてゐる。ワックスは大旱の水田に喜雨を得たるが如く、俄に元氣恢復し、叶はぬ時の神頼み、慄ひ戦いてゐた魂はどこへやら、ソロソロ減らず口を叩き始めたり。

「オイ、エクス、ヘルマンの恐喝先生、六百圓の強奪者、並びに鞆丸潰しのエルの奴、何をグツグツしてゐやがるのだい。いいかげんに頭を上げぬかい。仕方のない代物だなア。流石の颯風も怒濤も、此ワックスさまの御祈願に仍つて、之れ見ろ。言下に静まり、ケロリカンとして、夢をみたやうな面をさらしてゐるぢやないか。本當にワックスさまの御威勢といふものは偉大なものだらう」

エクス「ヘン、仰有いますわい。恐怖心に襲はれ、ガタガタ慄ひの大將奴、憫れつばい聲を出して、哀求歎願と出かけた時の、汝の御面相つたら、繪にもかけないやうだつたよ。ああ云ふ時に泰然自若、動かざること山嶽の如し、態の、吾々は態度を以て、運命を天に任してゐたのだ。汝は生の執着が人一倍濃厚だから、

こんな時になつて、醜體を演ずるのだ。何だ、男らしうもない。限ある狭い舟の上を右往左往に轉げ廻りよつて、其みつともなさ、本當に吾々男子の面汚しだよ」

ワックス「コリヤ、汝何と云ふことをほざくのだ。又罰が當つて、今度こそ舟が轉覆して了ふぞ。其時になつて吠面かわいても、ワックスの救主は知らぬぞよ。早く改心したが其方の得だぞよ。改心致さねば、目に物みせてやらうぞよ……と大自在天様の御諭しにあるのを、汝知つてゐるだらうなア」

エキス「そんなことは、とうの昔に御存じの此方さまだ。オイ、ワックス、肝腎要の魔法使を取逃がし、どうする積だい」

ワックス「どうせ、俺達も此海原を渡らねばならぬのだから、又途中で追ひついで、十分油を絞り、往生させてやれば可いのだ」

エキス「ヘン、往生させられるのだらう、何と云つても、弱きを挫き、強きに從ふといふ惡酔會前會長だからな」

ワックス「汝等可いかげんに起きて此櫓を操縦せないか。放つておいたら、どんな所へ漂着するか知れぬぢやないか」

エキス「漂着を待つてゐるのだ。一時も早く陸地へ着いて、そこからテクった方が何程安心だか分らぬワ。メツタに山で溺死する氣遣はないからのう」

ワックス「先方は舟で一直線に走つて行きよるなり、こつちや山を越え谷を越え、難路を辿つて居らうものなら、何時キヨの港迄つくか分らないワ。何とかして此水路を進むことにしたら如何だ」

エキス「何としても法がつかぬぢやないか、何奴も此奴も舟を操縦する事に妙を得て居ない阿呆人種計りだからのう」

エル「オイ、其アホを此北風にかけて、一直線に驅けて進んだら可いぢやないか、さうすりや骨を折つて櫓を操る必要もなし、風の神が自然に先方へ渡してくれらる」

ワックス「成程、よい考へがついた」

とガラガラと綱を引張上げ、茶色になつた帆を巻上げた。忽ち帆は弓の如く風を孕むでサア サア サア サアと音を立て乍ら、勢よく迂り出した。エルは櫓を手に握り覺束なげに、舟の舵をとり乍ら、欸乃を唄い出した。

エルコ（追分おひわけ）虎とらは千里せんりの藪やぶさへ越こすに

これの湖水こすゐがなぜ越こえられぬ。

（安來節調やすきぶしでう）神かみの館やかたの寶珠ほっしゆの玉たまを

盗ぬすみそこねた人ひとがある。

月つきは御空みそらにテルモン館やかた

デビスの姿すがたは花はなか雪ゆき。

花はなの香かりを慕したうて來きたる

蝶てふかあらぬか蛆蟲うじむしか。

劫ごふをワツクス家令かれいの悴せがれ

今いまは湖上こじやうで泣ないてゐる。

泣ないて明志あかしのテルモン館やかた

これが此世このよの見みをさめか。

（琉球節調りうきうぶしでう）風かぜは北きたからみ舟ふねを送おくる

送おくる風かぜこそケリナの息いきよ。

薬罐爺やくくわんおやぢに先まづ生いき別わかれ

デビスのお姫ひめさまにや泣なき別わかれ
」

ワックス「コラコラ エルの奴やつ、何なにを吐ぬかすのだ、せうもない。汝きさま、チツと休やすむだ
らよからう。俺おれがこれから、櫓ろを握にぎつて一ひとつ唄うたつてやるのだ」

エル「（琉球節調りゅうきゆうぶしやう）素破すっぱぬかれたワックスさまは

肚はらが立たつなり波なみが立たつ
」

と唄うたひ乍ながら櫓ろをパツと放はなした。ワックスは手早てばやく櫓ろを握にぎり、
ワックス「コラ、スツテのことで櫓ろを波なみに取とられるとこだった。チツと氣きをつけ
ぬかい。此奴こいつを取とられた以上いじやう、思おもふ所ところへ舟ふねが向むけられぬぢやないか。馬鹿ばかだなア」
エル「ヘン、マア馬鹿ばかになつておかうかい、悻口りこうの者ものや賢かしこい者ものや器用きような者ものになる
と、皆みな阿呆あほう共どもの道具だうぐに使つかはれるからなア。少すこし書しよでも甘うまいと、あのエルさまに看かん

板を書いて貰はうとか、橋の名を書いて貰はうとか、大福帳の表紙を認めて貰はうとかぬかしよつて、阿呆共の弄物にしられるのだ。學者や智者になるものぢやないワ。ワックスさま、宜しく頼みます。随分お前さまが櫓を握つた時は立派なものだ。足の爪先迄力が入つてるやうだ。最前の船頭のやうに、自分の握つた櫓の柄に撥ね飛ばされぬやうになさいませや」

と鼻の頭を三つ四つかき乍ら、船底にゴロリと横はる。ワックスは櫓を握り、廣き湖面を眺めて、

ワックス「旭輝く鏡の湖に

悪の鏡を乗せて行く。

清き眞水の漂ふ湖を

悪酔「カイ」が舟を漕ぐ。

悪に強けりや善にも強い

善と悪との海を行く。

波は立つ共心は立たぬ

腰のぬけたる阿呆舟。

舟は舟だが白河夜舟

夢か現で世を送る。

牛に鞆丸踏まれた奴は

とても乗られぬ玉の舟。

死なぬ前からあわてた奴が

十字街頭に踏み迷ふ。

迷うた亡者の鞆丸潰し

阿呆の帆（呆）かけ此湖渡る。

傷はツキツキ膿ボトボトと

涙流して波の上。

上にや青雲下には藻草

中を乗り行く阿呆のエル。

アハ、ハ、ハ、面白い面白い、生れてから始めて舟に乗ったが、何と愉快なものだ。デビスの暗がり船に乗りたいたい乗りたいと思つて、今迄どれ丈マストを立てたり、白帆をあげて、きばつたか知れないが、今となつて考へてみると、本當に馬鹿臭い様だ。矢張、人間は廣い所へ出て來ねば駄目だな」

エキス「オイ、ワックス先生、チツと一服したら何うだ。俺も一つ練習の爲に、此靜かな湖で、櫓の稽古をやつておかぬと、マサカの際に柝麵棒を振るからのう」
ワックス「長い海路だから、俺も今から精力を消耗さしてはつまらぬから、汝に櫓權を暫く掌握させてやらう。サア早く握つたり握つたり」

エキス「ヤ、有難い、それなら、新内閣の總理大臣だ。官海游泳術に慣れた此方だから、マア見てゐ玉へ、随分素晴らしい技能を發揮してお目にかけるから……」
ワックス「ヘン、官海なんて、馬鹿にするない、汝は渡海否盜界の覇者だ。盜界節でも唄うて、追手の目を韜晦する方が餘程性に合うてるだらうよ」

エキス「どうどうと握る天下の大權よりも」

櫓ろ擧かいつかんだ面白おもしろさ。

面白おもしろい悪あくと悪あくとの身魂みたまを乗のせて

キヨの海うみをば汚けがし行ゆく。

犬いぬに乘のりたる以いぜん前のナイス

今いまは何處いづこの波なみの上うへ。

三さん百ひゃくの金かねは何時いつしか吾懷わがところを

迂すべり出いでたる海うみの上うへ。

金かねが仇かたきの浮世うきよと聞きけど

金かねが無なければ渡わたれない。

さり乍ながら海うみを渡わたるにや金かねではゆかぬ

舟ふねが命いのちの守まもりがみ。

神かみの館やかたを放逐ほうちくされて

尻しりの据場すゑばに困こまる奴やつ。

金盃かなだらひしりに當あてられカンカんと

照らす夏日の其暑さ。

面の皮あつい許りか尻迄が

あつい男とほめられた。

ワックスは色と欲との二つに離れ

泣いて彷徨ふ海の上。

エクスさま甘いエクスふ新し男

蛸のお化けと人が云ふ。

吸いついて鼠泣きせうと夢みた男

猫に逐はれて逃げ出した。

猫かぶり薬罐爺の機嫌をとりて

居つた甲斐なく馬鹿にされ。

肝腎の金は他人にぼつたくられて

尻にお金の叩き拂ひ。

天葬式泣いて笑うて悔んで踊る

義理泣き女のホクソ笑

ワックス「コラ、エクス、湖上で死ぬだの死なぬのと、ナニ不吉なことをほざくのだ。又、颯風が襲来するぞ。チツと言霊を愼まぬか」

エクス「手がだるい、腹が立つ、極道息子と湖上を越せば

あちら此方に信天翁。

信天翁、運上取らうとワックス目がけ

バタバタ翼を打つてゐる。

ゆすられて、泣き泣き放り出す惜しい金

首をつなぐと泣く涙

ワックス「オイ、ヘルマン、エキスの奴、仕方がないから、汝一つ目出度い唄を唄つて宣り直してくれないか」

ヘルマン「さうだなア、のり直さうと云つたつて、外に空舟もなし、矢張乗續けるより仕方がないぢやないか。玉國別は甘く乗直して、サツサとお先へやつて行きよつたが、俺達は一體行末が案じられて仕方がないワ。最前から、實は前途を案じ、チツと許り憂愁の涙に沈みてゐた所だ。あーあ。仕方がない、……寄邊渚の捨小舟、どこへ取つく島もなしか……ぢやと云つて、湖水に投身して魚腹に葬られるのも、何だか氣が利かないやうだし、あゝ何うしたら可からうかなア。俺やモウ世の中が厭になつたのだ。何とかして三五教のムニヤ ムニヤ ムニヤ」

ワックス「ヤ、何と申す、汝は三五教の弟子になりたいといふのだな」

ヘルマン「ナア二、三五教の向うを張つて一つ男を立てねば世間に顔出しが出来ないといふのだ。玉國別一行には俺達があこ迄仕組みで、既に仇を報むと、九分九厘迄行つた所へ、マンチユーシリ菩薩か、アバローキテー・シユワラのやうな女神様が立派な船を以て迎へに來たり、自分は犬に乗つて海上を渡つて行くといふ様な離れ業が出来るのだからなア。何と云つても敵乍ら大したものだよ」

ワックス「サア、そこが魔法使の魔法使たる所以だ。正法に不思議なし、君子は

怪力亂神を語らずといふぢやないか。キツと邪法だよ

ヘルマン「それでもお前の様に微力亂心に比べてみたら、餘程マシぢやないか。

俺は何だか、あの三五教とやらが、俄に好になつて……は來ぬのだ。本當に

三五教の神様とバラモン教の神様とは、正邪善惡の差別が非常についてゐる様に

思はれてならないのだ

ワックス「どちらが正でどちらが邪といふのだ」

ヘルマン「邪と申して、俄に判断がつかないワ。マア行く所迄行かねば分らない。

併し乍ら安心してくれ、俺は素よりバラモン教徒だから、メツタに外道の教に溺

没するやうな無腸漢ぢやないからう。併し乍らよく考へてみよ、俺達四人はバ

ラモン教のピュリタンぢやないか。それにも拘らず、バラモン館を大勢の前で答

刑をうけて放逐されたのだから、神様から見放されたのかも知れないよ。さすれ

ば捨てる神もあれば拾ふ神もありといふから、實際捨てられたとすれば、人は無

宗教で此世に立つてゆけないから、何とか考へねばなるまい

ワックス「ナニ、心配するな。キヨの港へついたら最後、どこもかも皆バラモン

教の勢力範囲だから、三五教の魔法使を巧く捕縛するか、もしも力に及ばねば關所へ密告して手柄を現はしさへすれば、又立派なバラモン教のピュリタンとして、安全無事に關所の切手を貰ひ、ハルナの都へ安全に行かうとままだ。何とマア舟の早いことだのう。これも全くバラモンの神様のお蔭だよ。サア、エル、そこどけ、俺が一つ櫓を操つてやらう」
と言ひ乍ら、代る代る櫓を握り、順風に助けられて都合好くキヨの港へ三日目の夕方安着したりける。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第二章 歌垣(一五〇二)

キヨの港の關所の總取締チルテル・キャプテンの留守宅にキャプテンの妻チルナ姫は、リュウチナントのカンナと、ユウンケルのヘール三人が密々首を鳩めて

何事か小聲で囁き居たり。

チルナ「これ、カンナさま、へールさま、此頃の旦那様の様子は、チツと變だとは思ひませぬか」

カンナ「さうですな、奥様の前だから申上げ難うムいますが、此頃は餘程旦那様も怪しうなられた様ですわ。のうへール」

へール「ウン、さうだな。併し乍ら吾々卑しき者が上官の行動に就いて云々する権利はないからのう」

チルナ「これ、へールさま、公務上の事は兔も角も、今日は私事に關して打解けて話をして居るのだから旦那様の事だつて、矢張り、よくないと思つたら妾に忠告して呉れるのがお前の役ぢやないか。お前から云ふ事が出来なければ妾が又機嫌の可い時を見てお話するから、氣の付いた事があれば遠慮は要らぬ、トツと云ふて下さい。如何なる英雄豪傑でも女房が確りして居らねば成功するものぢやありませぬよ」

カンナ「如何にも、奥様の仰有る通り、どんな難問題でも裏口からソツと這入つ

て奥様の御機嫌さへ取つて置けば、直に解決がつくものだ。表の玄關口から這入つて来る奴は官海游泳術を知らぬものだ。一寸裏口からソツと奥様の氣に入りさうな反物や寶石等を持ち込みて置くと、屹度出世の出来るものだ。何と云つても裏に女性がついて居らなくては、世の中で成功する事は出来ないからな。ア
ハ、ハ、ハ、ハ

チルナ「これ、そんな事は如何でも宜い。お前等、奥の別室に一絃琴を朝から晩まで弾じて居る、彼の女を何と思ひますか」

カンナ「さうですな。第一私は、それが不思議で堪らないのですよ。朝から晩まで座敷を締めきつて、琴ばかり弾じて居る美しい女は、まだ吾々にも一言の挨拶もした事もなし、旦那様とニタニタ笑ひ乍らコソコソ話をやつて居るのです。

そして肝腎の奥様にも挨拶せないのだから、怪ツ體なものだと思ひますワ」

ヘール「ウン、あれかい。ありや旦那様に聞いて見たら、「あの方は天上からお降り遊ばしたアバローキター・シュワ」ラ様だ。バラモン教を守護の爲にお降り下さつた天人様だ」と仰有つて居られました。奥様、必ず御心配なさいますな、

失禮乍ら、よもや嫉妬をなさる様な卑屈な事はムいますまいな。嫉妬は婦徳を汚す最も恐るべき悪魔でムいますからな。あの方はトライロー・キャボクラーの救世主だと云ふ事ですから、うっかり穢れた身魂のものが側に寄つては大變です」

チルナ「何程、觀自在天様か知らぬが、矢張先方が美しい女の肉體を以て、自分の主人と喋々喃々と甘つたるい口で話してゐるのを聞くと、餘り宜い氣分がしないぢやないか」

へール「成程、奥様の立場とすれば、そんな氣分にお成り遊ばすのも無理もムいますまい。併し乍らそこが辛抱と云ふものです。まあまあ暫らく様子を考へて御覽なさい。あの品行方正な旦那様が立派な奥様があるのに女を引張り込むだり、なさる様な筈がムいませぬワ」

カンナ「おい、へール、さう樂觀は出来ないよ。男と云ふものは女に掛けたら目も鼻も無い者だ。況して天下無雙の美人、年も若し、肌は紫磨黄金色、愛嬌たっぷり、何處から見ても三十二相揃ふた、缺點のない女菩薩だから、如何なる強骨男子もあの一瞥にかかつたら忽ち章魚の様に骨も何もなくなつて了ふからな。頭

の先から足の先までスヴァラナヤル―ブヤヤ、ブラワ―ザ、バヅマラーカ、マ
ニラツナ、ムサラガルワ、アスマガルタと云ふ様な七寶を鏤め一目見てもマクマ
クする様な、あのお姿、木石ならぬ人間として、どうして心を動かさぬものがあ
らうかい。實に奥様、御注意なさらぬと險難でムいますよ。うつかりして居ると、
「チルナ姫は夫に愛がないから、今日限り暇をやる」なぞと何處から低氣壓が襲
來するやら、地震、雷、火の雨の大騒動が勃發するやら分りませぬぞえ」
チルナ「如何にもカンナさまの御觀察は違ひますまい。何とか二人さま、よい考
へは浮むで來ないかな。實はあの女が此館へ來てから神經が興奮して一目も眠ら
れないのよ」
カンナ「成程、奥さまのお目が血走つて居ますわ。用心せないとヒステリックに
なりますよ」

チルナ「そらさうだとも、何時自分の不幸の種となるかも知れない美人だから、
妾だつて安心が出來さうな事がないぢやないか。あの方は決して觀自在天でも文
珠師利菩薩でもありません。矢張り普通の人間だ。旦那様がそんな巧い事云つて

お前等まへたちを誤魔化ごまくわして△るのだ。何卒どうぞ今の間いまうちにお前等まへらの考かんがへで、あの女をんなをどうか口く説とき落おとし、旦那様だんなさまの鼻はなを明あかして、思おもひ切きらして下くださる譯わけには行ゆきますまいかな□

カンナ「へー、そりや願ねがふてもなき御命令ごめいれい、直ただちにお受うけ致いたし度たいは山々やまやまで△い
ますが、そんな事ことをして旦那様だんなさまの御機嫌ごきげんを損そこねやうものなら、それこそ足袋屋たびやの
看板かんばんで足上あしあがり、忽たちまち風來者ふうらいものになつて了しまふぢやありませぬか□

チルナ「ホ、々、々、何なんとまア、お前さままへの魂たましひも時代遅じたいおくれだな。リュチナントの
職名しよくめいを剥はがれるのが、それ程ほど恐おそろしいのかい。よう考かんがへて御覽ごらん、あの様やうなナイス
をお前さままへの女房にようぼうにしようものなら、それこそ天下てんかに名なが揚あがり、ゼネラルよりも
尊敬そんけいされるやうになりますよ。あの體からだに着ついて居ゐる寶石ほうせきを一つ金かねにしても一代安いちだいあん
樂らくに暮くされるぢやないか。あんな美人びじんを見みす見み逃のがす位くらゐなら男をとこを廢業はいげふなさつた
が宜よからう。男をとこは決斷力けつだんりよくが肝腎かんじんですよ□

カンナ「成程なるほど、さう聞きけば食指しよくし大おほいに動うごいて來きました。併しかし、私わたしも、もう十年許じふねんばか
り辛抱しんぼうして、せめてカーネルの地位ちゐに上のぼり、郷里きやうりに錦にしきを飾かぎり代議士だいきしの候補者こうほしやにで
もなつて巧うまく當選たうせんし、議事壇上ぎじだんじやうで花々はなばなしく言靈戰ことたませんを開始かいしし、天晴政治家あつぱれせいぢかと褒ほめら

れ様やうと思おもつたのですが、ここは一つ思案しあんの仕所しどころですな〇

チルナ〇議場ぎぢやう雑沓ざつたふ議員ぎいんや、矛盾ぼくもん議員ぎいん、着炭ちやくたん議員ぎいん、事故じこ議員ぎいん、陣笠ぢんがさ議員ぎいん、墓標ぼへう議員ぎいん、等なと國民こくみんから冷評れいひやうを浴あびせかけられ、痺しびれケ原がはらの糞蛙くそがへると云いはれるよりも、あんな
ナイスを女房にようぼうに持もち總理大臣そうりだいじんの裏口うらぐちからソツと出入でいりさせてお髯ひげの塵ちりを拂はらはせ、伴ばんし
食大臣よくだいじんにでもなる方が餘程よほど出世しゅつせの近道ちかみちだよ。陣笠ぢんがさになつた所で到底たうてい知事ちじにもなる
こたア出來できやしない。先まづ出世しゅつせをしようと思おもへば、あの位くらゐの美人びじんを女房にようぼうに持もつ
だな〇

へール〇もし奥様おくさま、此このへールは豫算外よさんぐわいでこいますか。カンナが、あの美人びじんを女房にようぼう
に持もつのならば私わたしも持もち度たうこいます。一人ひとりの女をんなに二人ふたりの男をとこ、どうも平衡へいかうがとれ
ぬぢやありませんか〇

チルナ〇そこはお前まへさま等たちが選舉せんぎよ競争きやうそうでもやつて、うまく當選たうせんするのだな。負まけ
處ところで運動うんどうが足たらないのだから諦あきらめるより仕方しかたがない。又また次期じきの總選舉そうせんぎよを待まつて、
やり直なほせば可いいのだから〇

へール〇もし、その運動方法うんどうほうは如何どうすれば可いいのですか。何なんと云いつても先方むかは天てん

下無雙の美人、そして寶は何程でも持つてゐるのだから、黄白を以て歡心を得る事は出来ないし、男前でゆかうと思へば零なり、辨舌は巧くなし、到底寄りつけないぢやありませんか」

チルナ「さア、そこが選舉は水物と云ふのだ。縁は異なるもの、乙なものといつて、女は妙な所に惚れるものだから、一つ愁に知恵を出して内兜を見透かされるよりも、力一杯滑稽を演じて女の腮を解き、「何とまア調子の宜い人だな、餘程チヨ力助だ、斯んな男と添ふて居たら嘸面白からう。妾一人でこんな所でコードを弾じて居つても面白くない。久振りだ、何とまア好いオツチヨコチヨイだ」と思はせるのが一番近道だよ」

ヘール「へー、生れつき無粋な私、滑稽なぞは到底出来ませぬわ」
カナ「や、好い事を教へて下さつた。滑稽諧謔、口をついて出ると云ふチヤ一のカナさまだから勝利疑ひなし、さア之から一つ逐鹿場裡に立つて烏鷺を争ひませう。エへ、へ、へ、へ、もし、當選したら奥さま、何を奢つて下さいますか」

チルナ「當選した方から奢つて貰はなくちやならぬぢやないか。そして落選した方には妾が慰安料として一生食へる丈けのお金を上げませう。さア之から二人寄つて精一杯ベストを盡して下さい。早くやらなければ旦那様が歸つては駄目になりますよ。アヅモス山にでも引張り出して、巧く要領を得るのだな。勝てば結構、負ても結構、こんな甘い選挙競争がありますか。さア勇むでやつて下さい」

カンナ「はい、然らば仰せに従ひ捨身的活動を御覽に入れませう。おいへール、貴様も俺の暫らく艶敵となつて逐鹿場裡に立つのだ。時遅れては一大事だ。さア行かう」

と二人は庭園の樹木の間を縫うて美人の居間に胸を躍らせ乍ら近づいた。何だか心がドギマギして、戸を開けて這入る事が出来ない。二人はモジモジし乍ら庭の木立に立つてコソコソと囁いて居る。

カンナ「おい、此處迄来るは来たものの、何だか恥しくて頬が赤くなつて、あの戸一枚開ける勇氣が出なくなつたぢやないか。男も斯うなると弱いものだな」

へール「さうだ、到底正面攻撃は駄目だよ。ここで一つ二人が歌でも唄つて、品

よう踊らうぢやないか。そしたらナイスが窓を開けて、あの涼しい目付で覗いて呉れるかも知れない。さうなりや、此方のものだ。其時や一生懸命にラブ・イズ・ベストを唄ふのだ。屹度先方だつて血が通ふて居る水の垂る様なボトボトとした盛りの肉塊だから、屹度動くに違ひない。それより良い方法は無からうぢやないか。オツト失敗つた。こんな妙案奇策を政敵のお前に聞かすぢやなかつたに」と云ひ乍らへールは窓の外にて黒い尻を捲り妙な手付で唄ひ踊り狂ふ。

へール「俺は印度のハルナの育ち

こんなナイスは未だ知らぬ

ヨイトサヨイトサ、ヨイトサのサツサ。

夏の暑いのに一閒に籠もる

さぞや暑からう淋しからう

ヨイトサー　ヨイトサー。

人は如何しても一人ぢや暮れぬ

女をんなばかりぢや夜よが明あけぬ。

男をとこ持もつならへールさまを持もちやれ

顔かほに面に瘞きびがこの通とほり

ア、ヨイトサー ヨイトサー

カンナ 男をとこ持もつならカンナさまを持もちやれ

リユウチナントの軍いくわらひ人ひとよ

へールは偉えらさうに威ゐ張ばつて見みても

ユウンケルでは仕しやう様やうが無ない。

ここにこゝにこゝにこゝムるは天てん女にょか又または

三さん十じふ三さん相さうの觀くわん音のんさまか

一いち度どお顔かほが拜をがみ度たい。

吹ふけよ夏なつ風かぜ上あがれよ簾すだれ

中のナイスの顔見たい

ア、ヨイトサー ヨイトサー。

女をんな早なもない世よの中に

惚ほれて出て来る粹いきな男をとこ。

此この男をとこ色が黒くろうても浅漬あさづけ茄子なすび

噛かめば噛かむ程ほど味あじが出る

ア、ヨイトサー ヨイトサー。

これ丈だけに二人ふたり男をとこが心こころを盡つくし

踊をどり狂くるふのを知らぬ姫ひめ。

一いち絃げんの、琴ことの音色ねいろに俺わしや憧あこが憬がれて

ピンピンシャンシャン撥はね廻まはる

ア、ヨイトサー ヨイトサー。

へールさま一つお前まへが皺しわ噎がれ聲こゑで

姫ひめの腮あこをば解といて呉くれ。

勝かつも負まけるも時とき世よと時じ節せつ

負まけた所ところで金かねになるら

へール ♪ カンナさまもう此この上うへは惟かむ神ながら

神かみのまにまに任まかしませう。

三あ五なの神かみの教をしへに照てらされて

バラモン教をしへが嫌いやになつた。

こう云いへば屹きつと度とナイスが窓まど開あけて

俺わしの黒くろい顔かほ見みるであらう。

ア、ヨイトサー ヨイトサー。

これ程ほどに唄うたひ踊をどれど此このナイス

耳みみが無ないのかぢれつたい。

月つきはテラテラ テルモン山さんの

峰^{みね}を掠^{かす}めて昇^{のぼ}り行^ゆく。

星^{ほし}の顔^{かほ}より綺^{きれ}麗^いなナイス

月^{つき}の樣^{やう}なる光^{ひかり}出^だす

ア、ヨイトサー ヨイトサー。

寶^{ほう}石^{せき}を體^{からだ}一^{いち}面^{めん}ピカピカと

誰^{たれ}も欲^ほしがる着^つけたがる。

月^{つき}にや村^{むら}雲^{くも}花^{はな}には嵐^{あらし}

カンナ、ヘールの雲^{くも}が出^でる。

紫^{むらさ}の雲^{くも}の中^{なか}より現^{あら}はれた

二人^{ふたり}男^{をとこ}の此^{この}踊^{をど}り。

棚^{たな}機^{ばた}も年^{とし}に一^{いち}度^どの逢^あう瀬^せはあるに

何^な故^げに渡^{わた}れぬ戀^{こひ}の橋^{はし} ㊦

カンナ 唯神かむながらかみのまにまに唄歌うたうたふ

開あけて嬉うれしい姫ひめの顔かほ。

窓まど開あけて庭にはの面おもてを見みやしやんせ

罪つみな男をとこが二ふたり居をる。

チルナ姫ひめ、角つのを生はやしてブツブツ叱こごと言

云いふに云いはれぬ譯わけがある。

トントんと叩たたく妻戸つまどを開あけて呉くれ

棄すてた男をとこぢや無ない程ほどに

二人ふたりの歌うたの聲こゑを聞きいて一いち絃げん琴きんの手てを止やめ、
美人びじんは耳みみを傾かたむけて暫しばらく様やう子すを考かんがへ
て居ゐた。

カンナ 一いち絃げんの琴ことの音ね色いろがピツタリ止やんだ

思案投首窓の中しあんなげくびまどうち

へール「さア、めめた閉めた障子をサラリと開けて

観音菩薩が今覗く。

その時は互に顔の整理して

男比べをせにやならぬ

ア、ヨイトサー　ヨイトサー

美人は連子窓の障子をサツと開けて庭の面を見渡せば、
チユウリック姿の兩人
が臀部を現はし、滑稽踊をやつて居る。

美人「庭の面を見れば怪しき人の影

胸は躍りぬ人も踊りぬ。

何人か知らず妾の窓前に

踊り狂へる姿可笑しき。

面白き唄を唄ひて面白き

人が手を拍ち舞ひ狂ひけり

カンナ 村肝の心のかぎり眞心を
盡して君を慕ひ來にけり

へール 今更に驚かれける汝が面
月の顔花の姿に

美人 如何にせむ天津乙女の妾なれば
人の戀をば入るる術なき

カンナ ㊦ いぶかしや人の體を持ち乍ら

天津乙女と免れ給ふか。

吾も亦高天原の天人の

靈魂を受けし益良夫ぞかし ㊦

へール ㊦ 此男人の頭を削る奴

それ故名をばカンナとぞ云ふ ㊦

カンナ ㊦ 此男酒ばかり飲みて財産が

日向に氷へール馬鹿者 ㊦

美人びじん 〇 兔とも角かくも珍うづの益ます良すら夫を吾わが居ゐ間まへ

進すすませ玉たまへ勸すすめ參まゐらす 〇

カンナ 〇 惟かむながらひめの言こと葉ばに從したがひて

進すすみ入いらむか君きみの御みま前に 〇

へール 〇 今いまこそはラブ・イズ・ベストを振ふり翳かざし

登と龍うりうもん門もんを安やす々やす潛くぐらむ 〇

美人びじん 〇 兔とも角かくも優やさしき二人ふたりの益ます良すら夫をよ

吾わが前まへに來こよ心こころ安やすけく 〇

カンナ「思ふたよりいと安々と門の戸を
打開け玉ひし姫ぞ畏き」

と詠ひ乍ら表門をガラリと開け、何となく手足を微動させつつ、美人の前に恥し
げに座を占た。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第三章 蜜議〔一五〇三〕

あななひけう
三五教の生神と
そのな
其名も高き宣傳使

はつわかひめ
初稚姫の神司
たまくにわけ
玉國別の一行が

きなん
危難を救ひ守らむと
まうけん
猛犬スマート引連れて

キヨの湖打ち渡り
バラモン軍の關守の

チルテル館に立ちよりて
いと麗しき離れ家に

一絃琴を弾じつつ
神の依さしの神業に

心を盡し身を碎き
仕へ給ふぞ畏けれ

これの關所を預かりし
チルテル司は初稚姫の

貴の容姿に魂抜かれ
妻ある身をも省ず

家敷の中に留め置き
時を伺ひ此姫の

吾身を慕ふ時を待ち
戀の野望を達せむと

一絃琴を與へおき
靜に一室に隠しけり

初稚姫の宣傳使
チルテル司の乞ふがまま

離れの一間に立て籠り
心密に神言を

稱へ上げつつコードをば
弾じて憂を慰めつ

時の至るを待ち給ふ
チルナの姫は吾夫の

心の底をはかり兼ね
悋氣の焰を燃やしつつ

カンナ、ヘールの兩人を 私かに近く呼びつけて
 心の丈を打ち明し 二人の男に謀計
 授けて姫を館より 放逐せむと企らみつ
 心を配るぞいぢらしき カンナ、ヘールの兩人は
 戀の奴となり果てて 姫の館の傍近く
 進みて怪しき歌歌ひ 踊りつ舞ひつ戀衣を
 青葉の風に翻し 茲を先途と荒れ狂ふ
 初稚姫は窓の戸を サツと開きて庭の面
 眺め給へば訝かしや チュウリツク姿の兩人が
 戀に狂うた破れ歌 面白可笑しく歌ひつつ
 顔赤らめて眺め入る 初稚姫は聲をかけ
 二人の男を呼び入れて 手づから茶菓を取り出し
 いと懇にあしらへば 案に相違の兩人は
 皆をさげて涎繰り 願望成就の時來ぬと

胸轟かす可笑しさよ

初稚姫の神司

心の玉もピカピカと

輝き給へば兩人は

云ひ寄る術も荒男

ビリビリ體を慄はせて

他人の家から借つて来た

狎か猫かと云ふやうな

鹽梅式で畏まり

顔を赤らめ控へ居る。

初稚「貴方のチュウリックを伺ひますればリユウチナントさまにユウンケル様の

やうでムいますが、何と凜々しい、男らしいお姿でムいますなア。男子はどうし

ても軍人に限ります。花も實もある武士は、文學にも通達して居るものでムいま

すが、唯今承はれば、貴方方は文武兩道の達人、誠に感心致しました」

カンナ「へエ、滅相な。さうお褒めを頂きましては恐れ入ります。私は一介の武

辨、文學趣味は一向持ちませぬ。無味乾燥な代物でムいますよ」

初稚「イヤどうしてどうして、あれだけのお歌を即席にお詠めになるのは、餘程

文學の素養がなくては出来る業ぢやムいませぬ。貴方は今は軍人になつていらつ

しやいますが、文科大學でも優等で卒業なさったお方で、
ムいませうねえ。」

カンナ「イヤ畏れ入ります。實は赤門出でムいますが、お蔭で銀時計を頂戴致し

ま……せなんだ。アハ、ハ、ハ。」

へール「拙者こそ、文科大學出身のチャキチャキでムいます。随分私の経歴は波

瀾重疊、實に慘澹たる歴史に富むで居ります。到底カンナ君如きは傍へも寄れな

いでせう。」

初稚「どうか一つ貴方の面白き來歴や、又今後の御方針を篤り聞かして頂き度い

ものでムいますな。」

へールは茲ぞと云はぬ計り、一步二歩蹂寄り、自分は文科大學出身だと此ナイ

スの前で云つたのだから、茲でこそ文學者振りを發揮し、流暢な詩によりて自分

の來歴を述べ、姫の心を感動させ、自分の文才を敬慕せしむるが第一の手段と

心得、目を白黒させ乍ら歌を以て吾が來歴を述べ初めた。

へール「太陽は天地開闢の昔より

東天を掠めて登り

日々西天に入る

日西天に没して

忽ち暗黒の闇は来る

月は忽ち西天に姿を現はし

照々として天に沖す

月落ち烏啼いて又太陽東天に現はる

満天の星光一時に影を隠し

銀河東西に現はれ或は南北に流る

天は蒼々として際限なく

地は浩々として窮極する所なし

吾は天地の精氣を受けて

満目湘々たる世界に生を稟く

嗚呼人は萬物の靈長天地の花

忽ち長じて人となり

ハルナの都に笈を負ひて登り

文明開化の空気を呼吸し

文科大學の門を出入し

優秀の譽を擔ふて郷關に錦を飾る

時しもあれバルモン軍の大元帥

大黒主の神の神意によつて

人生最勝最貴の軍人となり

晨に月を踏み夕に星を頂きて軍務に鞅掌す

或は河海を渡り浩然の氣を養ふて神軍に従ふ

長驅千里イツミの國

漸くつきしキヨの港

云ふ勿れ下級武官の端と

前途洋々として極まりなく

登龍の望みあり

吾今茲に蹕を留めて生靈を愛護す

窈窕嬋妍たる美人天より下つて此館に在り

何んぞ知らむ意中の人

吾眼前に顯現す

人間萬事塞翁の馬

小官豈輕んずべけむや

願はくは吾肚裡に包める

雄圖を看取したまひて

鴛鴦の契を結ばせたまはむ事を

バラモン神明の前に拜跪して

歸命頂禮祈願し奉る

初稚「オホ、、、。遺文科大學出身丈あつて、どこともなしに餘韻嫻々たる詩歌

でムこぎいます。妾わらはも文學ぶんがくが大變たいへん好きでムこぎいます。本當ほんたうに春陽しゅんやうの氣きが漂ただよひますなア㊦
へール㊦エへ、へ、へ。イヤもうお恥はづかしうムこぎいます。イヤ、カンナ君くん、リュウチ
ナント殿どの、君きみも一つ腦髓なうずみの底そこをたたいて、茲ここで一つ姫様ひめさまの御清聽ごせいちやうを煩わづらはしたらど
うだ㊦

カンナ㊦姫様ひめさま、これから私わたくしが、些すこし計り詩吟しぎんをやります。何卒どうぞ審判しんぱんは貴女あなたにお願ねが
ひ致いたします㊦

初稚はつわか「ハイ、左様さやうならば、私わたくしが臨時審判長りんじしんぱんちやうとなつて伺うかがひませう。定さだめて優い秀しうな詩し
歌かが聞きかれる事ことだと、今いまから期き待たいして居をります㊦

カンナ㊦然しからば御免ごめんを蒙かうむつて一首吟いつしゆぎんじて見みませう。オイ、へールさま、確しつり聞き
て呉くれたまへ㊦

カンナ㊦日は照てる曇くもる雨あめは降ふる 月つきは盈みち照てり虧かけ光ひかる

大空おほぞら渡る日ひの影かげも 月つきの姿すがたも今いま此處ここに

現あれます姫ひめに比くらぶれば 比たと例へにならぬ心こ地ちする

此姫様の顔色は

日の出の神の御姿

心の底は瑞御靈

三五の月と照り渡る

御頭見ればキラキラと

星の如くに寶玉が

輝き渡る鮮かさ

人は天地の御靈物

宇宙の縮圖と聞きつれど

今迄名實相叶ふ

縮圖を眺めた事はない

初稚姫の御姿

天津御國の天人か

但しは龍宮の乙姫か

體一面ピカピカと

内部外部の隔てなく

輝きたまふ水晶玉

金銀瑪瑙玻璃珊瑚

瑠璃の色なす御頭

碑磔の笄かざしつつ

イツミの國に現はれて

これの館に下りまし

衆生濟度の御誓ひ

三十三相備はりし

觀音勢至妙音菩薩

今目の當り伏し拜み

心の闇もスクスクと

晴れ渡りたる尊さよ

戀路こひぢに迷まよふへールさま 得意とくいの文學ぶんがく捻ひねり出だし

七難しちなんき歌うたをよみ アツと云いはせて姫様ひめさまの

御心動みこころうごかし奉たてまつり 望のぞみを遂とげむと焦いらても

如何いかで動うごかむ千引岩ちびきいは 押おせども引ひけども吾々われわれが

弱よわき力ちからの及およぶべき あゝ惟かむながらかむながら神々かみ

神かみの御靈みたまの幸さちはいて もしも縁えにしのあるなれば

これのナイスと永久とこしへに 鴛鴦をしの契ちぎりを結むすばせて

神かみの御爲おんため世よの爲ために 誠まことの教をしへを四方よもの國くに

開ひらかせ給たまへ自在じざいてん天てん 大國彦おほくにひこの御前おんまへに

リュウチナントと仕つかへたる カンナの司つかさが村肝むらきもの

心こころを清きよめて願ねぎまつる あゝ惟かむながらかむながら神々かみ

御靈みたま幸さちはへましませよ 此處ここは名なに負おふバラモンの

キヨの關守せきもり神司かむつかさ いや永久とこしへに鎮しづまりて

三五あななひけう教けうやウラル教けう 其外そのほか百ももの醜道しこみちを

世に布き傳へ人々の

心を曇らす曲神を

捉へて懲す大聖場

夫の司と任せられし

チルテル大尉の副官と

仕へまつりし此カンナ

一日も早く吾思ひ

遂げさせ給へと願ぎまつる。

朝日子の笑み榮えます姫の姿

天津乙女に優りぬるかな。

如何にして心の丈を語らむと

思へどひとり口籠るかも

へール「何事も神のまにまに進むべし

此道のみは詮術もなければ

初はつ稚わか 情なさけある 武もの士のふ達たちに 物もの申まうす

吾わが身みは 實げにも 樂たのしかりけり。

願ねがはくば 神かみの 御おん爲ため世よの 爲ために

心こころあはせて 仕つかへむとぞ 思おもふ

カ
ン
ナ 何なんとなく 未ただもの 足たらぬ 心こころ地ちすれ

姫ひめの 御み心こころ量はかりかぬれば

へー
ル 戀こひ衣しろ着もむと 思おもはば 現うつ身そみの

垢あかを 洗あらひて 清きよくなれなれ。

村むら肝ぎもの 心こころを 神かみに 研みがきなば

天あま津つ乙をとめ女めも 如い何かで 嫌きらはむ

初稚姫 陸奥の蓬ヶ原をかきわけて

萎れぬ花を手折りませ君

カンナ 手折らむと思ふ心の切なさを

汲み取りたまへ珍の淑人

かく互に歌をもつて心を探り合ひつつ、夏の長き日知らぬ間に暮してしまつた。チルナ姫は二人の成功を案じ煩ひつつ、足音を忍ばせ窓の外に立ちよつて、息を潜めて聞き居たり。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第四章 陰使(一五〇四)

遠き神代の昔より
アヅモス山の聖場に

梵天帝釋自在天
大國彦の神靈を

齋きまつりて天王の
森と稱へて朝夕に

謹み敬ひ仕へたる
イツミの國のスマの里

里庄の役と選まれし
館の主バーチルは

アンチーと共に湖原に
漁りせむと出でしより

如何なりしか白浪の
面を眺めて里人が

悲歎の涙にくれ乍ら
野邊の送りを相濟まし

諦め切つた夏の宵
憂きを三年のあともなく

笑を湛へて歸り來る
主従二人の影を見て

枯木に花の咲きし如
老若男女が寄り集ひ

目出度い目出度いお目出度い
天の岩戸が開けしと

二十戸前の倉をあけ
蓄へおきし般若湯

各自に庭に持出して
渴きし餓鬼が川水に

浸りし如くガブガブと

うつつを抜かし酔ひ狂ふ

かかる所へバラモンの

キヨの關守チルテルは

數多の兵士を引率れて

三五教の宣傳使

此家に深く忍びしと

聞くより駒に鞭ちて

實否を探り査ぶべく

威儀を正して入來り

表の門を潜り抜け

目も届かない廣庭を

眼を光らし眺むれば

所狭き迄里人が

うごなはりみて嬉しげに

酒汲みかはし歌唄ひ

狂へるさまを見るよりも

喉の蟲奴が承知せず

つきつけられし杓の香に

相好くづし馬上より

ヒラリと庭に飛おりて

數多の從者と諸共に

舌打ちならしかぶりつく

實にも卑しき酒喰ひ

見るも憐れな次第なり。

チルテルは酒と女にかけては目も鼻もない厄介者である。テク、アキス、アールの三人に長柄の杓で鼻先へ般若湯を突付けられ、忽ち自分の使命をケロリと忘れたものの如く、口汚く群衆の中へ交つてガブリガブリと呑み始めた。テクは夢中になつて、巻舌を使ひ乍ら、彼方此方とゴロつき始めたり。

テク「これはこれは、チルテルのキャプテン様、よくマア御入來下さいました。

今日は新主人バーチルが久し振りで歸國を致しまして、其祝宴を開いて居る所でムいます。第一番にお役所の方へ招待状を出すのが本意でムいますが、何と申しても、清廉潔白なお役人様、お身分が違ひますから、此テクのやうなスパイとは同じやうには参りませず、つい御案内も申かね遠慮を致して居りましたが、キャプテン様の方から御出張下さいませとは、何と云ふ光榮でムいませう。サア何卒酒の泉は渾々と湧き出でて盡きませぬ。何卒思ふ存分おあがり下さいまして、底抜け騒ぎをやつて頂きたうムいます。此座敷は露天でムいますが、奈落の底から搗き固めておきましたから、メツタに床の落る氣遣もムいませぬ。何卒心おきなく御召上り下さいませ。主人のバーチルに代つて、新番頭のテクが、及ばず乍ら

御挨拶を申上げます」

と右の掌で無雑作に鼻つ柱をプイと左の方へ押し、脇で顔の汗を拭ふ。

チルテル「お前はテクぢやないか。何とマア氣の早い、辭職の許可も得ずに、勝手に番頭になるといふことがあるものか。バラモンの御威勢を恐れぬか、不届者だなア」

テク「モシ、キャプテン様、さう酒の座で小難しい面をなさいますと、折角甘い酒が不味くなつて了ひますワ。マア、お小言は改めて後に承はりませう。此酒の面みて笑はない者が何處にありますか。サア一つお酌を致しませう。裏の別室におかかへ遊ばした、あのナイスのお酌ならば、一入お酒が甘いでせうが、どうもそれ丈は不便でムいますなア、エへ、へ、へ、」

チルテル「どうかして、お前、一つあの女をチルナに内證でソツと招んで来てくれまいかな、褒美は幾らでもやるからな」

テク「へ、畏まりました。其代りに褒美として、お金は要りませぬ、又お酒はここで澤山に頂かうと儘ですから、夫れ以外のものを戴きたいものでムいます」

チルテル「何が頂きたいと云ふのだ」

テク「へー、カンが頂きたいのでムいます」

チルテル「カンなればすぐに出來るでないか、かう冷酒許りガブガブやつてゐては面白くないからのう」

テク「ハテまあ、カンの悪い、カンと云つたらカンですがな。酒のカン何かとは違ひますよ。ポンポン　カンカンと人民を捉まへて威張り散らす官ですよ」

チルテル「成程、それなら成功の上、目付頭にしてやらう」

テク「滅相もない、そんな卑しい職掌は御免蒙りたうムいます。せめてリユーチナントに拔擢して欲しいものですな」

チルテル「うまく、チルナに分らぬやうに、此處へあのナイスを引ぱつて來よつたら、リユーチナントにしてやらう。一つ骨を折つてみてくれ」

テク「滅相な、此頃は何事も先金とか手附とかがなければ、一切の取引を致しませぬから、若し不成功に了つたら御返しするといふことにして、兔も角リユーチナントに命じて下さいませ。さうでない、カンの奴、リユーチナントだと云

つて威張り散らしますから、裏口から忍び込むだ矢さきに、カンナの奴に「コラツ」と一喝くはされたが最後、手も足も出ませぬ。私がリユーチナントならば同役ですからな」

チルテル「ア、仕方がない、臨事憲兵中尉にしてやらう。併し餘りケンペーらしく云ふと剥奪するから、さう思へ」

テク「ヤア有難う。之からテクのテクダで、巧く引張つて來やせう、マア暫く待つてみて下さい。そしてテクの腕前を見て頂けば、光榮です。……あゝあ忙しい

ことだ。バーチル家の大番頭兼リユーチナントと、俄に出世をしたものだから、俄に事務が煩雑になつて來たワイ。矢張無官の太夫の方が可いかなア」

チルテル「無官の太夫がよければ、今の言葉は取消す」

テク「滅相な、一旦武士の口から出たお言葉、不調法もないに、取消は許しませぬぞ。上官の一言は金石よりも重いぢやありませんか。假りにも朝令暮改の事を仰有いますと、忽ち信用が地におちますぞ」

チルテル「エー仕方がない。それならバラモンの中尉として能く注意して、女房

のチルナ姫に分らぬ様、日の暮れたのを幸、うまくそこは辨舌を使つて、ナイスを此處へ連れて来てくれ。さうして酌をさせて大勢の奴にアツと云はせ、俺の腕前を遺憾なく皆の奴等に見せびらかしてやるのも愉快だ。サア早く行つた行つたテク『エへ、へ、こんなことに抜目のあるテクぢやありません。サア之から一走り行つて参ります。マア悠り御酒でも召し上りませ……ヤア、コレワイサの、シテコイナ』

と妙な身振をし乍ら、頬被りをクツスリと締め、群衆の中を潜つて、足もヒヨロヒヨロ、チルテルが駐屯所の別室を指して忍び行く。

空は黒雲に包まれて、二つ三つ雲の綻びから、微な星が瞬いてゐる。忍びよつたる五月暗、障子の明りをあてに、足音を忍ばせ窺ひみれば、影法師が三つ映つてゐる。そして一人は女、二人はどうも男らしい。テクは『ハハア、あの影法師から考へてみると、カンナ、ヘールの兩人とみえる。抜目のない奴だな。キャプテンさまの不在を伺ひ、うまく手に入れやうと野心を起して襲撃してゐやがるのだナ。併し彼奴も氣が利かないワイ。一人の女を口説くに連れを誘うて行くとい

ふ奴がどこにあるか。併し困つたことには、あんな奴が二人も側にひつついてゐやがると、肝腎要の俺の使命が果せない。ここは一つ肝玉をおつぽり出して、憲兵中尉で脅かしてやらう。そして「不義者見付けた……」と大喝一聲、散り散りバラバラと小さくなつて逃失せる様にやるのだな、エツへへへ。斯うなると、リユーチナントも有難いものだ」と獨言ちつつ故意とに足音高く窓の外面にすりよつて、

テク「やアやア、某は今日チルテルのキャプテン殿より改めて憲兵中尉の要職を授けられたるテクでゐるぞよ。女一人の居間へ入来り、密々と囁いてゐる奴は何者だ。大抵障子の影に仍つて、其誰人なるかは分つてゐるが今日は新任の祝として見て見ぬ振を致す。サア早くトツトと姿を隠し、元の職に忠實についたがよからう。グヅグヅ致して此方に面を見られたが最後、其方は忽ちリユーチナントもユウンケルも棒にふらねばならぬぞや、エエン。鼻の下の長い代物だなア」

カンナ、ヘールの兩人はテクの言葉を聞いて、
「ヤア此奴ア大變だ。こんなことをキャプテンに報告されようものなら、サツパ

り駄目だ。エー仕方がない、こちらに弱点があるのだから、ここはマア辛抱して退却することにせうかい」

と小聲に囁き、此場をつつと立つて暗に隠れようとする。初稚姫は故意と平氣な顔で、

初稚「あのカナナ様、ヘール様、マアいいぢやムいませぬか。種々と珍しいお話
を聞かして下さいまして、妾も大變得る所がムいました。モウ暫く御悠りなさい
ませ。これからクラブイコードでも弾じて御慰めに供しませう。そしてお茶でも
悠りあがつて御歸り下さいませ。偶々お越し下さいまして、何の御愛想もムいま
せぬから」

カナナ「へ、有難うムいます。今御聞の通り、窓の外に誰かが来て居りますから、
貴女の御迷惑になつても氣の毒でムいます。兔も角一度退却致しませう」

初稚「何を仰有います、妾は決して迷惑とは感じて居りませぬ。天下晴れて文學
のお話を聞かして頂いて居るのでムいますもの。貴方と私の中に怪しい關係があ
るのでなし、誰がお出になつても遠慮は要りません。却て左様なことをなされ

ますと、痛くない肚を探られ、貴方方の御迷惑になるかも知れませぬよ。貴方も立派な軍人様ぢやムいませぬか、酔どれさまの一人や二人が恐ろしいのでムいませぬか

カナナ「へ、別に恐ろしいこともムいませぬ、併し乍ら後がうるさうムいますからなア

初稚「うるさい心さへ持つてゐなければ構はぬぢやありませんか。人の口には戸が立てられぬと申しまして、世間の噂を気にしてるやうなことでは、到底世の中に立つて目ざましい働きは出来ませぬよ

カナナ「成程、お説御尤も、然らばモウ暫く御同席を願ひませう。オイ、へール、かう二人も居るとカサが高いから、お前暫く退席してくれまいか、關所の方も何時用が出来るか分らぬからのう

へール「へッへ、仰有いますワイ。其手に乗るやうなへールぢやありませんか

初稚「何卒お二人様、御悠なさいませ。何も御心配は要りませぬ。……コレコレ

テク様とやら、そこでは蚊がたべます。何卒お這入りなさいませ」

テク「イヤア、お出たな、矢張り、リュウチナントといふ聲を聞いて、幾分か心が動いたとみえるワイ、イヒ、、、」

と幽かに笑ひ乍ら、「オホン」と一つ咳拂、表戸をソツとあけ、故意とすました面をして、直立不動の態度を示し、

テク「これはこれは、古今無雙のナイス様、私は新中尉でムいます。一寸キヤプテン様の命令に仍つて、貴方に折入つての御願がありますので、使者に罷り越しました。何卒此等兩人を少時遠ざけて戴きたうムいます」

初稚「お二人様、何だか御用があるさうでムいますから、失禮でムいますが、一寸少時席をお外し下さいませぬか」

カンナ「へー、長いことですか、……長ければ永いで、此方にも事務上の都合がムいますから、實の所は忙がしい中を繰合せて、奥様の御命令……ウン否々、奥様の目を忍んで一寸御機嫌伺ひに参つたのでムいますからなア」

初稚「奥様は御機嫌が宜しうムいますかな、何うしたもののか、私が御面會を申込

んでもお忙しいと見えて、まだ會つて頂けませぬ」
へール「そらさうでせう。何と云つても、恪けて仕方がないのですからなア、へ
ツへへへ。オイ、カンナ、姫様の請求に仍つて、暫時離席することにせうかい」
とスゴスゴと立出で暗に忍んで二人の話を聞いてゐる。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第五章 有升(あります) 一五〇五

初稚「もしテクさまとやら、キャプテン様から妾に御用とは如何なる事でムいま
すか。何卒速にお傳へを願ひます」
テク「私はチツと酩酊致して居りますから脱線するかも知れませぬ。前以てお断
りして置きます。あの……外でもムいませぬが……それ……さう短兵急に追
撃されては應戦の……餘裕がムいませぬ。先づ美人砲臺の……沈黙を待つて徐に

攻勢に向ひませう」

と俄に騙されて中尉の稱號を貰つた嬉しさに何でもかでも軍隊の用語を使つて談判をやらうと考へて居る間抜け野良だ。

初稚「砲臺だの、攻撃だの、應戰だのと、随分殺伐なお言葉ですな。どうか、もう少しハンナリと仰有つて頂き度いものでムいます」

テクは「氣を付け」の姿勢をとり一方の手を乳の邊りに上向けに擴げて彌宜が笏板を持つた様なスタイルになつて、稍反り乍ら、

テク「私は中尉であります。今日大尉殿の命により傳令兼斥候として此陣營へ特派せられた者であります。その使命と申すのは外でもありません。アヅモス山の南麓バーチルの陣營に於て兵士の凱旋祝賀會が舉行されました。それに就いて大隊長殿が私を特使として此營所へ御派遣になつたのであります。酒宴の席には男ばかりでは、どうも興味薄きを以て、天下無雙のナイス初稚姫殿を召集し來れとの命令であります。言はば此テクはキャプテンの軍使であります。速に軍律に従ひ、否上官の命に従ひ、御出張、否御出陣あり度きものであります」

初稚「オホ、、、テクさま、貴方どうも硬い事を仰有いますな。妾はお酒は嫌ひでムいますから陣營等には到底參る事は出来ませぬ。又陣中に女が參りますと軍規が亂れますから、之ばかりはお斷り申します」

テク「これは怪しからぬ。拙者を何と心得てムる。拙者は憲兵中尉でムるぞ。チツと注意をして物を云つて頂かないと實に困るのであります。御命令に違背なさと軍律に照し、銃殺の刑に處せらるのであります。ここは篤と御勘考なさらねばならぬ所であります。實の所はキャプテン様は貴女の容色に屬魂打込み、殆ど魂を抜かし、矢も楯も堪らないと云ふ今日の戦況であります。どうしても落城せなければ臼砲なりと野砲なりと發砲して占領して來いとこの嚴命であります。さア早く軍門に御出頭あらむ事を願ふあります」

初稚「これは又迷惑な事でムいますナ。どうか左様な事を仰有らずにお歸り下さいませ。貴方はお酒を召して居らつしやいますから、左様な事を申されるのです。苟くも人の頭とならるべきキャプテン様が、妾の如き女風情を陣中にお招き遊ばす道理がムいませうか」

テク「これはしたり、女が陣中に行けないと云ふ事がありますか。上野の形名といふ軍人の女房は陣中に入つて夫に酒を勧め、軍功を立てさせたぢやありませんか。貴女は第二夫人様、……否第一夫人の候補者かも知れませぬ。さア何卒早く私に對し、よき報告を願ひます。否私と共に御出陣あらむ事を希望する次第であります」

初稚「妾は何と仰せられましても陣中に足を入れる事は、どうしても心が進まぬのであります。何と仰せられても行かないと云つたら行かない覺悟であります」

テク「もし、お姫さま、私のお株をとつちやいけませぬよ。「アリマス」は軍人の専用語ですからな」

チルナ姫は今迄木蔭に立つて二人の問答を聞き、自分の夫が初稚姫に戀慕してると云ふテクの報告を聞いて殆ど狂亂の如くなり、樹蔭に地團太を踏んで居る。その足音にカンナ、ヘールの兩人はハツと氣がつき、擦り寄つて見れば、何だかチルナ姫の様である。カンナは小聲で、

カンナ「もし、奥さまぢやムいませぬか」

チルナ「お前、今の話を聞いたか。旦那様があの女に屬魂惚れてゐると云ふ事だから、私の吩咐けたやうに何故早く要領を得て了はないのか」

カンナ「へー、要領を得たいのは山々でゐますが、そうチャク　チャクと空腹にお茶漬を食つた様には行きませぬからな」

チルナ「エー、ぢれつたい。グツグツして居るとどんな事が出来るか知れぬぢやないか。荒男が二人も居つて、あんな阿魔女を、どうする事も出来ぬとは腑甲斐ないものだな。さア早く肝玉を出して何とかなさらぬかいな」

へー「奥様、もしも、やり損なつたら、貴女後引受けて下さるかな」

チルナ「そんな心配は要りませぬ。何でもかでも強く行きさへすれば何んな事でも成功しますよ。グツグツしてるとあの女を連れて行つて旦那様につき合すかも知れないわ。エー、悔しや、残念や、口惜しやな。男が二人も居つてあれ位な女を如何する事も出来ぬのかいな」

カンナ「奥さま、そこ迄仰有るのなら一つやつて見ませう。然し一寸手荒い事をして同情心を失つては駄目ですから、ここで一つ歌でも歌つて心を動かす目的を

達たつして見みませう。もし奥おくさま、貴女あなたも一ひとつ作つくり聲こゑをして應援おうえんして下ください』
チルナ『さア早はやくやつて御覽ごらん、いかなかつたら妾わたしが應援おうえんするから』

カンナ『バラモンの軍いくばくの司つかやここにあり

いざ言問こととはむ初稚はつわかひめ姫ひめに』

へール『姫様ひめさまよ汝なれに迷まよひて忍しのび來くる

男心をとここころを見捨みすて玉たまふな』

チルナ『チルテルの心こころ汚きたき武士ものに

身みを任まかしなば世よに笑わらはれむ。

チルテルの軍いくばくの君きみは世よに稀まれな

チルナの姫が控へますぞや。

吾戀は大海原を渡る舟

浪を凌ぎて神島へ行く。

初稚の姫の命よ逸早く

館を立ちて月へ出でませ

初稚姫は中より、

初稚姫 月の國ハルナの都に神在すと

慕ひて進む吾なりにけり。

さり乍らイツミの國に今暫し

足を留めて身をや休めむ

チルナ「此里このさとに足あしを留とどめて居ゐますなら
カンナ、へールに身みを任まかしませ」

初稚姫はつわかひめ「身みは一つ如何いかで二人ふたりに仕つかふべき

妾わひめは神かみにのみぞ仕つかふる

チルテルの軍いくさの君きみは賢かしこしと

聞きけども如何いかで身みを任まかすべき。

若草わかぐさの妻つまを持もたせるチルテルの

君きみに仕つかへて堪たまるべきかは。

チルテルの厚あつき情なさけに絆ほだされて

暫しばし息いきをば休やすめ居ゐるのみ」

テク 初稚姫神の命はキャプテンの

第二夫人と定つてあります。

どうしても嫌と云ふなら引張つて

陣屋に進む覺悟あります。

さア早う行かねば酒が冷めまする

酒の肴に使ふあります。

キャプテンの清き男子を振棄てて

カンナにつけば身を削られむ。

カンナてふ奴は人をば削り喰ふ

鬼の様な男あります。

へールとはカンナをかけて削る様に

一枚一枚へール戀衣

カンナ「もう自暴自棄だ勇猛心を發揮して
乗るか反るかをやつて見ませう。」

おい、そこだ、テクの奴めがやつて來て

戀の邪魔する面の憎さよ。

此上は直接行動腕づくだ

初稚姫を擔げて退かむ。

肱鐵をうまい辭令で誤魔化され

男の顔が何處で立たうか」

初稚「テクさま、何卒あの通り外に皆様が種々と仰有つて居ますから妾は大變迷惑致します。何卒歸つて下さい。そしてキャプテン様に御用がおりなされるの
ら歸つて悠りお會ひませう。又酒の相手も及ばず乍ら勤めさして頂きますと、
何卒そこは宜しく云つて下さいませ」

テク「それでも旦那様が大變に惚れて居らつしやるのだもの、私だつて貴女に來

て頂いたかなくては中尉ちゆうゐもゼロになりますからな。私わたしを中尉ちゆうゐにして下くださるのなら何卒どうぞ
早はやく來きて下ください。之これが私わたしの一生いっしやうの願ねがひであります」

テクは自暴や自棄け糞くそになり大おほきな聲こゑで歌うたひ出だした。

テク「駄目だめだ駄目だめだ皆みな駄目だめだ 　　こんな綺麗きれいな面つらをして

バラモン軍ぐんのキャプテンが 　　お言葉ことばさへも匆はねつける

容色きりやうがよいとて自慢じまんすな 　　お前まへの様やうな阿魔あまつちよ女よは

世界せかいにや澤山たくさんある程ほどに 　　慢心まんしんするのも程ほどがある

青瓢箪あをべうたんに目めと鼻はなを 　　つけたる様やうなスタイルで

猪口ちよこざい才せん千萬ばん美人びじん面づら 　　愛想あいそも欲得こそもつき果はてた

外そとにこむるはカンナさま 　　戀こひに狂くるふたへールさま

思おもひ切きつたが宜よろしかる 　　こんな分わからぬスベタ女め郎らう

何程なにほど口説くどいて見みた所ところで 　　テツキリ駄目だめでこむるぞや

俺おれも折角せつかくキャプテンに 　　憲兵中尉けんべいちゆうゐの職名しよくめいを

頂いただきなが乍ならむザムザと 返かへさにやならぬ破は目めとなり
 むかついてむかついて堪たまらぬが さうかと云いつて此この阿あ魔まを
 どうする譯にも行きはせぬ あれ程ほどチルテル・キャプテンが
 現うつをぬ抜めかし目め尻じり下さげ 寝ねても覺めても姫ひめ々ひめと
 大だい切じの大だい切じの奥さまを 邪じゃ魔ま者もの扱あつかひになし乍ら
 酒さけの場席せきへ引張ひつばつて 男をとこ前まへをば誇ほこらむと
 なさつて△ごるがお憐しい あんな夫を持つ女房にようぼう
 嘸さぞや心が揉めるだろ チルナの姫ひめのお心こころが
 氣きの毒さまになつて來た 女をんなは魔物まものと云ふ事は
 豫かねて人から聞きいて居あた 女をんなの涼しい圓い目で
 一ひと目め睨にらめば鐵てつ城じやうも ガタガタガタと覆へし
 山やまも田地でんぢも家倉いへくらも メチヤ メチヤ メチヤにして了しまふ
 こんな女が出て來たら バラモン教けうのキャプテンも
 酒さけで殺した鱒の様に グニヤ グニヤ グニヤと相さう好がうを

崩くづして腰こしを拔ぬかしつつ

肝腎かんじん要かなめの軍務ぐんむをば

忘わすれて遂つひには免職めんしよくの

悲運ひうんに落おちねばならうまい

思おもへば思おもへばお氣きの毒どく

此このテクさまも此この使命しめい

スツカリ思おもひ切きつたぞや

序ついでにスパイの職掌しよくしやうも

返上へんじやう致いたしてバーチルの

家いへの番頭ばんとうとなり濟すまし

朝あさから晩ばんまで甘酒うまざけを

思おもふがままに飲のみ倒たふし

短みじかい浮世うきよを面おも白しろく

飲のめよ騒さわげよ一寸いっすん先さきや暗やみと

踊をどり狂くるふて暮くらしませう

何なによりかより酒さけの味あぢ

美人びじんの如ごときは吾われ々は

決けつして物ものの數かずでない

あゝ惟かむ神な々々ながら

爛かんして飲のんだ酒さけの味あぢ

冷酒れいしゆ鯛汁たいじうの吾身わがみには

これに勝まさつた樂たのしみは

三千さんぜん世界せかいにありませぬ

初稚はつわか姫ひめの阿魔あま女つちよさま

左様さやうなら御免ごめんを蒙かうむつて

キャプテン様さまに何事なにごとも

笠かさに笠かさをばかけ乍ながら

悪わるく注進ちうしん仕かまつる

カンナ、ヘールの兩人に 現をぬかして脂下り
どうしてもこしてもキャプテンの 側には死んでも行かないと
駄々をば捏ねて出て来ない 尻太い女と詳細に
注進するが宜しいか よくよく思案するがよい
もうかうなれば自暴自棄酒だ さア爛酒だ爛酒だ
そろそろ酔が覺めかけた 一刻も早く歸つて酒を飲もう
皆さまお酒へ左様なら

と疊障りも荒々しく腹立ち紛れに四肢を踏みならし、暗に紛れて歸り行く。
(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二篇 厄氣恪々

第六章 雲隱（一五〇六）

アキスは、大柄杓を振り翳し乍ら群衆の中を前後左右に駆け廻り、數多の來客を十二分に喜ばせむと所在力を盡し、歌を歌つて酒の座の興を添へたり。

アキス、アヅモス山の森林に 鷺が巢を組む鷹が棲む

それ故スマの里人は 雀や百舌鳥の顔見ない

聲さへ聞いた事はな 狸々さまもいつしかに

一つも残らず逃げ去つて 鷺と鷹との世の中だ

さはさり乍ら今日こそは 百舌鳥も雀も【みそさぎ】も

千鳥萬鳥やつて来て チイチイ パーパー、パタパタと

お酒に酔ふて舞ひ狂ふ こんな目出度い事あるか

皆さま遠慮は要らないで 堤を切らして呑みなさい

あれあの通りバラモンの キヨの關所のキャプテンが

お出いでなさつて吾々われわれと

面白おもしろさうに歌うたひつつ

スマの里さとにて随ずい一の

バーチルさまのお館やかたに

現あらはしたるは昔むかしから

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

眞純ますみの彦ひこや伊太彦いたひこや

音おとに名な高たかき人ひとびとが

三五教あななひけうやバラモンの

和氣わき靄あい々と酒宴さかもりの

四海同胞しかいどうほうの眞相しんさうを

皆様喜みなさまよろこびなされませ

アヅモス山さんの狸しじ々じは

御魂みたまは吾等われらの魂たましひに

一いつ緒しよに酒さけの座ざについで

勇いさむでこまる氣きの輕かるさ

富豪ふうがうの首陀しゆたと聞きこえたる

官民くわんみん一致いつちの瑞象ずあしやうを

例ためしも知しらぬ出でき來こと事とだ

玉國たまくに別わけの神司かむつかさ

三千彦みちひこ司つかさデビス姫ひめ

これの館やかたに出いでまして

隔へだてを全まく取除とりぞき

席せきに連つらなり給たまひしは

現あらはし給たまひし神かみの旨むね

イツミの國くにのスマの里さと

今は姿すがたも見みえねども

いつの間まにかは憑かかりまし

老若男女の嫌ひなく 一人も残らず酒に酔ひ

下戸の病は何處へやら 上戸許りに成り果てて

泣くやら笑ふやら怒るやら 千姿萬態八衢の

其有様を委曲に 現はしたるぞ面白き

飲めよ騒げよ踊れよ狂へ 舞へよ唄へよいつ迄も

二十戸前の酒の倉 一つも残らず呑み乾して

狸々の神へ御奉納 狸々彦や狸々姫

親方さまに持った私 お酒を呑まねば努まらぬ

あゝ面白い面白い これも全くバラモンの

尊き神の御恵 祝へよ祝へよ勇めよ勇めよ

バーチルさまの萬歳を 皆さまお聲を揃へつつ

稱へて下さい頼みます 萬歳、萬歳、萬々歳

鶴は千歳の春を舞ひ 龜萬歳の夏謳ふ

春と夏とは萬物の 茂り榮ゆるシーズンだ

あゝ惟神々々かむながらかむながら 爛酒かんぎけなりと冷ひやなりと

思おもひ思おもひにドツサリと 飲のんで卷まけ卷まけ皆みなの人ひと

猩しやう々の姫ひめの御心みこころを 慰なぐさめまする方法ほうほうは

お酒さけを呑のむより外ほかは無ない あゝ惟神々々かむながらかむながら

神かみのお神酒みきを頂いたきて 皆みなさまこれから確しつりと

心こころを協あはせ力ちからをば 一ひつになしてバーチルの

里庄りしやうの君きみを親おやとなし スマの里さとをば平たいけく

いと安やすらけく賑にぎしく 富とみて榮さかえていつ迄までも

天國てんごく淨土じやうどを築きつき上げ 神かみの恵めぐみを蒙かうむりて

人ひとの人ひとたる本分ほんぶんを 盡つくさにやならぬスマの里さと

祝いはふ時ときにはよく祝いはひ 遊あそぶ時ときにはよく遊あそび

呑のんで食くらふて働はたらいて 面おも白しろ可笑をかしく此世このよをば

上うへ下した揃そろふて暮くらしませう これが第一だいいち神様かみさまに

對たいし奉まつりて孝行かうかうだ サアサア飲のんだサア飲のんだ

踊れよ踊れよ舞へよ舞へ
何程踊り舞ふたとて

金輪奈落の地底より
築き上げたるこの床は

滅多に落ちる事はない
土で固めたこの庭は

金剛不壞の如意寶珠
案じも入らぬ法の船

あゝ惟神々々
私はこれで休みます

皆さま代つて歌つてお呉れ
飲み食ふ許りが藝でない

こんな所で隠し藝を
天晴出して皆さまに

アフンとさして腮を解き
お臍の宿換さすがよい

天下御免のこの酒宴
行儀も糞も要るものか

皆各自に無禮講
これが誠の天國だ

チルテルは何時の間に
十數人の部下を引き
率れ奥の間に闖入し、
酒を呑み草
臥れて睡つて居るデビス姫を、
引つ擔たげ、猿轡をはめ館の裏門よりソツと抜
け
出で、吾館へ歸り倉の中へソツと入れて置いた。
三千彦はフト目を醒まし傍を見

ればデビス姫の姿が見えなくなつて居る。併し乍ら三千彦はデビスが便所へでも行つたのかと、餘り氣にも留ず、又眠つて仕舞つた。伊太彦は群衆の廣庭で夜露を浴びて泣いたり笑つたり小競合をして居る有様を眺めて興がりながら、「ブラリ」ブラリと裏門の方へ廻つて行く。

十數人の男が、夜目に確り分らねど、女らしきものを擔いでソツと逃げ出すのを眺め乍ら、暫く腕を組んで考へ込んだ。「あれはもしや、デビス姫では無からうかな、何とはなしによく似て居るやうだ。併し乍ら迂つかりした事を云ふて

「ドン」をつかれちや大變だ。兔も角もデビス姫の寢室を調べて見む」と一人諾き乍ら幾つかの間を潛つていつて見ると行燈のほの暗きもとに三千彦が唯一人睡つて居る。伊太彦は矢庭に座敷に駆け入り、三千彦を揺り起しながら、

伊太「オイオイ三千彦さま、デビス姫さまはどうしたのだ」
三千「アー吃驚した。よく睡入つて居る所を揺り起されて魂の入り損いをする所だつた。大變な夢を見て居たのだよ」

伊太「オイ夢どころかい。デビス姫さまはどうなつたかと思ふか、確りせぬかい」

三千「實は今デビスが、バラモンの連中に何處かへ連れて行かれた夢を見て居たのだ。ハテ不思議な事があるものだ。姫は何處へ行つたのだらうなア」

伊太「お前の夢はテツキ正夢だ。俺は睡れぬままに大勢の酒酔ひを見物しながら裏門へ廻つて見ると、十五六人の荒男が一人の女を擔いで逃げて行きよつたが、夜のことと明瞭り分らぬので、若しデビス姫さまぢやないかと此處へ調べに来た所だ。やや、是は斯うしては居られない。何とか工夫をせなくてはならない」

三千「オイ伊太彦、餘り騒がないやうにして呉れよ。却て敵に姫を殺されるやうな事があつては詮らないから、兔に角分る所迄黙つて居るに限るからなア。併し乍らお前はあの姫を攫つて行つた奴は誰かと思ふ」

伊太「俺の考へではバラモン軍のチルテルが部下だと思ふよ。今迄一生懸命に酒を飲つて居たが、俄に影が見えなくなつたので裏門へ廻つた所、女を擔いで逃げよつたのだからテツキあれに定つて居る。俺が應援してやるから今からチルテルの館へ忍び込んで様子を考へ、取り返して來ようぢやないか」

三千「ヤアそいつは有難い。御苦勞だがお世話にならうかなア。併し玉國別さま

には今少時内證だよ

伊太「ウン承知だ。サア裏門からソツと偵察に行かう」

と寢衣の儘二人は裏門より飛び出し、關守の館をさして進み行く。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第七章 焚付(一五〇七)

チルナ姫は一閒に入つて愒氣の角を生やしながら、自分の髪をひきむしつたり、笄を投げたり、鏡臺を引つくり返したり、室内は俄に二百十日の嵐が吹いたやうになつて居る。そこへ一杯機嫌で歸つて來たのは、キャプテンのチルテルであつた。チルテルは門口から大聲を上げ、チルテル「オーイ女房、今戻つたぞや、早う開けないか。何だ中から戸に突張をこうて居やがると見えて、押しても引いても開きやしないわ。あゝこんな事なら、

兵士を連れて歸つたらよかつたに、誰奴も此奴も皆酒に喰ひ酔つて【ドブ】さつて仕舞よつた。今日は山の神の面體に低氣壓が襲來して居たと云ふ事は豫期して居たのだが、これや又どうした事だい。オーイ開けぬか、開けぬか」と戸を一生懸命に握り拳で叩いて居る。

カンナは驚き急ぎ戸を開け、

カンナ「あ、旦那様ようお歸りなさいませ」

テルテル「ウン、あまり軍務が忙しいので、つい遅くなつて、奥も待ち兼ねたであらうなア」

カンナ「へエ、あの奥さまでですか、大きな聲では申されませぬが、どうも形勢が險悪なので容易に近よる事は出来ませぬ。貴方がお歸りになつたら、一騒動が始まるであらうとビクビクもので待つて居ました。何卒喧しう仰有らずにソツと寢間に這入つて寢んで頂きたいものですなア」

テルテル「何、奥が怒つて居るのか。イヤ、そいつは面白い。一つ怒らして自分の方から飛び出て呉れるやうにと待つて居たのだ。オイ、カンナ、貴様によい土

産げを持つて歸かへつた。第一號だいいちがうの倉庫さうこに入れてある、頗すこぶる的てきのナイスだよ。一つ貴様きさまが女房かないを焚たき付け自分じぶんから飛とび出だすやうにして呉くれたら、あのナイスをお前まへの女房にようばうにしてやらうとソツと掠奪りやくだつして來きたのだ。隨分ずいぶん立派りつぱなものだぞ

カンナ「遠さすがはキャプテン様さま、種々いろいろとお氣きをつけ下くださいまして有難ありがたうムいます。到底裏ていつらのナイスは私達わたしたちの挺てこには合あひませぬからな」

チルテル「何なに、裏うらのナイスにお前まへは物ものを言いつたのか」

カンナは頭あたまをガシガシと搔かき乍ながら、云いひ悪にくさうに、

カンナ「ハイ、一寸序ちよつとついでにナイスの意向いかうを探さぐつて見みました所ところ、仲々なかなか偉えらいものですな。

テクの奴やつ、俄中尉にはかちうゐだと威張あばつて出でて來きましたが、一耐ひとたまりもなく言いひ込こめられて、

不減口へらずぐちを叩たたいて遁走とんそうしました。本當ほんたうに、人間にんげんの挺てこに合あふナイスではムいませぬわ。

そして「キャプテン様さまにお目めにかかつて詳くはしいお話を承うけたまはりませう」と澄すまし込こ

んで居ゐるのですもの、お喜よろこびなさいませ。屹度脈きつとみやくがありますよ」

チルテル「ナイスの事ことはお前達まへたちの力ちからではどうする事ことも出で來きぬ。構かまふて呉くれるな、

いらいだてをすると却かへつて一いちも取とらず二にも取とらずになつて仕舞しまふ。ああして俺おれの家うち

へ二三日置いて呉れと云ふのだから、俺に思召が有るのに違ひない。併し俺には女房があるから、あのナイスも遠慮して居るのだ。其處を「それ」氣を利かさなければ駄目だからなア。女房さへ無ければ、放つて置いても俺に靡いて來るのは既定の事實だ、ウフ、ハ、ハ、

カンナ「一つそれでは奮闘して見ませう。奥さまを怒らせうと思へば、些とは旦那の悪口も云ひますから豫め御承知を願ひます」

チルテル「よし、目的さへ達すればよいのだ、手段は選ばない。そこはお前に任して置く。甘くやつて呉れ。併し餘り怒らして自害でもやつて呉れると困るよ。其處は見計らつて、家を飛び出す程度に計らつて呉れ」

カンナ「よろしい、何と難しい事を頼まれたものだが、一つ計らつて見ませう……奥さまのお心がお可憐いわい」

チルテル「オイ、そんな氣の弱い事でどうしてこの大任が果せるか。もつと心を鬼にして行かないと駄目だぞ」

カンナ「ハイ、氣の毒だと云つたのは社交上の辭令ですよ。氣の毒ながら、おつ

放り出るやうに盡力して見ませう、貴方は離家へ行つて悠りお楽しみなさいませ。さうして奥さまの部屋から障子に影が見えるやうに仕組んで貰はなくは駄目ですよ。成可くは抱擁キツス握手などの光景が見えるやうに仕組んで貰い度いものですな。私が「オホン」と大きな咳拂ひをしたら握手するのですよ。そうして甘く寫して貰ふのですよ」

チルテル「恰で幻燈屋見たやうな事をするのだなア」

カンナ「そこで現當利益が現はれるのですもの、エへ、へ、へ」

チルテルはヒヨロヒヨロと千鳥足にて初稚姫の居間へ進み行く。

チルテル「あゝ姫様随分お退屈でムいませうなア。早く歸つてお話相手にならねば濟まないと思ふて居ましたが、何分軍務が忙しいのでつい遅くなつて濟みませぬ」

初稚「どうも、いかい御厄介になりましたして申譯がムいませぬ。大變な御機嫌でムいます。随分お酒を飲つたと見えますな」

チルテル「イヤ一寸九一升ばかり引つかけたものだから些とばかり酩酊致しまし

た。どうも濟みませぬがお茶なりと一杯下さいませぬか、貴女の柔かいお手々で
汲んで頂けば一層美味しいでせう」
初稚「オホ、、、。何御冗談仰有います、貴方奥様に御挨拶なさいましたか。大
變にお待ち兼の御様子でムいましたよ」
チルテル「奥さまと云へば奥にすつ込んで居ればよいものです。

あなた見てから家の嬢見れば

千里奥山古狸。

アハ、、、、いやもう氣に喰はない女房ですよ。二つ目には悋氣の角を生し、喉
笛に喰ひ付くのですもの、あんな女房を持った夫程不幸なものは有りませぬわい。
アハ、、、、」
初稚「何を仰有います。あんな貞淑な奥様が何處にムいませうか、悋氣をなさら
ないやうな奥様だつたら駄目ですよ。きつと外に心を移して居るのです。天にも

地にも貴方一人と思召すからこそ偶には悵氣もなさるのですからな。サア早く奥様のお氣の安まるやうにお言葉をかけなさいませ。其上にて妾の傍にお出下されば、妾も奥様に對し大變氣が樂でムいますからな」

チルテル「兔も角も足が立ちませぬ、暫く此處で悠りさして下さい。あゝ苦しい苦しい、誰か胸を擦つて呉れるものは無からうかな。あゝ苦しい苦しい。姫さま誠に濟みませぬが、一寸私の胸を擦つて頂けませぬか」

初稚「そんなら、お背を擦らして頂きませう」

と故意とに後へ廻り背を擦つて居る。一方カンナはチルナ姫の居間に慌ただしく駆け入り、

カンナ「もし、奥様」

と小聲になつて、

「御用心なさいませ。夕、大變でムいますよ。貴方の御主人は今日も二人の美人に手を引かれ、目を細うしてゐらつしやいました。さうして其お歌が氣に喰はな

いのです。私は成可く家の中に浪風が立たないやうに、旦那様の事は奥様の耳に

入らないやうにして今迄何度も包んで居ましたが、もう包んで居られぬやうになりました。奥様がお可哀さうで耐らないやうになりました。旦那様許りの部下ではない。奥様の爲にも部下ですからなア。奥様から御意見遊ばすやう、そつとお知らせ致します」

チルナ「何、あの裏の初稚姫とか云ふ女の外にまだよい女が出来て居るのかい」
カンナ「へエへエ、奥様はお氣の毒ですな。ほんたうに、お可哀さうだわい。先づ旦那様の歌を御紹介致しますせう。決して、お腹を立てて下さいますなよ。」

家の嬢見れば見る程腹が立つ

蛸のお化か古狸。

と云ふやうな歌を歌つていらつしやるのですよ。貴方のやうな美人を、蛸のお化だの古狸だのと仰有るのですからな。女に呆けると、蜥蜴のやうな顔した女でも天女のやうに見えると思えますな」

チルナは身を慄はし乍ら、キリキリキリと齒を噛み、髪をパツと逆立てた。
カンナ「まだまだ奥様こんな事で怒つてはいけませぬ。もつと凄いい文句がありませんよ。何でも女の名は忘れましたが、彼女はキーチャンの果かも知れませぬが、旦那様を捉まへて歌ひやがったのが氣に喰はぬのです。私はその歌を聞くと齒がガチガチ鳴り出しました。

嬢は叩き出せ子は

後の女房にや私が行く。

てな事を吐しやがるのですよ。業が沸くの沸かぬのと、私が奥様だつたら矢庭に胸倉をグツと取り、髻を掴むで引ずり廻してやるのですけれどな。夫に旦那様は、エへへ、オホへ、と顔の相好崩して笑つていらつしやるのですもの。

家の嬢白粉おとした素顔を見たら

胸がむかむか嘔吐が出る。

とへへへ。こんな事を仰有るのですよ。

どうしても逃げて歸らにや女房の奴を

竹に糞つけ突いて出す。

あた汚い、奥様、竹の先に糞つけて突き出してやらうと旦那様は歌つていらつし

やいましたよ。實に私が聞いても「フンガイ」の至りですワ

チルナ「ア、口惜い、残念や残念や、どうしてもこの恨を晴らしてよからうかなア。

旦那様はそんな情けない事を仰有る人ぢやない、女が悪いのだ。其女は何處に居

る。其女を探し出し敵を討つてやらねばなりません」

と血相變へて立ち上る。カンナは大手を擴げて立ち塞がり、

カンナ「まアまアお待ちなさいませ。血相かへて何んの事ですか。敵なら私が討

つて上げます。そして貴女はまだお目出度いですな。旦那様を鼻屑して居らつしやるが、旦那様は此間も私を呼んで、「あんな嬢は見るのも嫌だ。何とかして放り出す分別は無からうか」と仰有いました。が、「これはしたり、こんな事をなさつては人道に外れます」とお諫め申したら、旦那様はプリンと怒つてハツキリ私には物を言うて下さらぬのですもの、ホントに困つて了ひますワ。

チルナ姫散るな散るなと今迄は

可愛がつたが馬鹿らしや。

早く散れ花は櫻木人は武士

早く散れ散れチルナ姫。

家の嬢なぜにあれ程強太いか

私の嫌ふのが分らないか

扨てもうるさい【ボテ】嬢よ。

奥山の狸狐の化けたやうな

顔を見るたびゾツとする。

夫よりも裏の離れの初稚姫は

私の女房にやよく似合ふ。

とか何とか云つて、それはそれは甚い権幕ですよ。奥さまよく考へて御覽なさい。貴方のやうな容色をして嫌がられる所へ居らなくても好いぢやありませんか、【オツホン】。あれあれあの障子の影を御覽なさい。背を擦つて居るのは女でせう。あんな所を見せつけられて貴女ノメノメとよくこんな所に居られますな」

チルナ「私は此家をどこ迄も出ませぬよ。夫が女を入れて私を追ひ出さうとすれば尚更のこと、此處に頑張つて居つて邪魔してやるのです。それが女の意地ですもの。此家を出るや否や夫婦氣取りになつて暮されては詰らないもの。エ、好きな阿魔ツ女だな。人の大事の主人を何と思つて大膽至極にもあんな事をするのだらう。これお前、些し退いてお呉れ。ちと暴れますから怪我をしても知らないよ」

と、障子をバリバリ、火鉢を窓の外へカンカラカラ。瀬戸物の割れる音ケンケラケン、ガチャ ガチャ ガチャ ガタガタガタ、四股踏む音ドンドン、ドスンドスンドスン。

カンナ「もしもし奥様、そんなお亂暴な事をして貰つては、後の奥さまがムるぢやムいませぬか」

チルナ「エ、構ふてお呉れな、此部屋は私の自由だ、叩き壊さうと、どうならうと、皆さまのお世話にはなりませんよ」

ガタガタ、ドスンドスン、バリバリバリ。

此物音に驚いてチルテルは、

チルテル「コラ何をさらす」

と血相變へて走り來り、チルナの髻をグイと鷲掴み、右の手に拳骨を固めて三つ四つ撲りつけた。チルナは一生懸命逆上あがり、金切聲を出して、

チルナ「エ、悪性爺奴、チルナが臨終の別れ、死物狂ひだ」

と武者振りつき、鞆丸をグツと握り力限りに引つ張つた。チルテルはウンと其場

に倒れける。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第八章 暗傷(一五〇八)

夫婦の中に咲き匂ふ

花は何時迄チルナ姫

家庭平和の實を結び

千代も八千代も偕老の

其樂しみを共になし

此世を安く渡らむと

神に願を掛巻も

心許さぬチルナ姫

思はぬ風の吹廻し

二世を契つた吾夫の

チルテル司は醜神に

清き靈も曇らされ

戀の膚となりはてて

彼方此方の女をば

弄もてあそびしと聞きくよりも

チルナの姫ひめは驚おどろきて

忽たちまち悒りんき氣の角つのはやし

所在あらゆる手道具てだうぐうち打うちだき

障しやうじ子や襖ふすまをかき破やぶり

半はん狂亂きやうらんの爲ため體たい

チルテル、カンナの企たくみたる

焚たき付つけ薬くすりが利ききすぎて

思おもひもよらぬ失しつ態たいを

演えん出ししたりと驚おどろきて

初はつ稚わか姫の居あ間まを去さり

矢や庭にはに此こ處こへ飛と込びみて

チルナの姫ひめの髻たぶさをば

左ゆん手にグツとわし掴づかみ

蝶さざ螺えのやうな拳こぶしをば

固かためて振ふり上あげクワン クワンと

三みつ四よつ打うてばチルナ姫ひめ

怒いかり狂くるひてしがみ付つき

チルテル司つかさの股またくらに

ブラブラさがる茶袋ちやぶくろを

一いつ生しやう懸命けんめいに握にぎりしめ

力ちからをこめて引ひたくる

何なん條でう以もつて堪たまるべき

アツと一ひと聲こゑ悶もん絶ぜつし

泡あわをふきつつ大だいの字じに

倒たふれて身か體らだをビリビリと

慄ふるはせ居あたる可を笑かしさよ

流石さすがのチルナも驚おどろいて

水みづよ薬くすりと氣きを焦いらち

カンナの司つかさを叱しかり付つけ

泣なき聲こゑ絞しぼり狼うろた狽へる

デビスの姫ひめの後あと逐おうて

伺うかがひ來きたりし三千みちひ彦こや

伊いた太た彦ひこ二人ふたりは此この態ていを

遙はるかに眺ながめて飛とび來きたり

矢や庭にはに座ざ敷しきへ這はひ上あり

雙もろ手てを組くんで一ひと二ふた三み四よ

五いつ六む七なな八や九この十たり

百もも千ち萬よろと數かず歌うたを

歌うたひ上あぐればウウンンと

苦くるしき聲こゑを張はり上あげて

面かほを顰しかめて起おき上あり

四あたり邊はをキキヨヨ口口見み廻まはして

アアフフンンと許ばかり呆あきれある

チチルルナナの姫ひめは兩りやう人にんを

見みるより早はやく怒いかり立たち

夫め婦をと喧げん譁くわの最さい中ちゆうへ

斷ことわりもなく飛とび込こむで

構かま立ひだてる奴やつは誰だれ

了れう見けんならぬ一いつ時ときも

早はやく此この場ばを立たち去されと

悵りん氣きの怒いかりの矛ほこ先さきを

夫つまの危き急きふを救すくひたる

二ふ人たりの司つかさにふり向むける

心こころ紊みだれしチチルルナナ姫ひめ

見みる人ひと毎ごとに吾わが敵てきと

心こころをひがむぞ是非ぜひなけれ
チルテル、カナナは三千彦みちひこの

姿すがた見るより手てを合せあは
危急ききふの場合ばあひよ能くもマア

御助おたすけなさつて下くださつた
先まづ先まづ奥おくで御休ごきう息そく

遊あそばしませと言いひ乍ながら
心こころ汚きたきチルテルは

カナナに向むかつて目配めくばせし
此この兩りやう人にんを逸いち早はやく

捉とらへて庫くらにつき込こめと
眼まなこで知しらす厭いやらしさ

三千彦みちひこ伊太彦いたひこ兩りやう人にんは
二ふ人たりの心こころを察さつすれど

デビスの姫ひめの所在ありかをば
探さぐらむものと思おもふより

素知そしらぬ面かほを装よそほひつ
カナナの後あとに従したがひて

暗やみの庭には先さきトボトボと
隙すきを窺うかがひ跟ついて行ゆく

三千彦みちひこつつと立止たちとまり
カナナの腕うでをグツと取とり

汝なんぢは此家このやの使つかひ人びと
バラモン教けうのリユーチナント

カナナと申まをす奴やつであらう
デビスの姫ひめを隠かくしたは

此家このやの主あるじチルテルの
全まく指圖さしづによるものと

早くも吾は悟りしぞ
いと速に所在をば

完全に委曲に告げまつれ
違背に及ばば玉の緒の

汝が命を奪ふべし
返答如何にとせめかくる

流石のカンナも困りはて
身をブルブルと慄はせて

ハイハイ白状致します
命許りはお助けと

両手を合せて涙ぐみ
二人を伴ひ第一の

倉庫の表を押開けて
中に立入りデビス姫

厳しき縄を解き乍ら
二人に向ひ丁寧

モウシ モウシ宣傳使
此處に居られる御婦人は

貴方のお尋ね遊ばした
デビス姫でムりませう

私は宅に不在番を
致して居つた其爲に

其経緯は知りませぬ
先づ先づお查べなさりませ

云へば三千彦伊太彦は
四邊に心を配りつつ

伊太彦外に待たせおき
三千彦一人倉の中

明^{あか}りを燈^{とほ}して入^{いり}見^みれば 口^{くち}にははます猿^{さる}轡^{くつわ}
手^て足^{あし}を縛^{しば}り土^{つち}の上^へに いとも無^む残^{ざん}に寝^ねさせける
三^み千^ち彦^{ひこ}見^みるより腹^{はら}を立て 姫^{ひめ}の縛^{しましめ}解^とき乍^{なが}ら
直^{ただち}にカ^かン^んナ^なを縛^{しば}り上^あげ 其^{その}場^ばに倒^{たふ}しデ^でビ^びス^す姫^{ひめ}を
勞^{いた}はり乍^{なが}ら倉^{くら}の外^{そと}へ 漸^{やうや}く救^{すく}ひ出^{いだ}しけり
茲^{ここ}に三^み千^ち彦^{ひこ}倉^{くら}の戸^とを ピ^ぴシ^しヤ^やリと閉^しめて錠^{びやう}おろし
姫^{ひめ}を勞^{いた}は^なく^さめつ 闇^{やみ}に紛^{まぎ}れてス^すタ^たス^すと
此^{この}場^ばを後^{あと}に出^いでて行^ゆく。

へー^へルは夜^{よる}の巡^{じゆん}視^しを了^をへて館^{やかた}へ歸^{かへ}つて見^みると、チ^ちル^るナ^な姫^{ひめ}は髪^{かみ}ふり亂^{みだ}し、血^{けつ}相^{さう}變^か
へて坐^{すわ}つてゐる。チ^ちル^るテ^てルは眞^ま青^{せい}な面^{かほ}して鞏^{きん}丸^{たま}を押^{おさ}へ、ウ^うン^んウ^うンと唸^{うな}つてゐる。
へー^へルはつかつかと傍^{そば}に近^{ちか}づ^づき、
へー^へル「ヤ^やア、貴^{あなた}方^たはキ^きャ^やプ^ぷテ^てンの旦^{だん}那^な様^{さま}、奥^{おく}様^{さま}、畜^{ただ}ならぬ此^{この}御^ご様^{やう}子^す、何^{なに}者^{もの}が襲^{しふ}
來^{らい}致^{いた}しましたか」

チルナ「お前はへール、能う来て下さつた。チルテルさまは本當に毒性な人だよ。私を放り出して、裏の離室に居る女性や、其他澤山の女を引入れ、勝手氣儘の生活を送らうとなさるのだから、こんなことがハルナの都へ聞えやうものなら、それこそ御身の終り、妾は最早覺悟を定めました。此家を追出される代りに、ハルナの都へ歸つて一伍一什を申上げ、主人の目を覺さねばおきませぬ。へール殿、後を確り頼みますよ。妾は之からお暇を致します」

へール「モシモシ一寸お待ち下さい。餘り仲が良すぎるので、そんな喧嘩が始まるのです。旦那様は何時も貴女を偉い女房だ、美しい者だ、優しい者だと褒めて居られますよ」

チルナ「エーお前は旦那様と肚を合し、妾を追出す所存であらうがな。何もかもカンナから聞いてあるのだよ。そんな一時逃れの追従を食ふやうなチルナぢやムいませぬ。左様なら、旦那様、スベタ女とお楽しみなさい」

と血相かへて飛出さうとする。飛出て欲しかったチルテルも、こんなことをハルナの都に報告されては大變だ、一層のこと永久に庫の中へ放り込んでおくに限る

と決心し、痛さを堪へて、

チルテル「ヤア、へール、女房は發狂致し、此俺の鞆丸を握つて殺さうと致した謀殺未遂犯人だ。サア早くふん縛つて、第一號の倉庫へ放り込むでくれ。之はチルテルの命令ぢやない、キャプテンの申付だぞ」

へール「ハア」

とゐずまゐを直し、矢庭にチルナ姫の後にまはり、

へール「謀殺未遂の大罪人、バラモン軍の關守兼キャプテンの命に仍つて捕縛する。神妙に繩にかかれ」

と云ひ放ち、チルナ姫の細腕をグツと後へ廻し、捕繩を以て縛り上げ、

へール「きりきり歩め」

と云ひ乍ら第一倉庫を指して引摺り行く。

へール「ハハア、此處はデビス姫とか云ふ奴が、放り込んである倉庫だ。女同志二人放り込みておけば、随分愒氣の花が咲くことだらう。イヤ面白い喧嘩が始まるだらう」

と呟き乍ら、ガラガラと戸を開け無理に押し込み、ピシヤリと戸を締め錠をおろしておく。此錠は小さい穴に一寸した石を放り込めば、それで中から何程焦つても開かない。外からは自由自在に開くやうになつてゐる。つまり倉庫とは云ふものの、監禁室である。

チルナ姫はへールに押し込まれた途端にヒヨロヒヨロとして、カンナがふん縛られて倒れてゐる上にパツタリとこけ込む。眞暗がりである。何人か見當がつかぬ。併し乍ら今へールが獨言にデビス姫だとか云ひよつた。大方其女であらう、此奴もヤツパリ仇の片割れだ、斯様な女をチルテルの爺が隠まひおき、チヨコチヨコ密會をして居るのだらう、エー残念だ、何とかして懲してやりたいが、斯う手を縛られては何うすることも出来ない……と小聲で呟き乍ら、カンナの太腿にガブリと「かぶ」り付いた。カンナは吃驚して、

「アイタ、痛い痛い」

チルナ「エー、極道女奴、チツとは痛いぞ、モツと「かぶ」つてやらうか」と又「かぶ」りつく。

カンナ「モシモシ私は女ぢやムいませぬ。カンナといふ男でムいます。どうぞ泳へて下さいませ。かう手足を縛られては動くことも出来ませぬ」
チルナ「エー、圖々しい、男の聲色を使つたつて、そんなことに誤魔化されるチルナ姫ぢやムいませぬぞえ。大化者奴、能うマア旦那様に悪知恵をつけ、妾をこんな目に會はしよつたナ。妾は死物狂、汝の肉を皆咬み切つてやらねば了見ならぬ、覺悟しや」

カンナ「モシモシ貴女は奥様ぢやムいませぬか。私はカンナでムいますよ」
チルナ「エー、そんな嘘を言つても承知を致さぬぞや。カンナはこんな所に居る筈がない。お前はデビスに間違ひなからうがな」

カンナ「滅相な、私の聲をお聞になつても分るぢやありませんか」
チルナ「エー、何をツベコベと云ふのだい。耳がワンワンして、聲が聞分られるやうな場合かい、何と云つても、お前はデビスに違ひない。思ひ知つたがよからうぞや」

と又「かぶ」る。カンナは、

カンナ「痛い！ 痛い痛い痛い」

と悲鳴をあげる。其勢に手をくくつた綱はプツリと切れた。カンナは直様【かぶ】りついてゐる女の髻を片手に持ち、片手に拳骨を固めて、力の限り殴りつけた。キヤツと一聲、後は何も聞えなくなり、【かぶ】りついて来ぬ。カンナは直に足の縛を解き、暗がりを探つて、チルナの縛を解き背中を三つ四つ殴りつけた。「ウン」と息吹返した。されど眞暗がりで互の顔は鼻を摘まんでも分らない。チルナは死武者になつて、這ひまはり、カンナが面を擧めて傷所を撫でてゐる其手がフツと觸つたので、

チルナ「エー此スベタ女奴」

と言ひ乍ら、グツと太腿を掻き【むし】つてやらうと、手を差伸べた途端に、種茄子のやうな形した物が手に觸つた。

チルナ「あゝヤツパリお前は男であつたか、何者ぢや」

カンナ「私はカンナでムいます。奥様に暗がり、三四ヶ所も太腿の肉を咬とられ、何うも痛くて辛抱が出来ませぬ。酷いことをなされますなア」

チルナ「そりやお前、時の災難と諦めるより仕方がないぢやないか。妾の横面を大變、お前も殴りつけたのだから、互に恨は帳消しとして、一時も早く此處を逃出す工夫をしようぢやないか」

カンナ「逃さうと云つても、かう足に重傷を負うては動きが取れませぬ。そして此錠前は中からは何うしても開けられないのです。壁には太い鐵線が碁盤の目の如く張つてありますから、到底駄目でせう」

チルナ「ここにデビス姫とかが縛つて投げ込むであるといふことだから、一つ探つてみて仇を討つから、お前さまそれなつと見て、氣を慰めなされ。あゝ腹立たしい、何こにすつ込んでゐるのだな。オイ、デビス、聲を立てぬか。何程黙つて居つても晝になればチツと明くなるから、所在を見付け、成敗を致すぞや。今素直に此處に居りますと申せば腕の一本位で堪へてやる」

カンナ「モシ、奥さま、其デビスは私と入替に旦那様のお使が来て連れ出してしまひました。大方今頃は其女を看護婦代用にしてゐられるでせうよ。アイタ、あゝ痛い痛い、本當にエライこと【かぶ】られて、太腿が三所も四所も

赤い口をあけて缺伸をしてゐるやうだ。本當に酷い目に會はしましたなア
チルナ「ホツホ、常平生から旦那さまを咬かし、初稚などと云ふ女を連れ
て來たのも、元を糺せばお前ぢやないか。つまり云へば自業自得だよ。マア天罰
が當つたと思つて辛抱しなさい。お前は太腿の三片や四片取られたとて夫れ程苦
しいのか。妾は大事の大事の夫の身體を全體取られたでないか、あゝ残念やなア、
ウンウンウンウン」
倉の隅から猫の様な劫經た大きい鼠が、
「クウクウクウクウ、チウチウチウチウ、ガタガタガタ、ゴトゴトゴトゴト
ゴト」
と厭らしい音を立ててゐる。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

玉國別、眞純彦は長途の海路に草臥れきつた上、振舞酒にグツタリ酔ふて其夜は潰れた様に熟睡して了つた。先づ手洗を使ひ口をすすぎ、東天を拜し、次いで神殿に進み祝詞を奏上し、暫らく休息して居る。そこへバーチルは顔色を變へて出で來り、

バーチル「もし先生様、大變な事が出來致しました。誠に申譯のない事で、

玉國「大變とは何事で、

バーチル「はい、私もグツタリと草臥れて、よく寢込んで了りましたので、夜中の出來事は少しも存じませぬが、三千彦様、伊太彦様、デビス姫様のお三方が、何程そこらを探しても行衛が分りませぬ。里人の話によりますと裏門口を開いてバラモンの軍人が三人様をフン縛り歸つたとの事、實に申譯のない事を致しました」

玉國「何、三人がバラモン軍に誘はれたと、やア、それは大變だ。眞純彦、こりやかうしては居られまい。之から兩人がバラモンの關所に押掛けて行つて様子を

探つて見ようぢやないか」

眞純「如何にも大變な事が出来致しました。さア参りませう」

バーチル「もし先生様、一寸お待ち下さいませ。バラモンの關所には一中隊の勇猛なる兵士が抱へてゐますから、お二人様では險難でゐませう。幸ひ斯うして村中の者が晝夜の別なく、祝に來て居りますから此中から強い者を選むで數十人お連れになつてはどうでせう。私も命を助けて貰つた御恩返しに今度は命を捨てます。何卒さうなすつて下さいませぬか」

玉國「いや、決して御心配下さいませぬ。又宣傳使が貴方等の助力によつて多數を恃むで押掛けたと云はれては濟みませぬ。又一方は武器を持つたもの、里人に怪我でもあつては濟みませぬから吾々兩人が直接に出掛けませう」

バーチル「さう仰有れば是非がゝりませぬ。代りに私がお伴を致しませう」

玉國「いや、それには及びませぬ。然し乍ら僅かに二人、敵の中へ参るのでゝいますから之がお顔の見納めになるかも知れませぬ。何卒貴方は神様の御心をよくお覺りなさつて、此里人を導き可愛がつておやりなさいませ」

かかる所へサーベル姫は襖をソツと押開き涙と共に轉げる様にして入り來り、
サーベル 玉國別様、眞純彦様、大變な事が出來致しました。何卒神様の御神徳
によつて御三方を救ひ出し、無事にお歸り下さいませ。妾は神様を念じ無事の成
功を祈ります。

玉國別 有難し君が情の厚衣

身に纏ひつつ進み行くべし。

眞心を深く包みし衣手に

薙ぎて屠らむ醜の輩を

眞純彦 曲神に苦しめられし吾友を

助けに行かむ神のまにまに。

大神の御前に額き願ぎ申す

此首途を眞幸くあれよと』

バーチル 眞心を籠めて打出す言靈に

刃向ふ仇の如何であるべき。

さり乍ら心配りて出でませよ

企みも深き陥穽あれば』

サーベル姫 玉國別神の命よ眞純彦よ

仇の館に氣を配りませ』

玉國別 有難し神に捧げし吾命

よし捨つるとも如何で恐れむ

眞純彦 皇神の縁の絲に結ばれし
身ながら今は解けむとぞする

バーチル 吾僕アンチー連れて出でませよ
彼は力の強き益良夫

玉國別 吾道は人を頼らず杖につかず
只眞心に進むのみなり。

折角の思召をば無みするは

心濟こころすまねど許ゆるし玉たまはれ。

三千彦みちひこは嘸さぞ今頃いまごろは仇人あだびとと

嚴いづの言靈ことたま打ち合あひ居ゐるらむ

眞純ますみ彦ひこ言靈ことたまの戦たたかひなれば恐おそれまじ

兇器きようきを持ちもし敵てきの陣中ぢんちゆうも。

曲神まがかみの憑うつりきつたる仇人あだびとを

言向ことむけ和やはす日ひとはなりぬる

アンチーかむじかみ神司かむじかみ吾われを召めし連つれ出いでまして

眞心まごころの限かぎりを盡つくさせ玉たまへ。

よしやよし命いのちを敵てきに渡わたすとも

いかで悔いなむ捨てし此身は」

玉國別「玉の緒の命に代へて嬉しきは

汝が心の誠なりけり」

斯く互に歌を取交し、玉國別、眞純彦は今や宣傳使の服を脱ぎ、バーチルの與へたる衣服と着替へ乍ら立出でむとする所へ、泥酔者のテクはツカツカと現はれ來り、

テク「へー、御免なさいませ。私は今日迄はバラモン教の目付役の下を働くスパイでムいました。一方には海賊の張本人ヤツコスと兄弟分となり、種々雑多と、よくない事許りやつて居ましたが、玉國別様に何とも知れぬ般若湯を頂き、それから心に潜む鬼が私の身内から逐轉しまして、今は全く人間心に立歸りました。就きましてはチルテルの邸には澤山の陥穽がムいますれば此テクが御案内を致し

ませう。うつかり行かうものならえらい目に會ひます。その祕密を知つてゐるのは外にはムいませぬ。關所を守つてる軍人の外は誰も知りませぬからお危うムいませぬ」

玉國「おう、お前はテクさまだつたな。や、有難う、それ程澤山に陥穽が拵へてあるかな」

テク「へーへー、彼方にも此方にも陥穽許りでムいます。あんな所へ落ちたが最後、上る事は出来ませぬ。さうして此頃は何とも知れぬ美しい女の方が離家に只一人居られます。さうして其お名は初稚姫様だとか云ふ事でムいます。關守のキヤプテンがその女に現を抜かし、それが爲に夫婦喧嘩がおつ初まり、いや、もう内部の醜態と云つたら話になりませぬ」

玉國「なに、初稚姫様がムると云ふのか。どんな年齢好きなお方だ」
テク「はい、明瞭は分りませぬが一寸見た所では十七八才かと思ひます。然し何處ともなく十五六才の幼い所もムいますし、體中寶石を以て飾つて居られます。それはそれは綺麗なお方ですよ」

玉國たまくに「はてな、初稚姫様はつわかひめさまは、そんな寶石等ほうせきなどを身みに飾かぎる様やうなお方かたぢやないと聞きいて居ゐる。大方同名異人おほかたどうめいいじんだらう。なア眞純彦ますみひこ」

眞純ますみ「そら、さうでムいませう。世間せけんに同おなじ名なは何程いくらもムいませうからな」

玉國たまくに「あ、そんなら屋敷やしきの案内あんないをお願ねがひしようかな」

テク「いや早速さつそくの御承知ごしようち、有難ありがたうムいます。大抵たいていの所ところは皆私みなわたしが知しつて居をりますから、私わたしの後にあとに跟ついて來きて下くださいませすればメツタに不調法ぶてうはふはさせませぬ。そして彼の女をんなに一度いちどお會あひになれば眞偽しんぎが分わかるでせう。大方貴方おほかたあなたのお弟子でしは陷穽おとしあなに落おち込こみなさつたかも知しれませぬ。うつかりして居ゐると命いのちが怪あやしうムいます。澤山たくさんな兵へい士しが寄よつて上うへから石いしを投なげ込こむのですから、堪たまつたものぢやありませんわ」

バーチル「テクさま、お前まへさまはアキスから聞きけば宅うちの番頭ばんとうになつたと云いつて居ゐられたさうだが本當ほんたうに番頭ばんとうになつて呉くれますか。アンチーも暫しばしく休やすまして下くださいと云いつてるから、お前まへさまが番頭ばんとうになつて下くださらば大變都合たいへんつがふが宜よろしいがな」

テク「承知致しようちいたしやした。貴方あなたからお言葉ことばのかからぬ中うちから已すでに番頭ばんとうと一人ひとりで定きめて居をりますから何なんの異議いぎがムいませう。もとは悪人あくにんでムりましたが神様かみさまの光ひかりに照てら

されて最早もはや悪あくが恐おそろしくなり、その罪亡つみほろぼしに一つでも善事ぜんじを行おこなひ度たいと決心けつしんをして居をりますから何卒どうぞよろ宜よろしくお願ねがひ申まをします。サア玉國たまくに別様わけさま、眞純彦様ますみひこさま、参まゐりませう」
アンチー「是非ぜひとも私わたしをお伴ともに願ねがひます」
玉國たまくに「それ程ほどおほ仰おほせらるるなれば御同行ごどうかうを願ねがひませう」
とバーチル夫婦ふうふに暇いとまを告つげ、裏口うらぐちより一行いっかう四人よにんキヨの關守せきもりチルテルが館やかたを指さして進すすみ行ゆく。テクは先頭せんとうに立たちヤツコス踊をどりをし乍ながら心こころイソイソ歌うたひ初はじめた。

テク「バラモン教けうのキャプテンが部下ぶかに使つかはれ犬いぬとなり

彼方かなた此方こなたと湖邊うみべをば尋たづねまはりて三五あななひの

神かみの司つかさや信徒まめひとを一人ひとりも残のこさずフン縛しばり

キヨの關所せきしよへ連つれ行ゆきて褒美ほうびの金かねを澤山どつさりと

頂いただき好きすなお酒さけをば飲のんで浮世うきよを面白おもしろく

暮くらさむものこころと心こころをば鬼おにや大蛇をろちと變へん化げさせ

惡あくの道みちのみ辿たどりたる惡黨あくたうぶらい無賴むらいの此このテクも

玉國別の神様の
厚き心に感服し

迷ひの夢も覺め果てて
バーチルさまの家の子と

仕ふる身とはなりにけり
バラモン教の關守が

如何程神力あるとても
如何で及ばむ三五の

誠一つの言靈に
敵する事は出來よまい

屋敷の中に澤山の
陷穽をば穿ちつつ

三五教やウラル教
道の教のピユリタンを

否應云はさずフン縛り
皆悉く陷穽に

落して喜ぶ惡神の
醜の器となり果てし

チルテル司は魔か鬼か
思ひ廻せば恐しや

かかる惡魔を逸早く
亡ぼし盡し世の人の

災難を早く救はねば
イツミの國の人々は

枕も高く眠れない
吾も元より惡人の

種ではなけれど止むを得ず
バラモン教の勢力に

刃向ひ其身の不幸をば

招かむ事を恐れてゆ

心にもなき闇謀となり

吾良心に責られて

苦しき月日を送りつつ

せつなき思ひを消さむとて

朝から晩まで酒を飲み

浮世の中を夢現

三分五厘に暮さむと

金さへあれば自棄酒を

呻つて過す浅間しさ

あゝ惟神々々

神の恵みの幸ひて

愈今日は三五の

貴の司の先走り

今迄犯せし罪科を

償ひまつる今や時

皇大神よ大神よ

テクの心を憐れみて

今度の御用を恙なく

遂げさせ玉へ惟神

假令天地は變るとも

一旦神の御前に

罪を悔いたる此テクは

汚き心を露持たじ

敵は如何なる謀計を

廻らし吾等を攻むるとも

何か恐れむ神心

振ふるひ起おこして何處迄どこまでも 神かみの御おん爲ため世よの爲ために
惡魔あくまの棲すくひしチルテルの 醜しこの司つかさを懲こらしめて
世よ人の爲ために災わざはひを 除のぞかせ玉たまへ惟かむながら神
御み伴ともに仕つかへし此このテクが 眞まごころ心こころ捧ささげて願ねぎ奉まつる
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 御み靈たま幸さちひましませよ〆

アンチーは又また歌うたふ。

アンチー 〆 三年さんねん振ぶりに吾わが主人あるじ バーチルさまに廻めぐり會あひ
喜よろこび勇いさむ間まもあらず 命いのちの親おやの神かむつかさ司さ
危あやふき敵てきの館やかたへと 出いでます君きみを案あんじつつ
主人あるじの君きみの許ゆるし受うけ お伴ともに仕つかへ進すすむ身みは
如何いかなる曲まがの企たくみをも 如何いかで恐おそれむ敷しき島しまの
大和男子やまとをのこの魂たましひを 現あらはしまつりて高恩かうおんの

萬分まんぶんいち一いちに報むくふべし　　キヨの港みなとは遠とほけれど
勝手かつておほ覺おほえし拔ぬけ道みちを　　進すすむで行ゆけば一時ひとときの
間うちには容たやす易やすく達たつすべし　　さはさり乍ながら眞書まひるなか中
敵てきの館やかたへ進すすみ行ゆく　　これが第一だいいち險難けんのんだ
日暮ひぐれを待まつてボツボツと　　隅すみから隅すみまで探たん索さくし
三千彦みちひこさまの所在ありかをば　　探さがし求もとめた其上そのうへで
あらむ限かぎりのベストをば　　盡つくすもあまり遅おそからじ
玉國たまくにわけ別の宣傳せんでんし使　　眞純ますみの彦ひこの神司かむづかさ
新番頭しんばんとうのテクさまよ　　貴方あなたの御意見ごいけん詳細まつぶさに
お知しらせなさつて下くだされや　　敵てきにも深ふかい企たくみあり
軽々かるがるしくも進すすみなば　　臍ほそを嚙かむとも及およぶなき
大失敗だいしつぱいを招まねくべし　　省かへりみ玉たまへ神司かむづかさ
此このアンチーは意外いぐわいにも　　卑怯ひけふな男をとこと皆みなさまは
思召おほしめすかは知しらねども　　注意ちゅういの上うへに注意ちゅういして

行かねばならぬ敵の中
あゝ惟神々々

何れにしても大神の
力に頼り進むべし

玉國別の御前に
更め伺ひ奉る

と歌ひ終り、玉國別の意見を求めた。玉國別はアンチーの言葉に一理ありとなし、途上に佇みて暫し思案を廻らして居る。テクは無雑作に口を開いて、

テク「もし、皆様、私は幸い種々の關係上チルテルに接近せなくてはなりません。

それについては色々チルテルの腹を探り、又敵の様子や三千彦様以下の所在を

探索するに餘程便宜を持つて居りますから、貴方は暫らく此密林に日の暮る迄

御休息を願ひ、私が一應取調べた上、日が暮れてからお出掛けになつた方がよか

らうと在りますが貴方等のお考は如何でございませうか」

玉國「成程、却つて夜分の方が宜いかも知れない。御神諭にも「今迄は日の暮が

悪いと申したが之からは日の暮に初めた事は何事もよい」とお示しになつて居る。

そんならテクさま、御苦勞乍らチルテルの館に罷越し、能ふ限りの偵察をして下

さい。それまで此の森蔭に祈願をして待つて居りませう』
テク『いや、早速の御同意、有難うムいます。それなら此テクがうまく様子を探
つて参ります。何卒此森の奥で悠りと休息をして待つて居て下さい。左様なら』
と云ひ乍ら尻引繋げトントントンと夏草茂る細い野道を駆け出した。三人は森の
木蔭に腰を下し、時の至るを待つて居る。

(大正一二・四・一 舊二・一六 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第一〇章 變金〔一五一〇〕

キヨの關守キヤプテンのチルテルと妻のチルナ姫との亂癡氣騒ぎを廣き庭園を
隔てて一切萬事吾不關焉といふ態度にて、心靜かに一絃琴を手にし、細き美はし
き聲にて歌つてゐるのは初稚姫であつた。

初稚姫はつわかひめ 花は紅葉は緑はなはくれなゐはみどり

緑みどりしたたる黒髪くろかみは

まだうら若き若草わかわかぐさの

妻つまの命みことのチルナ姫ひめ

夫をつとの身みの上うへ氣遣きづかひて

朝あさな夕ゆふなに眞心まごころを

盡つくして神かみに祈いのりまし

妻つまの務つとめを委細まつぶさに

包つつむことなく遂とげさせて

心こころもキヨの關守せきもりの

關せきとめかねしチルテルが

戀こひに狂くるひし心こころの鬼おにを

追おひ拂はらはむと村肝むらきもの

心こころを碎くだかせ玉たまふこそ

實げにも憐あはれの次第しだいなり

妻つまの心こころも白浪しらなみの

寄よせては返かへす磯いその浪なみ

彼方あなた此方こなたと驅かけ巡めぐり

容貌みめ美うるはしき女子をみなこと

見みれば人妻ひとつま人娘ひとむすめ

老おいと若わかきの隔へだてなく

心こころ蕩とろかす狒ひび々ぎる猿さるの

搔かきまはすこそ歎うたてけれ

妾わらはも此處こゝに來きたりしゆ

心こころに染そまぬ事こと乍なら

これの家内やぬちに立騒たちさわぐ

荒あらき波なみをば鎮しづめむと

神かみの救すくひの船ふねを漕こぎ

重き使命を負ひ乍ら見捨てかねたる義侠心

主人の心を言靈の嚴の眞水に隈もなく

洗ひ清めて惟神の心に復さむと

人目を忍び只一人時を待つほの浦尻に

立騒ぐなる群千鳥早く和鳥になれかしと

皇大神の御前に心の限り祈るなり

それに付けても三五の神の使の宣傳使

聖き心の玉國別や鏡も清き眞純彦

思ひは胸に三千彦の妻とあれますデビス姫

伊太彦司の一行が月照りわたるキヨの湖

渡りて此處に來ますなる神の御言を受けてより

目無堅間の舟傭ひ波路を安く守りつつ

先へ廻つて此館の神の司の危難をば

救ひて功績をそれぞれに擧げさせなむとの村肝の

心こころを碎くだく吾われこそは

初はつ稚わか姫ひめの神かむ柱ばしら

三さん千せん年ねんに一いち度ど咲さく

高たか天あま原はらの最さい奥あうの

神かみの御み苑そのの桃たう林りんに

勻にほひ初そめたる桃ももの花はな

只ただ一いち輪りんの吾わが魂たまは

如い何かに此この場ばを治をさめむと

天あま津つ御み神かみや國くに津つ神かみ

百もも八や十そ柱ばしらのエンゼルと

朝あさな夕ゆふなに語かたらひて

漸やく神かみの御み心こころを

現あらはす時ときとなりけり

あゝ惟かむ神な々が々ら

恩み頼たまを謹つしみて

厚あつく感かん謝し奉たてる

朝あさ日は照てる共とも曇くもる共とも

月つきは盈みつとも虧かくる共とも

惡あく魔まはいかに猛たけくとも

誠まこと一ひとつの三さん五ごの

神かみに仕つかへし吾わが魂たまは

いかに撓たゆまむ梓あづ弓ゆみ

引ひきて返かへらぬ魂たまの

巖いはを射い抜ぬく吾わが思おもひ

遂とげさせ玉たまへと願ねぎまつる

あゝ惟かむ神な々が々ら

御み靈たま幸さちはひましませよ

』

斯かる所へ、へールはスタスタと現はれ來り、慌ただしくつつ立ち乍ら、體を前後左右に揺り、足をチタチタ踏んで、

へール「モシモシ、お姫さま、そんな陽氣な事でムいますか、あれ丈の亂癡氣騷ぎが、貴女はお耳に這入りませぬか」

初稚「ハイ、何かモメ事が出來たのでムいますか。妾は一絃琴に魂を奪はれ、平和の夢を貪つて居りましたから、何にも存じませぬ。何だかお館の方に少し許り御夫婦がお酒の上でダンスでもやつてムつたやうですなア。モウお休みになりましたか」

へール「エ、姫さま、そんな暢氣な事ですかいな、大變な事が起つたのですよ。急性チルテル・へールニヤが勃發し、醫者よ薬よと大騒ぎでムいます」
初稚「ア、左様でムいましたか。萬金丹でもあげなさいましたら、御氣分が良くなるでせう」

へール「肝心な萬金丹をチルテルの大將、チルナ姫さまに、引張られたものですから、忽ちクルクルと白目を剥いて、ピリピリピリ、キヤー、ウーン、ドタンバ

タン、ガチャ ガチャ ガチャ、ガラガラと人造地震が突發致しました。何奴も此奴も卑怯な奴許り、皆安全地帯へ避難したと見え、此へール一人が、縦横無盡に看護卒の役を勤め、右往左往に奔走して居ります。何卒病人の看護を手傳つて頂きたいものですなア。男の荒くたい手で看病するより、女の優しい柔かい手々で看護して貰ふ方が、何程病人の慰安になつて可いかも知れませぬ。サア何卒御願でムいます。早くお世話を願ひませう。貴方だつて、見ず知らずの家へ来て、かう鄭重にお世話になつてゐるのだから、チツとは義理人情もお辨へでムいませう」

初稚「それはお氣の毒な事でムいますな。併し乍ら女といふものは嫉妬深いものでムいますから、奥様の許しがなくては、旦那様丈の許しでは看病をさして頂く事は出来ませぬ。夫の病氣は奥様が御看護なさるのが當然でムいます。何卒奥様のお許しがあれば看護さして頂きますから、一寸奥様に伺つて来て下さいませ」

へール「あの奥ですか、彼奴ア旦那様の鞆丸狙つて、謀殺未遂犯人としてふん縛り、暗室へ監禁しておきました。あんな奴ア、死なうが何うならうが、チツとも

構うこたアムいませぬ。随分恪氣の強い奥様で、お前さまもお困りでしたらうが、モウ御安心なさいませ。旦那さまと何れ丈おいちやつき遊ばさうが、ゴテゴテいふものはムいませぬよ。早く斯ういふ時に親切を盡しておきなされると、後のお爲でムいますよ」

初稚「妾はその様な惨酷なお方は人間だとは思ひませぬワ。チルテル様には何か悪い者が憑依してゐるのでせう、さうでなければ神から許された夫婦の仲、そんな酷たらしい事をなさる筈がありますまい。正真正銘のチルテル様の御病氣ならば、どこ迄も仁慈無限の神様の御心に倣らひ、身を粉にしても介抱さして頂きませんが、悪魔の擒となり身も魂も獣化してゐる妖怪的な御主人には、平にお断りを申します。へールさま、貴方も確りなさいませ。妙な者が憑依して居りますよ」

へール「何と云つても、ウブな身魂ですから、私の肉體を目當に、イロイロの厄雜靈が先を争うてへールかも知れませぬ。併し乍らフェル事もあり、又曲津のへール事もありません。丁度キヨの湖の波を見てゐるやうなものです。高くなつたり低くなつたり、或時は荒むだり、或時は平靜になつたり、これが所謂千變萬化の勇

士しの本ほん能のう、圓ゑん轉てん滑くわ脱だつ、あく迄まで融ゆう通つうの利きく、神かみの生いき宮みやですからなア。其その御ご主しゅ人じんたる
チルちルる様さまは一いつ層そう偉えい者ものですよ。さう貴あな女なのやうに單たん純じゆんな御お考かんへでは、到たう底てい英えい雄ゆう
の心しん事じは分わかりませぬ。旦だん那な様さまがウうツつのやうになつて、姫ひめ様さま々々と連れん呼こしてゐらつ
しやいます。何なには兔ともあれ、一ひと足あしお運はこび下くださつたらどうですか。女をんなといふ者ものはさ
う剛がう情じやうを張はるものぢやありませぬよ、從じう順じゆんと親しん切せつなのが女をんなの美び徳とくですからなア
初はつ稚わか「さう、たつて仰おほせられますのなれば、兔とも角かくも伺うかひませう」
へいル「ヤ、早さつ速そくの御ご承しやう知ち、旦だん那な様さまも嘸さぞお喜よろこび遊あそばす事ことでムいませう。サア、お
手て々てを執とつて上あげませう」
と毛けだらけの黒くろい固かたい松まつの木きの荒あ皮かはのやうなガんザをニユツと突つき出だした。初はつ稚わか姫ひめは
ゾツとし乍ながら、
初はつ稚わか「有あり難がたう、併しかし乍ながらお蔭かげで足あしは壯たつ健しやでムいますから、お後あとに跟ついて參まゐります
へいル「イヤイヤ姫ひめ様さま、此この屋やし敷敷の中なかは、彼あちらにも此こちらにも陷おとし穿あなが拵こしらへてあります
から、私わたしがお手てを引ひいて上あげませぬと危き険けんです。それだからお手てを引ひいて上あげや
うと申まをすのです」

初稚はつわか「貴方あなたに手てを握にぎつて頂いただきますと、又またチルテルさまと鞆丸きんたま壓あつ搾さく戦せんが勃發ぼつぱつしますと、お互たがひの迷惑めいわくですワ。決けつして陷穽おとしあななんかはまるやうな事ことは致いたしませぬ。何卒どうぞお先さきへお出いで下くださいませ」

へール「ハイ、駄目だめですかア、どうも私わたしの説せつを握手あくしゆ喝采かつさいして下くださらぬと見みえますワイ」

初稚はつわか「ホ、、、、、御冗談ごじょうだん許ばかり仰有おつしやいますな。旦那様だんなさまが御苦おくるしみになつてゐられるぢやありませんか」

へール「へー、お苦くるしみはお苦くるしみです。最早もはやチルテル・へールニヤも殆ほとんど全快ぜんくわいして何なんともないのでせうが、苦くるしいといふのは……ヘン、……どこやらの人ひとに身みも魂たまも奪うばはれ、煩悶はんもん苦惱くなう病びやうが起おこつて苦くるしいのですから、一寸ちよつとお腹なかの邊あたりをマツサージでもやつて貰もらへば、忽たちまちケロリと本復疑ほんぶくたがひなし、此病氣このびやうきを直なほすのは女神めがみでなくては到底たうてい御利益ごりやくは現あらはれませぬワイ、ウツフ、、、、」

初稚はつわか「あれまア、そんな事ことだと思おもつて居をりました。それならモウ安心あんしんでムいます。何卒どうぞチルテル様さまに宜よろしう仰有おつしやつて下くださいませ。そして妾わらはの居間ゐまへお遊あそびにお出いで下くださいませ。」

さるやうお傳へ願います。左様なら
と踵を返し元の居間へサツサと歸つて行く。へールは口をポカンとあけたまま、
姫の後姿を見送り、

「あゝ何と可いスタイルだなア。牡丹か芍薬か蓮華の花か。あの【なんぞり】とした肩の具合から、頭の格好、首筋の様子、背のスウツとした所、おいどの小さい、足の歩き様から、お手々の振方、何とマア可いナイスだらう。チルテルさまが女房を叩き出して本妻に入れやうとなさつたのも、決して無理ではないワイ。あゝ何だか精神恍惚として夢路を辿るが如しだ。あゝ胸が苦しうなつて来た。何だか俺にも戀愛嫉妬病が勃發しさうだ。併し乍ら到底俺の力では側へもよりつくこたア出来やしないワ。キャプテンだつて、此奴ア駄目かも知れぬぞ。何とマア崇高い姿だらう。温和にして威厳あり、恰も天女の如し。あゝ男子現世に生を稟けて、斯の如き美人と婚すること能はずば、寧ろ首を吊つて其命を斷たむのみだ。エへ、何だか體中に波が打つて來よつたやうだ。俺の體を鋭利な刃物で一寸刻みにザクザクと何者かが刻み出したやうだ。ても扱ても苦しいものだなア。」

あゝあ キャプテンに報告もならず、
姫様の居間へ伺ふ譯にも行かず、
ホンに困つた事だワイ。……

鷺を鳥と言つたが無理か

一羽の鳥も鶏だ

葵の花でも赤く咲く

雪といふ字を墨で書く。

ヤ、可い事を思ひ出した。何程俺がヒヨツトコでも、雪といふ字を墨で書く以上は、あのナイスをウンと言はせない道理があらうか。あんな青い幹や葉をした葵からも眞赤な花が咲く例もある。暮を打つても、色の黒い奴と色の白い奴とが對抗するのだ。白い石同士は到底物にならぬ。ウンさうだ。おかめに美男、ヒヨツトコに美女といふ例もある。ヒヨツトしたら詔へ向かも知れぬぞ。あのキャプテンは面が青白い上に背がスラリと高く、どこ共なしに氣障な男だ。俺のやうな

節くれだつた力瘤だらけの強者は、却て優しいナイスが好むものだ。ヨーシ、俺も戀の爲にはユウンケルの職を棒にふつても構はぬ、ユウンケルが何だい。假令リユーチナントになつた所が知れたものだ。キャプテン、カーネル、ゼネラル、そんな物が何になる。ウン ヨシ、之から戀の勇者となつて、天下の男子に其驍名を誇つてやらう。地獄の上の一足飛だ。人間は一生に一度は危ない綱も渡つてみなくちやならないワ。男は斷の一字が肝心だと聞いてゐる。エーエやつつけやうかな。

吾戀は細谷川の丸木橋

渡るにやこはし渡らねば

好いたお方にや會はれない。………

とか何とか、誰かが仰有いましたかネだ。サア、ここで一つ駒を立直し、キャプテンに叛旗を掲げ、初稚砲臺に向つて、獅子奮迅の勇氣を以て、短兵急に攻めよ

せくれむ。國家の興亡此瞬間にあり、汝等兵員一同夫れ、奮勵努力せよ。否副守
護神一統、奮勵努力せよ。超弩級艦一隻、正に此港口にあり、閉塞隊の用意あつ
て然るべし」

と獨り喋ぎ乍ら、肩肱怒らし、一足々々力を入れ大手をふつて、芝居の光秀が花
道から現はれて來た時のやうなスタイルで、チリリチリりと進み行く。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第一章 黑白(一五一一)

へールは勢込んで初稚姫の籠もれる館の前迄やつて來たが、何だか敷居が高く
て心が怖ぢつく。

へール「エー、又副守の卑怯者奴、正守護神の行動を防止せむと致すか。猪口才
千萬な、左様な事に躊躇逡巡するへールさまではないぞ。全隊止まれ」

腹の中から副守一同に「ハイ」。

へール「よしよし、暫らく沈黙を守るのだ。いや寝て居るが宜い。非常召集の喇叭が鳴つたら、その時こそ一度に立上るのだ。それ迄副守全隊に休息を命ずる。今の間に郷里にでも歸つて爺婆の乳でも飲むで来い。アハ、ハ、ハ、ハ、到頭副守の奴沈黙しやがつたな。然しまだ恐怖心の奴、喰付いてみると見えるわい。これ恐怖心、お前も早く郷里に歸つて在郷軍人となり、農工商の業に従事せよ。一旦緩急あらば鋤を鐵砲に代へ、算盤を劍に代へ、鑿を槍に代へて義勇奉公の實を示すのだ。それ迄此へール體內國の現役兵を免ずる。有難く思へ。アハ、ハ、ハ、ハ、どうやらチツト許り恐怖心が退散したさうだ否歸郷したさうだ。エー一つ歌でも歌つて姫の精神を恍惚たらしめるのだな。俺も硬骨男子と云はれて居たが、女にかけたら何と云ふ軟骨だらう。此二〇三高地は一寸骨が折れるわい。口で法螺を吹き、尻で喇叭を吹いた位ぢや容易に効果が上らない。未來の聖人は禮樂を以て世を治めたと云ふ。射御書數は末の末だ。先づ禮を厚くし樂を奏し、微妙なる音聲を出して名歌を歌ひ、姫の心を動かすに限る。歌は神明の心を和らげ又天地を動かす

と云ふ。況んや、人間の心に於ておやだ。歌なる哉歌なる哉だ。

戀といふ字を分析すれば

絲し絲しと言ふ心……か、

やア此奴ア古い。初稚姫位のナイスになつたら已に聞いてるだらう。俺の發明した歌だと思つて呉れれば宜いが黴の生えた様な受賣歌だと思はれちや、却て男が下る。よし何とか考へて見よう。

絲し可愛と心に思や

絲しお方と先方が言ふ（戀）

これでスツカリ新しくなつた。然し乍ら引繰返しの焼直しだから、矢張もとの方がどうも宜い様だ。はてな、今度は愛と云ふ字を分析して歌つてやらうかな。

可愛【心】が【貫】くなれば
君は必ず【受】けるだらう。

今度は至上主義の至上だ、ベストだ。エへへへ、どうか巧くやり度いものだナ。

ラブのベストは【一】つで【ム】る

【土】の上には君ばかり。

初稚姫のナイスさま
天の川原に船泛べ

黄金の棹をさし乍ら
キヨの海原乗り越えて

これの館に天降りまし
花の顔月の眉

星の衣をつけ玉ひ
天女の姿その儘に

これの館にビカビカと
光らせ玉ふ尊さよ

朝日は照るとも光るとも 月の姿は清くとも

初稚姫に比ぶれば 側へもよれない惨めさよ

雪を欺く白い顔 肌滑らかにツルツルと

水晶玉の如くなり そも天地の真相は

白きは色の始まりよ 黒きは色の終なり

良は即ち年増ぞや 色は年増が良めさす

白と黒とが寄り合ふて キチンとしたる碁盤の目

経と緯との仕組をば 遊ばしました大御神

赤が重なりや黒うなる 黒がかへれば白となる

初稚姫の白い肌 ヘールの司の黒い顔

これぞ全く良の 嚴の御靈の御再來

初稚姫は瑞御魂 坤なる姫神の

皇大神の御再來 嚴と瑞との水火合せ

夫婦の契永久に 天の御柱廻り合ひ

山川草木諸々の 珍の御子を生みましし

神伊邪那岐の大神の その古事に神習ひ

此地の上に永遠の 天國淨土を建設し

所在百の神人を 救はむ爲に皇神は

お色の黒き尉殿と お色の白き姥殿を

目出度くここに下しけり 初稚姫の神司

如何にへールを嫌ふとも 神のよさしの縁ぞや

省みたまへ惟神 神の教に目覺めたる

へールの身魂に明かに 鏡の如く映りけり

此家の主チルテルは 肝腎要の女房を

他所に見捨て遠近の 仇し女に現をば

抜かして魂を腐らせつ 夫婦喧譁の絶えまなく

家財一切ガタガタと 時々騒ぎ躍り舞ふ

化物屋敷に居る様だ 青と白とをつき交ぜた

干瓢面を下げ乍ら
キヨの關守笠に着て

キャプテン面を振廻し
天から降つた初稚姫の

神の命の神女をば
閨のお伽になさむとて

チルナの姫に難癖を
うまうまつけて縛り上げ

倉の中へと無慙にも
押込めたるぞ憎らしき

かかる殘虐無道をば
敢て恥ない鬼畜生

かならず迷はせ玉ふなよ
涙もあれば血も通ふ

義勇一途のこのへール
昨晚の神の御告げに

其方は神世の昔から
深い因縁ある身魂

初稚姫と其昔
夫婦となつて道の爲

盡しまつりし天人ぞ
彌勒の神代が來るにつけ

お前を變性女子となし
初稚姫の神司

變性男子と現はれて
神の御國を細に

造り固めよと嚴かに
宣らせ玉ひし尊さよ

初稚姫の神司 必ず嘘ではない程に

神の言葉に二言ない 胸に手をあて神勅を

正しく覺りへールをば 神の結びし夫とし

睦び親しみ神業に 参加なされよ瑞御魂

變性女子が宣り傳ふ 朝日は照るとも曇るとも

假令大地は沈むとも 夫婦の道は變らない

兔角浮世は人間の 心の儘にはなりませぬ

互に缺點辛抱して 採長補短睦じく

天地の水火を固むべし 吾言靈の御耳に

安全に委曲に入るならば いと速けく返事

宣らせ玉へよ姫命 誠に厚きへール司

ここに愼み神勅を 命の前に宣りまつる

あゝ惟神々々 恩賴を賜へかし

初稚姫は中よりパツと戸を開いてへールの姿を打見守り乍ら微笑して、

初稚姫はつわかひめ 何人の言靈ぞやと怪しみて

窓を開けば面白の君。

種々と嚴の言靈繰返す

君の心の悲しくぞある

へール 吾とても男の子の中の男の子なれば

如何で女に心亂さむ。

さり乍ら神の言葉は背かれず

汝が命に宣り傳へける。

此戀は人戀ならず神の戀

ラブ・イズ・ベストの鑑なりけり

初稚姫はつわかひめ 言いかしの神かみの言葉ことばと聞きく上うへは
背そむかむ術すべもなきにあらねど

へール 曖昧あいまいな姫ひめの言靈ことたま如何いかにして

解とく由よしもなき吾わが思おもひかな。

益ます良ら夫をが思おもひつめたる戀こひの矢やは

やがて岩いはをも射い貫ぬくなるらむ

初稚姫はつわかひめ さは云いへど妾わらはは神かみの御使みつかひよ

夫つま持もたすなと嚴きびしき戒いましめ。

戒いましめを固かたく守まもりて進すすむ身みは

醜しこの嵐あらしの誘さそふ術すべなし。

詐りのなき世なりせば斯くばかり

吾魂を痛めざらまし。

吾身には戀てふものは白雲の

空にまします月の大神

へール 吾とてもこれの關所につきの神

テルモン山の雄々しき姿よ

初稚姫 春は花夏は橘秋は菊

冬水仙の寂しき花よ。

手折るべき人なき吾を慈しむ

男の子は神に等しとぞ思ふ。

眞心まごころは吾魂わがたましひに通かよへども

詮術せんすべもなし天人てんにんの身みは。

現世うつしよの人は一ひと所ひととこなりあはぬ

しるし有あれども吾われはこれなし。

浮うかれ男をの吾身わがからだ體たまを知らしずして

迷まよはせ玉たまふ事ことの果敢はかなさ

へール☐ どうしても皇大神すめおほかみの御教みをしへを

守まもりて君きみを吾妻わがつまとせむ。

如何いか程ほどに振ふらせ玉たまふも撓たゆみなく

從したがひ行ゆかむ海うみの底そこまで

初稚姫はつわかひめ 思おもひきや思おもはぬ人ひとの深情ふかなさけ

汲くむ由よしもなき吾われぞ悲かなしき

へーやルはら 柔やかに珍うづの言こと靈たま生いき車くるま

押おす君きみこそは天あまの於お須す神かみ

ラなブすベのスがトは 那な須す野のケが原はの若わか草くさは

踏ふまれ躡にじられ乍ながら花はな咲さく

初稚姫はつわかひめ 踏ふまれても又また切きられても花はな咲さかず

見みる影かげもなき無い花果いちぢくの樹きは。

神かみの道みち只ただ無い花果いちぢくに進すすむ身みは

春風はるかぜ吹ふくも咲さく例ためしなし。

花はなの無なき妾わらはの姿すがたを見限みかぎりて

野のに咲さき匂におふ花はなを求もとめよ。

紫雲英げんげばな花實げに目覺めざましく開ひらくとも

床とこの飾かざりにならぬ吾われなり〆

へール野邊のべに咲さく紫雲英げんげの花はなの花はなむしろ

敷しきてやすやす寝いねむとぞ思おもふ。

もどかしき君きみの言ことば葉はを早はや吾われは

聞きくも堪たえ難がたくなりにけらしな。

男心をこころの大和心やまとこころを振ふり起おこし

手籠てごめにしても手折たをらで止やまじ〆

と云いひ乍ながら表戸おもてどをガラリと開あけ、ツカツカと初稚姫はつわかひめの前まへに進すすみ猿臂ゑんびを伸のばして、

グツと其手を握らむとした。初稚姫は手早く其手を放し襟髪とつて窓の外に猫を提げた様な調子でフワリと投げ出した。へールはムクムクと起き上り再び座敷に性懲りもなく初稚姫の前に進み寄り、

へール「一旦男が云ひだした戀の意地、中途に屁古垂れる様な男ではムらぬ。もう此上は平和の手段では到底駄目だ。覺悟召され、美事靡かして見せよう」

と武者振りつくを初稚姫は手もなく、グツと押へつけ、

初稚姫「ホ、ホ、へールさま、宜い加減に悪戯なさいませ。貴方はお酒に酔つて居らつしやるのでせう。少しく酔の醒めるまで、此處でお休みなさいませ」

へール「決して酔うては居りませぬ。酔うたと云ふのは貴方の容色に酔つたのです。之も全く貴女より起つた事、吾心を鎮めて下さるのは貴女より外にはありません。せぬ。決して私は初めから貴女にラブしようとは思つて居なかつたのです。それが俄かに貴女のお姿を見るにつけ、忽ち神懸となり、矢も楯もたまらず、神の命に従つて貴女にかけ合つたのです。決してへールの考へではありませぬ」

初稚「ホ、ホ、よい年をして、ようまアそんな事を仰有いますな。プリンギング・

アップ・ファーマー（老年教育）を施さなくては到底貴方は駄目でせう。神さまの命令だなどと云つて妾を誤魔化さうと思召しても、外の女ならいざ知らず、妾に對しては寸功も現はれませぬから、どうか左様な詐言はお慎み下さいませ』

へール「何と仰有つても男の顔が立ちませぬ。何卒そこ放して下さい。左様な剛力で押へられましては息が絶れますわい」

初稚「息が絶えても構はぬぢやありませんか。貴方は妾の爲には海の底まで跟いて行くと仰有つたでせう、ホ、ホ、ホ、ホ」

と小さく笑ふ。そこへ足をチガチガさせ乍ら血相變へてやつて來たのは館の關守チルテルのキャプテンであつた。

（大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 北村隆光録）

第一二章 狐穴（一五一一）

妻つまのチルナに茶袋ちやぶくろを 力ちから限りに締められて

ウンと許ばかりに氣絶きぜつした 館やかたの主人あるじチルテルは

漸やうやく痛いたみも回復くわいふくし 再ふたび戀こひの炎ほのほをば

燃もやしてへールのユウンケルに 命めいじて姫ひめを介抱かいほうに

迎むかへ來きたれと命めいじおき 假病けびやうを使つかつて奥おくの閒まに

ウンウンウンウンと呻うめつつ 待まてど暮くらせどユウンケルは

何なんの音沙汰おとさた無なきのみか 耳みみを濟すまして窺うかがへば

肝腎要かんじんかなめのナイスをば 横領わうりやうせむと種々いろいろに

ベストを盡つくすと見みるよりも 羅刹らせつの如ごとくに怒いかり立たち

髮逆かみさかだててチガチガと 片手かたてに茶袋ちやぶくろ押おさへつつ

姫ひめの住所すまかに來きて見みれば 豈計あにはからむやユウンケルは

初稚はつわか姫ひめの細腕ほそうでに 取挫とりひしがれてハアハアと

苦くるしみ居ある可を笑かしさよ チルテル思おもはず吹ふき出いだし

嫉妬しつとの念ねんもどこへやら

チルテル、アハ、お姫様 實に天晴な御神力

キャプテン感じ入りました かく勇ましき女丈夫が

これの館に來ませしは 全く神の賜物ぞ

女房に離れしキャプテンの 身を憐れみて二世の妻

共に千歳を契れよと 梵天帝釋自在天

大國彦の御示し 實に有難き次第なり

おのれユウンケル姫様の 前をも恐れ憚らず

軍の司の身を以て 無體の戀慕を致すとは

亂暴至極の癡漢だ もう是からはキャプテンが

汝に暇を出す程に 早く此場を立ち退いて

風吹く野邊を彷徨ひつ 其身の果ては物貰ひ

袖乞奴となり下り 天女のやうな姫様を

苦しめまつりし罪咎を 天地に謝罪するがよい

サアサア早く立ち去れよ これの館はキャプテンが

千代の住家である程に

心汚れし汝等の

身魂の住まふ場所でない

伊吹戸主大御神

これの館を汚したる

製糞機械を一時も

疾く速けく科戸邊の

風に拂はせたまへかし

嗚呼惟神々々

神の使の姫様に

かはりて願ひ奉る

アハ、ハツハ、アハ、

實にも淺ましい態ぢやなア

身の程知らぬウンケルが

身の成り果てはこの通り

天罰忽ち廻り來て

赤恥さらす憐れさよ

イヒ、ヒツヒ イヒ、

初稚姫 此男餘り憎しと思はねど

力ためさむために斯くしぬ。

さりながらどことはなしに益良夫の

息かようこそ嬉しかりけり

チルテルは此歌を聞いて意外の面持しながら、

チルテル「これはしたり曲津の神の容器を

憐れみ給ふか心もとなや

初稚姫「二世の妻縛りて暗き倉の内へ

投げ込みたりし人ぞ憎らし。

吾も亦女房となりて倉の中へ

繋がれむかと怖ろしくなりぬ。

心荒き男子に身をば任すより

心やさしき人を求めむ

へールは初稚姫がパツと放した手の下から漸う顔を上げ、

へール「これはしたり初稚姫の御心

知らず恨みし事のくやしさ。

ユウンケルの軍の司を棒にふり

親しく添はむ姫の御傍に」

初稚姫「ユウンケルよりも尊きキャプテンを

いとなつかしく慕ひけるかな」

チルテル「初稚姫神の心を今ぞ知る

恨み歎ちし事の悔しさ。

ユウンケル今のお言葉何と聞く
とても及ばぬ戀とあきらめよ

へール 口先でかく宣らすとも村肝の

心の奥にへール通へる。

キャプテンが鬼の念佛如何程に

巧なりとも誰か聞くべき。

こと更に神に等しき姫君は

汝が心の汚きを知る

初稚姫 妾はキャプテンだのユウンケルだのと、そんな人爲的階級には少しも望
を囁して居りませぬ。唯男らしい男を望むで居ます。女と云ふものは繊弱いもの
でムいますから、假令色は黒うても跛でも片目でも出歯でも鳩胸でも構ひませぬ、

力の強いお方を夫に持ちたうムいます」

へール「イヤ、それで分りました。私は此關所の中でも仁王のへールと云はれた位ですから、腕力にかけたら私に勝るものはありませぬ。成程姫様も先見の明がムいますワイ。鬼や大蛇の猛り狂ふ世の中、矢張強いものでなくては世に立つ事が出来ませぬからなア」

チルテル「姫様、この男は口許り強いのですよ。一束の藁なら力持、三升の飯なら一度饌、その癖夏瘡せ寒細り、偶々肥満たら脹れ病、一里の道なら泊りがけ、雪隠行なら腰辨當と云ふ厄介者です。口は何程達者でも實力でなければ駄目ですよ」

初稚「そりやさうでムいます。妾は實際のお力を存じませぬから、何卒あの陥穽の傍で角力を取つて見て下さい。そして強いお方の御世話になりますから、夫が一番不公平が無くて宜いでせう」

チルテル「イヤ至極名案だ、サ、へール一つ勝負だ、赤裸々となつての勝負ぢや。一文の掛け引きもない。初稚姫様に検査を願つて勝つたものが姫様の夫になるの

だから、その覺悟で貴様も十分の力を出したらよからうぞ」

へール「アハ、ハ、ハ、面白し面白し、天王山の晴軍、勝敗の決、瞬間に迫れり。

姫様、天晴某の力を御覽下さいませ」

初稚「面白うムいませう。勝つたお方の女房にして頂きます。何卒何方も負けぬやうにして下されや」

二人は眞裸となり、ドンドンと四股踏ならし、陥穽の傍で今や勝負を初めむとする時、慌しく走つて来たのは、スパイのテクであつた。テクは此態を見て合點

ゆかず、直立不動の姿勢を取つて、

テク「僕はバラモン軍のリウチナント、テクであります。キャプテン様、ユウンケルの御兩人、奉納角力を取り組まれると見えますが、行司がなくてはかなはぬ

事、サア拙者が行司を致しませう」

テク「ヨウ、お前はテクか、好い所へ来て呉れた、一つ行司を願はう」

テク「へエ、よろしやす、宜敷うあります。なるべくはキャプテンが負るといい

のだから、イヒ、ハ、ハ、

のだから、イヒ、ハ、ハ、

のだから、イヒ、ハ、ハ、

のだから、イヒ、ハ、ハ、

初稚「其方は夜前妾の居間へお使に見えた、リウチナントさまぢやありませんか。
何とまあ、四角いスタイルだこと、ホ、ホ、ホ、ホ、」

テク「これはこれは姫様、久し振にお目に懸ります。先づ御壯健でお目出度うあります。」

初稚「昨日御目に掛つた斗り、久し振とは可笑しいワ。そして行司は妾が致し
す、貴方も勝負をして下さい。勝たお方の妾は女房になる決心でムいますから、
先づ第一にチルテル様とヘール様との勝負のついた上、勝つた方と貴方と勝負を
して頂き、もしもお勝なれば妾は貴方の女房にして貰ひます。オ、恥づかしやの
う、オホ、ホ、ホ、」

テク「これはよい所へやつて来て、お仲間入をさして頂くとは何と云ふ仕合せの
事だらう。力にかけたら滅多に後へはひかぬこのテクさまだ。きつと勝つてお目
にかけませう。」

チルテル「初稚さま、さう新手が殖へては困るぢやありませんか。お約束が違ふ
でせう。」

へール「何、何人なりと新手が現はれた方が面白い、負けさへせねばよいのだ。
サア三人消しがりだ」

と矢庭にチルテルに喰ひつく。チルテルは「何猪口才な」と忽ち四つに組むで揉み合ひ蹴り合ふ。二人の裸體は瀧の如く汗が滲み出し、又ルリ又ルリと體迂りがして、二人はパツと左右に別れた。押す、突く、突張る、必死の活動、此處を先途と挑み戦ふ其勢ひ龍虎の争ふ如く見えたるが、チルテルの力や勝りけむ、へー
ルはたうとう押し倒されて、深い陷穽へ投げ込まれて仕舞つた。忽ちテクは眞裸體となりチルテルに突つかかる。チルテルは「何猪口才な木つ端武者」と高を括つて組みついた。大地をドンドンと威喝させ乍ら、土佐犬の噛み合ひの如く、但馬牛の突き合の如く、千變萬化の秘術を盡して汗塗となり、半時許り、命辛々、「いが」み合うた。初稚姫は「オホ、。オホ、。と愉快氣に二人の勝負を眺めて笑つて居る。たうとうチルテルはテクに摺伏せられ陷穽の中へ無殘にも投げ込まれて仕舞つた。この陷穽は四五間許りの深さで、底には深い地下室が築かれてあつた、さうして落ちてても怪我をしないやうの装置がしてあつた。テクは

やれ安心と張り詰めし心もグツタリと緩み、ヘトヘトになつて其場に倒れた。これより先、ワックス、ヘルマン、エクス、エルの四人は關所の門を潛り、裏庭に妙な音がするので走り來て見れば、二人の男が眞裸體で角力を取つて居るので、チクチク傍により勝負如何にと眺めて居た。テクは漸くにして起き上り、さも嬉しさうな顔付にて、

テク「サア姫様お約束通り、リウチナントのテクが女房になつて頂きませう。もはやキャプテンはかくの如く失脚致しました以上は、リウチナントが此關守を勤めるのは當然、餘り憎うはムいますまいな、エへ、へ、へ、」

ワックス外三人は初稚姫の美貌に見惚れて、首を傾げ、食指を咬へて、ポカンとして居る。

初稚「テクさま、本當に貴方、力の強い方ですな。お約束通り女房にして頂きませう。併し乍らあの通りバラモン信者のワックスさま外三人が、テルモン山の神館から叩き拂ひに遇ふて玉國別様一行の後をつけ狙ひ此處に見えて居りますから、貴方の勝負にお勝ちなさつたお祝に、此方々をお招き申てお神酒などお上げなさ

いませ。乞食も身の祝ひと云ふ事がムいますからな」

テク「ウン ヨシ、女房の云ふ事なら、何でも聞いてやる。女房に對して忠實な、親切な、慇懃な、それはそれは柔しい、同情の深い、誠に結構なテクさまだ。こんな亭主をもつた女房も世界一の幸福ものだ。お前は幸運の神に見舞はれたものだ。俺も亦其通りだ。「よい嬢持つたら一生の徳だよ、近所も喜ぶ、テクさまも喜ぶ、テクさま所か悴も喜ぶ」。オイ、バラモン信者のワックス以下外三人、戀の勝利者のテクさまが此館の關守だ。さうして此ナイスが内事一切を構ふのだ。貴様もよい所へ來て呉れた。今日から俺の家來にしてやらう、サア此方へ來て一杯飲め」

ワックス「有難うムいます……エクス、ヘルマン、エルどうだ、矢張り私の豫言は違ふまいがな。キヨの港に着いたら意外の喜びが湧いて來ると云つたらうがな。エル「そりやさうだ。尻の千も叩かれて苦勞した苦勞の塊の花が咲いたのだからなア」

ワックス「シー、尻の話はもうやめて呉れ、馬鹿だな。こんな所まで來て恥を曝

す奴があらうかい」

テク「こりやこりや四人の家來共、何を云つて居るのだ。新夫婦のお祝ひ酒でも呑まないか。この館には確り仕込むであるから幾ら呑みても大丈夫だ。十日や二十日飲み續けても少しも構はぬのだ。親方が大黒主だから太いものだぞ」

ワックス「ヤ有難い、お目出たう、それなら御言葉に甘へて頂きます」

初稚「モシ、貴方こちの人、テクさま、妾のお手々を握つて頂戴、握手しませうか」

テク「ヨシ、お出た。握手だらうがキツスだらうが些とも遠慮は入らぬ」

と猿臂を伸ばして柔かい初稚姫の手を握つた。忽ち其手から白い毛がモジャモジャと生え出した。ハツと驚いた途端に驢馬のやうな大きな白狐となつて竹箒のやうな太い尻尾をブラリブラリと振つて居る。テクは「こいつは耐らぬ」と一生懸命裏門より、命辛々逃げ出した。ワックス外三人は呆氣に取られ、逃げ行く途端以前前の陥穽に一蓮托生、四人ともにバサバサと落ち込むで仕舞つた。

初稚姫に變化て居た怪物は、三五教を守護する、旭の白狐であつた。旭はノソ

リノソリと庭園ていえんの木の茂みしげを潜くぐつて何處いづこともなく、其姿そのすがたをかくした。
(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第三篇 地底ちていの歡聲くわんせい

第一三章 案知あんち〔一五—三〕

キヨせきしよの關所やかたの館やかたをば 探さぐらむ爲ためにテクテクと
玉國たまくにわけ別に暇告いとまつげ 斥候隊せきこうたいの心地こころちして
チルテル館やかたに行いてみれば 肝腎要かんじんかなめの事務室じむしつは

猫の子一匹居らばこそ

天井の鼠がチウチウと

ちちくり合うてゐる聲の

いと騒がしく聞ゆのみ

遠慮會釋も荒男

裏庭潛り初稚姫が

居間を目當に出で行けば

チルテル、ヘールの兩人が

衣脱ぎすて赤裸體

節くれだつたり氣張つたり

山門守る仁王さま

虎搏擊攘の眞最中

コラ面白い面白い

團扇はなけれど俺が今

行司をやつてつかはそと

勇み進むで近よれば

初稚姫は聲をかけ

お前はテクさまリユウチナント

行司は妾が致します

貴方も此處で衣を脱ぎ

力比べの消しがかかり

最後の勝利を得た方に

妾はラブを注ぎます

力の強い男をば

妾は夫に持つのだと

梅花のやうな唇を

いと愛らしく動かせて

詞涼しく宣り渡す

聞くよりテクは雀躍りし 玉國別の斥候と

なりて來りし身を忘れ うつつになつて衣を脱ぎ

いざ來い勝負と待ちゐたる 時しもあれやチルテルは

美事にへールを投げつけて 見るも恐ろし陥穽に

放込み了るをみるや否 よし來た勝負と手を拍つて

獅子奮迅の猪突主義 發揮し乍らくらひつく

體の汗はぬらぬらと 鰻と鯰が組みついて

争ふごととき爲體 合うては離れ離れては

又取組むでドスドスと 庭の小砂をへこませつ

茲を先途と戦へば 初稚姫は手をあげて

オホ、と笑ひつつ 愛嬌籠もる視線をば

二人の頭上に浴せかけ 勝負如何と待ちゐたる

チルテル、テクの兩人は 女帝の前の晴勝負

世界で一の色男 世界で一のナイスをば

女房にようぼうになして世よの中なかの有情男子うじやうだんしの肝きもひしぎ

其成功そのせいこうを誇ほこらむと 命いのちを的まとに挑いどみ合あふ

新あらて手のテクは漸やうやくに 相あひて手の禪まはしをひき握にぎり

ツドンと許ばかり地ちの上うへに 岩がん石せき落おとしに投なげ付つくる

勢いきおひ餘あまつてコロコロと 再ふたたび度みたび三度くわいてん廻まわ轉てんし

汗あせのにじゆんだ肉體にくたいは 忽たちまち砂すなの祇園棒ぎをんぼう

砂卷すなまき酢すずしとなり了をへて 千尋ちひろの深ふかき陷かん穢せいへ

またたく内うちに落おちにけり 遠さすがのテクも氣きをゆるし

月桂冠げつけいぐわんを得えたりとて 心こころホクホク地ちの上うへに

黒くろいお尻しりをドカとすゑ ハートに波なみを打うたせつつ

四邊あたりを見みればこはいかに バラモン教けうのワツクスヤ

エクス、ヘルマン、エル四人よにん 莞爾にこにこし乍ながら立たつてゐる

初はつ稚わか姫ひめは嬉うれしげに テクに向むかつて聲こゑをかけ

リュウチナントのテクさまえ お前まへは本當ほんたうに強つよい人ひと

サアサアこれから約束の

私は女房になります

握手を一つと言ひ乍ら

優しき白き手を出せば

握手所かキツスでも

何でも構はぬ致します

エへ、へ、へ、エへ、へ、へ

涎をタラタラ流しつつ

猿臂を伸ばして目を細め

白き腕を握らむと

なしたる刹那初稚姫の

無比のナイスはテクの手を

取るより早く白い毛を

現はし玉へばテクの奴

ハツと呆れて其面を

見上ぐる途端にあら不思議

目は釣上り口元は

耳迄さけし其姿

驚き後邊にドツと伏し

眼キヨロキヨロ光らせば

初稚姫は忽ちに

白狐の姿と還元し

箒のやうな尾をふつて

のそりのそりと歩み出す

ワックス始め三人は

驚き狼狽逃迷ひ

四人一度に陥穽に

バサリと墜ちて其姿

地上に見えずなりにける　テクは再仰天し
漸く腰を立て乍ら　足もヒヨロ　ヒヨロ　バタバタと
勝手門をば潜り脱け　尻はし折つて一散に
玉國別の隠れたる　タダスの森に走り行く
日は漸くに黄昏て　月は御空に輝けど
梢の茂みに遮られ　一寸先も見え分かぬ
暗の帳は下りにけり　眞純の彦は闇の森を
ブラリブラリと進み来る　此時先方より駆け来る
一人の男は忽ちに　眞純の彦の胸板に
ドンと頭を打ちつけて　アツと許りに打倒れ
ウンウン　キヤアキヤア唸りゐる　眞純の彦は怪みて
玉國別をソツと招び　火打を取りだし火を点じ
よくよく見ればこは如何に　斥候主任のテクの奴
ポカンと口をあけ乍ら　空を仰いで倒れゐる

其スタイルは池鮎の泥に酔ひたる如くなり
アツパ アツパと口あけて 目をキヨ口つかせ眺めぬる。

眞純彦はいろいろ介抱をし、テクを抱き起し、背中を打つたり撫でたりし乍ら、
眞純「オイ、テク、確りせむかい。敵の様子は何うだ。三千彦の所在は分つたか。
サア早く報告せよ」

テクは息苦しげに起き上り、土の上に両手を付いて、

テク「へー、どうも大變でムいます。夫れは夫れは日の下開山世界一の大角力が
初まつてをりました。私も其角力に参加して大勝利を得ました。そして、キ、キ
ツネの二ヨニヨ女房を褒美に貰いました」

眞純「オイ、テク、確りせぬかい。偵察は何うだつたい。此永の日を今迄、俺達
は待つてゐたのぢやないか、何をして居つたのだ。サア詳細に注進せい」

テク「イヤもう、化物屋敷の探險には、流石のテクもテクずりました。角力取が
穴へおちたり、狐が現はれたり、バラモンのワツクスが見物に出て來たり、それ

はそれは大した人氣でムいましたよ。折角、命カラガラ大勝利を得て、初稚姫といふ古今無雙のナイスを女房に持ったと思へば、キ、狐になつて、のそりのそりと這ひ出しました。イヤもう、怖いの怖くないのつて、口でいふやうな事ぢやありません。酒の酔も何も、一度に何處へか逐轉して了ひました。あゝあゝ、あゝ苦しい。こんな怖ろしい苦しい事は、生れてからまだありません。モシ玉國別先生、あんな所へ行くが最後、陷穽へ墮れますよ。そして彼處の奴ア、人間と思つてたら騙されますよ。皆狐になりますよ。あんな危険な所へは行て下さりま
すな。御身が大切にムいますから……」

眞純「オイテク、一向要領を得ぬぢやないか、モツと明瞭報告せないか」

テク「へへへ、要領を得ないのは當然ですよ。私も要領を得損つたのですからなア。……本當に本當に、古今獨歩、珍無類の奇妙奇天烈な、目に會つて來ましたワイ」

眞純「三千彦の消息は分つたか」

テク「餘り怖くつて、目が眩み、【みち】彦も川彦も何も分りませぬ。これ丈暗

いと、人ひとに行ゆき當あたつても、知しれないのですから、どして【みち】彦ひこが分わかりませうかい。あゝあ ホンニホンニうすい目に會あうたものだ」

眞ま純すみ「困こまつた奴やつだなア。何なんの爲ための使つかひだ。チツと確しつりせぬかい」

玉たま國くに「オイ、テク、少すこし氣きを落おち付つけて悠ゆうくと話はなしてくれ。お前まへの言こと葉はではチツとも要え領りやうが分わからぬからのう」

テクは暫しばらく休きう息そくした上うへ、館やかたの表おもてより進すすみ入いつて、裏うら庭にはを見みれば角すま力が始はじまりかけてゐた事ことや、自じ分ぶんが角すま力ふを取とつて勝かつた事こと、初はつ稚わか姫ひめと思おもつた女をんなは大きおほな白びや狐つこであつた事ことなどを細こま々まと復ふく命めいした。そして三千みち彦ひこ外ほか二人ふたりの行ゆく衛ゑは分わからなかつたが、大方おほかたおとしあなへ落おちてゐるだらう……と心しん配ぱい相さうに答こたへた。玉たま國くに別わけは暫しばらく首くびを傾かたむけ思し案あんに暮くれてゐた。

眞ま純すみ「モシ先生せんせい、どう致いたしませうか、三千みち彦ひこ以下いか二人ふたりを、此この儘まま放ほう任にんする譯わけにも行ゆかず、ぢやと云いつて、此この暗くらいのにうつかり行ゆかうものなら、又またもや陷おとし竊あなへ突つ込こまれちや大たい變へんですからなア」

アンチー「モシ、先生せんせい様さま、そんな御ご心しん配ぱいは要いりませぬ。私わたしが御ご恩おん報ほうじに瀨せぶみを

致いたしますから、何卒どうぞ後あとから足跡あしあとを踏ふんで來きて下ください。若もし私わたしが落おち込こむだら、そ
こを通とほらない様やうにして下くだされば、それで安あん心しんでせう。サア參まゐりませう。グツグツ
して居をつては三み千ち彦ひこ様さま御ご夫ふう婦ふを始はじめ伊いた太た彦ひこさまが何どうなるか知しれませぬ。あの館やかた
には澤たく山さんの兵へい士しが居をるといふ事ことですからなア」

玉たま國くに「免とも角かく充じう分ぶん注ちう意いをして進すすむ事ことにせう。オイ、テク、お前まへはモウ、バーチル
さまの館やかたへ歸かへり、番ばん頭とうさまの役やくを忠ちう實じつに勤つとめたがよからう。狼あわ狽て者ものを伴つれて行ゆく
と、却かへつて作さく戦せん計けい畫かくの齟そ齬ごを來きたすからなア」

テク「滅めつ相さうもない、どこ迄までもお伴ともを致いたします、大たい抵ていの所ところは勝かつて知しつてみます。
滅めつ多たに落おち込こむ様やうなこた致いたしませぬ。何なに程ほど暗くらくても、空そらさへ見みれば梢こずゑの調てう子しで、
此こ處こは何ど處こだ位くらいの事ことは分わかつてみますからなア」

アンチー「然しからば私わたしが先せん頭とうを仕つかますせう。あの屋やし敷きは私わたしも、三さん年ねん以い前ぜんにチヨコ
チヨコいつた事ことがあります。……オイ、テクさま、お前まへは一いち番ばん後あとから先せん生せいを守つ
てついて來こい、……

暗の帳は下されて
一寸先は見えず共

心の空の日月は
鏡の如く輝けり

玉國別の神司や
眞純の彦に従ひて

吾等二人は勇ましく
バラモン教の悪神の

醜の館を指して行く
何程暗いと云つたとて

元より盲でないものは
暗になれたら明るくなる

只恐るるは足許の
百足や蝮の類のみ

そのの危難を遁れるは
三五教の神様の

教へ玉ひし數歌を
一二三四五つ六つ

七八九つ十百千
萬と稱へ進むなら

如何なる曲も恐るべき
却て先方が戦きて

雲を霞と逃げるだらう
三千彦さまのお身の上

デビスの姫や伊太彦の
悩みを案じ煩ひつ

心の駒のはやるまに
神の光を身に浴びて

敵の館へ進み行く
あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして
玉國別を始めとし

吾等一行恙なく
三千彦様の一行を

救はせ玉へと願ぎまつる
俄番頭のテクさまが

眞晝の内に偵察と
お出かけなされて泡をふき

大化物や晝狐
得體の知れぬ怪物に

肝を奪られて歸り来る
其光景の可笑しさよ

此アンチーはどこ迄も
狐や狸にや恐れない

無人の島に三歳ぶり
大蛇や鷹と相棲居

一旦鬼の境遇に
成さがりたる經驗上

何程惡魔が攻め來共
決して恐るるものでない

玉國別の師の君よ
眞純の彦の神司

心平に安らかに
アンチーの後を目當とし

進ませ玉へ惟神
神の守りで安全な

場所へ案内致します」

かく小聲で歌ひ乍ら、チルテル館の裏門から足元に氣を付け乍ら、アンチー、
テクは後先に立つて進み入る。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第一四章 舗照(一五一四)

神の教の三千彦は デビスの姫を救ひ出し

伊太彦司と諸共に チルテル館の庭前を

木蔭に身をば隠しつつ 意氣揚々と歸り行く

忽ち足元バツサリと 思ひ掛けなき底脱けの

滑り落ちたる陷穽

三人は何の怪我もなく

地底の一間に安着し

四邊を見れば摩訶不思議

思ひもよらぬ廣い洞

光きらめく燐光の

常磐堅磐の岩の穴

黒白も分ぬ暗の夜に

光明世界に登りたる

心地し乍ら悠々と

三人は手をばつなぎつつ

蒲鉾なりの大道を

進むが如くスタスタと

足に任せて探り行く。

伊太「何だかバツサリと地底へ落ちた様な気がしたと思へば四邊はキラキラと光

り輝く光明世界だ。扱も扱も不思議な事があるものだな。三千彦さま、吾々は夢

でも見てゐるのぢやありませんまいかな」

三千「いや決して夢ではありません。敵の術中に陥り陷穽に落ち込むのですよ。

凡て此邊は地中の洞穴が澤山ある所です。此暗夜にキラキラ光るのは全部燐鑛で

す。然し乍らここは昔立派な人間の住居して居た所に違ひありません。何處か此

處邊で休息致しませう」

伊太「比較的スベスベしたよく慣れた岩窟ですな。これ位だと何處か探したら、澤山な座敷がとつてあるに違ひムいませぬわ。一つ念入りに探して見て、座敷でもあればまあ貴方御夫婦は新所帯をなさいませ。私はまあ臨時番頭となつて御用を致しませう。ねえ奥様、結構でせう」

デビス「ホ、ホ、ホ、伊太彦様の仰有る事、ようまあそんな氣樂な事が云つて居られますな。ここは敵の屋敷、何時煙攻めに會はされるやら、徳利攻にされるやら分りませぬのに本當に貴方は樂天主義ですな」

伊太「陥穽からバツサリと地底へ落轉主義です。まあまあ宜しいわい。刹那心を樂みませう。後には玉國別の先生もあり眞純彦も残つて居りますから、屹度尋ね出して私等を救つて呉れるに違ひありません。まあ取越苦勞をせず此瞬間を樂みませう。悔んで見た所で、どうにもならぬぢやありませんか。暫く馬鹿になつて居れば何も苦しい事はありませんわ。世の中に馬鹿と狂人になる位幸福はありませんから。神様も始終馬鹿と狂人になれと仰有りますが本當に馬鹿と狂人位

氣樂きらくなものものははムいませぬわい、アツハ、、、[『]

三千みち『もう宜よい加減かげんに後あとへ引返ひっかへしませう。何程いくら行いつても際限さいげんがありませぬわ。これからベルヂスタン、アフガニスタンの方ほうへ行ゆくと、斯こんな岩窟いはやは澤山たくさんあると云いふ事ことです。醜しこの岩窟いはやと云いつて随分ずいぶん有名いうめいなものもあるからな[』]

伊太いた『兔とも角かくも、も一度いちど念入ねんいりに探さがして見みませう[』]

と又元またもとへ引返ひっかへし其處邊中そこらぢうを探さがして見みると自分じぶんの落おち込こむだ穴あなの横よこに少すこし凹へっこんだ處ところがある、伊太彦いたひこはグツと押おして見みると廣ひろい岩窟いはやがあつて、燐鑛りんくわうがキラキラと四邊あたりに光ひかつて居ゐる。

伊太いた『や、有難ありがたい、ここで暫しばらく籠城ぶうじやうときめやう。これ丈だけ設備せつびが出來できて居ゐると食糧しよくりやうも水みづも何處どこかにあるだらう[』]

と先さきに立たつて進すすみ入いる。

三人さんにんはドシドシ奥おくへ進すすむで見みると、足あしにガシガシと觸さはるものがある。よくよく見みれば芭蕉ばせうの葉はで編あんだ蕙むしろが敷しきつめてある。

伊太いた『や、此奴こいつア意外いぐわいな珍座敷ちんざしきだ。まアここで三人さんにんが悠ゆつくりと雜魚ざこ寢ねを致いたしませう。

然し御邪魔になれば暫く控へて居ませう」

デビス姫「思ひきや醜の岩窟に落されて

疊の上に寝ぬる嬉しさ。

菅疊いやさや敷きて三人連れ

寝る夢心地してぞ嬉しき」

伊太彦「又しても寝る事許り仰有るな

此伊太彦はセリバシーぞや」

デビス姫「妾とて神の御業の濟む迄は

同じ思ひのセリバシーなり」

伊太彦いたひこ 千早振ちはやぶる神代かみよも聞きかぬ妹いもと背せが

セリバシーとは怪あやしかりけり㊦

三千彦みちひこ 心こころなき人ひとは三千彦みちひこデビス姫ひめの

仲なかを怪あやしく思おもふなるらむ㊦

伊太彦いたひこ 人前ひとまへを飾かざることなく詳細まつぶさに

告つげさせ玉たまへ鴛鴦をしの親したしみ㊦

デビス姫ひめ 只ただ見みれば夫婦めをとの睦むつびせしものと
思おもふなるらむ世よの人々ひとびとは。

さり乍ながら心こころ健けなげ氣なな三千彦みちひこは
怪あやしき夢ゆめを結むすび玉たまはず

三千彦みちひこ 伊太彦いたひこやデビスの姫ひめよ村肝むらきもの
ゆめ心こころをな傷いため玉たまひそ

伊太彦いたひこ 伊太彦いたひこの心こころは君きみが親したしみを
神かみの御前みまへに祈いのり暮くらしつ。

村肝むらきもの心こころ配くばらせ玉たまふなく

妹背いもせの道みちを守まもらせ玉たまへ。

妹いもと背せの仲なかを隔へだつる伊太彦いたひこは

人目ひとめの垣かきと思おぼしめ召めすらむ。

板垣いたがきを潜くぐりて出いづる門戸もんこあり

隙ひま行く駒こまの例ためし知らずや。

根ねの國くにや底そこの國くに迄まで落ちしかと

思おもひし事ことも夢ゆめとなりぬる。

何なんとなく心こころ勇いさましくなりにけり

岩窟いはやの中なかにあるを忘わすれて。

袴たかぶすまいやさや敷しきて三人みたりづ連れ

夜よの明あくるをば待まちつつ寝いねむ

デビス姫ひめ 〇 いざさらば伊太彦いたひこ司つかさ三千彦ちひこよ

心こころ定まめて寝ねむに就つかむ

三千彦みちひこ 村肝むらきもの心こころにかかる雲くももなし
花はなと月つきとの君きみとありせば

伊太彦いたひこ 花はなは姫ひめ伊太彦いたひこ司つかさは三千彦みちひこに
つきの姿すがたとなりすにけるかな

三千彦みちひこ 伊太彦いたひこやデビスの姫ひめの眞心まごころを
神かみは嘉よみして救すくひ玉たまはむ。
何事なにごとも神かみのまにまに従したがひて
天あまの岩戸いはとの開あくを待またなむ

かく互たがひに三十一みそひと文字もじを詠よみ交かはし乍ながら其夜そのよは他愛たあいもなく眠ねむらひにけり。

地上の世界は漸く明るくなつたと見えて四邊の燐鑛は次第々々に薄らぎ、新しき光が何處ともなく刺して來た。伊太彦は入口の間に宿屋の番頭然として一人類杖をついて横はつて居る。そこへバサリと落ちて來た一人の男がある。よくよく見ればユウンケルのヘールなりける。

伊太「や、入らつしやい」

ユウンケルは此聲に驚いて、

ヘール「や、あ、貴方は何人でムいますか、何時の間に此處にお越しになつたのですか」

伊太「つい近頃旅館開業を致しましてまだ設備も充分に出來て居りませぬが、何卒足を洗つて奥へお通り下さいませ。そして上等が一泊五圓、但し晝飯を抜きに致しましてでムいます。晝飯ともに七圓でムいます。その代り茶代廢止の廣告をして置きましたから比較的安いものです。然し茶代としては頂きませぬが、お土産としてならば百圓でも千圓でも少しも辭退は致しませぬ」

ヘール「アハ、ハ、ハ、腹さへヘール様な事がなければ辛抱致します。何分此頃は

貧乏神に見舞れて居りますから、あまり高い宿賃は出せませぬ。どうか二等位の所でお願致します

伊太「開業勿々で設備も出来て居りませぬから、チツとは辛抱して頂かねばなりません。そして食つて頂くものは何もありませんが、鬼の蕨か、捻餅か、鼻抓團子ならば無盡藏に仕込んであるから腕のつづく迄食つて貰はうと儘で頂きますわ」

伊太「それならお望みに任せませう。然し宿賃は前金で頂きますから其お積りで願ひます。お茶代は要りませぬがチツと小便臭う頂きますが、大變暖かくつて丁度飲み頃で頂きますよ」

伊太「折角泊めて頂かうと思ひましながら小便茶を飲ませられちや堪りませぬから、此方から小便致します。大きに有難う。又次の宿屋で御厄介になります」

伊太「此岩窟ホテルは何處へおいでになつても皆此伊太屋の屋敷で頂きます。伊太屋の主人の承諾なくては、どこの端くれにも置く事は出来ませぬ。千日前の夜店でさへも地代をとられるのですから、そんな事をして居つては商賣が立ち行き

ませぬからな」

へール「アツハ、、、、それなら極上等でお願い致しませう」

伊太「いや毎度御贔屓に有難うムいます。さア何卒奥へお通り下さいませ。デビス姫と云ふ仲居も居り、三千彦といふ幫閒も居りますから、御退屈なれば何なりと仰せつけ下さいませ。それが岩窟ホテルの特色です。ウツフ、、、、」

へール「それなら御厄介になりませう」

と奥の間に羽ばたきし乍ら進み入る。

伊太「アツハ、、、、宿屋ごつこも面白いものだ。然し乍ら一晚五圓では、どう

も算盤が合はぬやうだ。朝から晩まで高い炭火を焚いて炬燵も拵へてやらねばな

らず、一室に一つづつ火鉢には火を絶やさぬやうにせねばならず、不心得のお客

になると折角疊替へした疊に煙草の火を落して焦すなり、蒲團が硬いの、軟いの、

薄いの、厚いの、重たいの、水に金氣があるの、なんのと叱言許り聞かされて：

一寸五圓と云ふと、高い様だが懐勘定して見ると餘り、ぼろいものぢやないわ

い。アタ邪魔臭い、一里も一里半もある警察に宿帳を持って行かねばならず、夏

の日はまだ宜いが冬の雪が一丈も積つた間は何程貰つてもやりきれないわ。開業
匆々一人のお客はあつたが之では如何も詮らない。三人の案内が一人位お客を泊
めたつて、そのかすりでも如何して世帯が持てるものか。電燈料も拂はねばならず、
戸數割も相當に課けられるなり、おまけに家賃に地代、町内の交際、よう物入り
のする事だ。誰か大金持のお客さまが泊つて金の十千萬兩も雪隠の中へ落してお
いて呉れると宜いけれどな。何程山吹色だと云つても、雪隠に浮いとる奴では糞
の役にも立たず、あゝ仕方が無いな、せめて今晚は客の十人位は泊めたいものだ
な」

斯く一人興がつてゐる所へ上の方からズルズル ドスンとさくなだりに落
ち込むで来た一人の大男がある。

伊太「もしもし、貴方はテルモン詣でムいますか。これから先は一寸宿がムいま
せぬから拙者の宅へ泊つて行つて下さいませ。キヨの湖水には海賊船が横行致し
て居ります。海上で賊に剥ぎとられるよりも弊館でお泊り下さつて剥とられなさ
つた方が安全でムいませう」

チルテル「お前はどこの奴だ。ここは俺の屋敷内の岩窟だが、誰に断つて、こんな所に居るのだ」

伊太「借地権は已に登記済となり此家は賃貸借法によつて、一ヶ月四十九圓（始終食えぬ）の家賃を拂つて居ます以上は、矢張り伊太屋の財産も同様でムいます。サア何卒お泊り下さい。千客萬來開業匆々目出度い事だ。御姓名は何と申します。一寸宿帳に記して頂きたいものです」

チルテル「エー、お前は人を馬鹿にするのか。但は呆けて居るのか。ここはホテルでも何でも無い、キヨの關所の庭前の陥穽だ。つまり俺の領分内だ。グツグツ申すと承知せぬぞ」

伊太「成程、貴方が大家様でムいましたか。これはこれは失禮致しました。然し當家に泊つて貰へば矢張り宿賃を貰はねばなりません。阿呆の國、野留間郡頓馬村大字腰拔小字失戀、第百苦集苦番地の始終苦、狐騙されゑ門、雅名は落膽と書いて置きました。マア之で形式さへ通ればいいのですからナ」

チルテル「エー、合點のゆかぬ事だわい。初稚姫のナイス、テクの奴と手を曳い

て、今頃にや喜んで其處邊をブラついて居やがるだらう。此處へ落ち込んで來ると宜いがな、エー怪體な事だわい」

伊太「何は兔もあれ、奥に賓客室がムいます。そこには下女も下男も居りますから世話をさせませう。初稚姫よりもズツと勝れたナイスが開業と同時に抱へ込むでありますから、まアそんな難い顔せずにお泊り下さいませ」

チルテル「何は兔もあれ、どんな女が居るか、一つ調べてやらう」

と云ひ乍らスタスタと奥の間に進み入る。へールは奥の間に進むだ。自分は伊太彦に擲揄はれ、何時の間にかお客さま氣取りになり、横柄な面をして奥の間へ通つて見れば、三千彦、デビス姫の二人が一閒程距離を隔ててキッチンと坐つて居る。へール「おい、お客さままだ　お客さままだ。こら、少女、早く茶を出さないか。料理人と晝日中何密談をやつてるのだ。そんな事で商賣が繁昌するか。もう、これつきりで泊つてやらぬぞ」

三千彦「お、お前さま赤裸體で何處から來たのですか」

へール「何處からも何もあつたものかい。其處から來たのだ。今此處の番頭に掛

合あつて最さい上等じやうとうで泊とまる事ことにしたのだ。さア早はやく茶ちやを汲くむだり汲くむだり」

三千彦みちひこ「訝いぶかしや醜しこの岩窟いはやは忽たちまちに

珍つづのホテルとなりにけらしな」

デビス姫ひめ「何なに國くにの旅たびのお方かたか知しらねども

宿やどにはあらし宿やどの妻つまぞや」

ヘール「吾われこそはリュウチナントのヘールぞや

憐あはれみ玉たまへ珍つづのよき人ひと。

初はつ稚わかの姫ひめを争あひそぐひ角すま力ふとり

負まけて岩窟いはやに落おち込こみし吾われ」

デビス姫ひめ ♪ 汝なれも亦またこれの岩窟いはやに落ちしかと

思おもへばいとど憐あはれなりけり。

此この上うへは最早もはやナイスに憐あはれとも

あはれないとも分わからざりけり ♪

かかる所ところへ又またも眞裸體まっぱだかのチルテルが面膨つらぶくらし乍ながらノソリノソリとやつて來きた。

へール ♪ アツハ、、、おい、チルテルさま、君きみも矢張やつぱり戀こひの敗者はいしやだな。や、贊さん

成々々せいさんせい、之これで漸やうやく溜飲りういんが下さがつた。ウツフ、、、 ♪

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第一五章 和歌意(一五―一五)

三千彦伊太彦デビス姫

三人は館の廣庭を

暗に紛れて駆け出す

途端に地底の岩窟に

スツテンコロリと迂り落ち

此處に一夜を明かしつつ

無聊を慰む其爲に

伊太彦司は口の間に

出でて胡床をかきながら

思案に暮るる折もあれ

ツルツルツルと落來る

一人の男を見るよりも

驚き乍ら胸を据ゑ

新規開業の旅人宿

氣轉を利かす面白さ

戀を争い陥穽に

投げ落されたへール司

一目見るより仰天し

お前はいつくの何者か

訝かしさよと訊ぬれば

伊太彦頭をかき乍ら

私は伊太屋の番頭です

何卒一夜を吾宅で

お泊りなされて下さんせ

一等二等三等と

區別が

ついて居りますが

貴方の人格調ぶれば

金も持たない眞裸體

一等旅館に限りませぬ
開業早々で何事も

準備が整ひおりませぬ
鬼の蕨か鐵拳か

捻り餅など澤山に
お食りなさつて下されや

お茶は熱うなし微温うなし
魔法瓶から天然に

ちつと臭いが幾何でも
ついで上げますサア早う

足を洗つて奥の間へ
お通りなされサア早う

今日は目出度き開業日
ようまア泊つて下さつた

何ぢやかんぢやと揶揄へば
遠のへールも呆れはて

そんならお世話になりませう
何分宜敷く頼むぞや

始終食圓の宿料を
約束し乍ら奥の間へ

通れば下女のデビスさま
料理人擬ひの三千彦が

一間許り相隔て
行儀正しく坐り居る

へールは二人に聲をかけ
一等客が参りました

早くお茶でも汲みなされ
料理人と下女が奥の間で

晝の最中にぬつけりと

内證話をすると云ふ

不都合な事があるものか

アハ、ハツハ、アハ、

三人一度に聲を上げ

笑ひ興ずる時もある

又もや入り来る荒男

よくよく見ればチルテルの

此家の主キャプテンが

眼怒らし睨み入る

その面貌の凄じさ。

へール「ヤア、チルテルさま、私の後を追つかけて、よう来て下さいました。こ

れが女だと、誠に都合がよからうになア、エへ、

チルテル「そこに居る女はデビスぢやないか、あれ程厳しく縛り上げて、土藏の

中に繋いでおいたに、どうして此處へ出て来たのか」

デビス「オホ、。貴方は關守のキャプテンさまぢやありませんか。此間は

甚いお世話になりましたなア。妾の寢床にわざわざお出下さいまして神輿か何か

のやうにワツシヨ　ワツシヨと昇つぎ御丁寧にお倉の中にお入れ下さいまして有

難うムいます。併しリュウチナントのカナナ様がお出下さいまして、「どうか此倉は私が住宅にしたいから早く退いて下さい」と家主から追つ立てを喰ひましたので止むを得ず、此岩窟ホテルに移轉し、やつと開業した所です」

チルテル「ナニ、カナナと入れ替はつた。ハテ合點の行かぬ事を云ふものぢやなア。イヤ三千彦もそこに居るぢやないか、此方の家敷へ夜中に忍び込み、何か好からぬ事を企み其天罰でこの陥穽へ迂り落ちたのだらうがな」

三千彦「アハ、ハ、ハ、ハ、オイ、チルテルさま、女房が甚いお世話になりました。有難うムいます。併し貴方はどうして此處へお出になりました」

チルテル「これは拙者の管轄内だから、一寸巡檢に來たのだ。それが何と致したへール」ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。甘い事仰有いますわい、これ三千彦さま、實は初稚姫さまの色香に迷ひ、鼻の下を長うして吾々兩人が口説き立てた所、初稚姫さまは、角力をとつて勝た人の女房にならうと云つたのです。さうした所、運悪くも足踏み外し眞先に私が落ち込むで仕舞つたのです。後ではテクとこの大將が勝負する事になつて居ましたが矢張負たと見えてこの岩窟に落ちて來たのです。このキヨの

關所守はこの岩窟に一度でもおち込むで來たら免職になるのですから今日のチル
テルは最早、キャプテンではありません。ユウンケル位なら棒に振つても宜敷い
が、折角茲迄捏ね上げたキャプテンの職名を棒に振るのは聊かお氣の毒ですわい、
ウフ、。もし三千彦さま、もう斯うなれば、吾々はバラモンの軍人でも何で
もありませぬ、何卒四海同胞の精神をもつて可愛がつて下さい。貴方の奥さまを
擔ぎ出したのは吾々ぢやありません。皆このチルテルが兵士を連れて行つて盗み
出したのですよ。さうして初稚姫様を自分の妻となし、リュウチナントのカンナ
さまに口ふさぎのため、デビスさまを宛がうためにあんな事をやつたのですよ。
御迷惑はお察し致します」

デビス姫「吾身をば擔ぎ出したる其人と

今打ち解て向い合ふかな。

何事も皆神様のお仕組と

悟れる身には恨だになし」

チルテルコヒ戀コヒと云イふ醜シコの魔神マガミに眩クラまされ

思オモはぬ罪ツミを重カサねけるかな。

此コノ上ウヘは心ココロの罪ツミを委細マツブサに

君キミの御前ミマヘにさらけて詫ワビむコト

デビス姫ヒメ「赤心マココロの未イマだ失ウせざる君キミこそは

神カミの救スクひの門カド口ドに入るイるなりコト

チルテル「有難アリガタし汝ナレが言葉コトバは皇神スメカミの

深フカき情ナサケと涙ナミダぐまるる。

仇人アダビトを憎ニクみたまはず懇ネモシロに

いたはりたまふ君キミは神カミなりコト

へール「キャプテンの口の車に乗せられな

苦しき故の吟みなりせば。

又しても十八番の奥の手を

出した男の憎らしきかな。

チルテルはいとしき妻を追ひ出し

仇し女を娶らむとせり。

吾は未だ妻を持たざるセリバシ

憐れみたまへ無垢の體を」

チルテル「横町の床屋の嬢に皆さげ

はぢかれたりし時のをかしさ。

お多福に肱鐵砲を食はされて

めそめそ泣きしへールぞ可笑しき」

へールひと 人の非おほぜいを大勢まへの前に素破すつばぬ抜く
汝なは曲神まがつみの器うつはなるらむ

チルテルまが曲神かみか誠まことの神かみか知らねども
ありし誠まことを吾われは云いふなり

三千彦みちひこ 面白おもしろし人の情なさけは唐日本からやまと
いづくの果はても變かはらざりけり。
伊太彦いたひこは如何いかになしけむ姿すがたをも
今いまだにみせず心こころもとなや

へールくちの間に伊太屋いの番頭ばんとうと納まりをさりて

帳面ちやうめん片手かたてに算盤そろばん持もたせり。

面白おもしろい男をとこもあればあるものよ

岩窟いはやにおちて宿屋やどや氣取きどれる

三千彦みちひこ此上このうへは心こころの垣かきを取とり拂はらひ

助けたす合あひつつ神かみの道行みちゆかむ

チルテルありがた有あ難がたし誠まことの道みちを宣のり傳つたふ

君きみの心こころの分わけへだてなき

へール「バラモンのこれが司であつたなら

こんな譯にはとても行くまい」

デビス姫「古ゆ縁の絲に繋がれて

睦び合ふたる今日ぞ床しき」

チルテル「此上は心清めて三五の

神の大道に進み行くべし」

三千彦「バラモンの神の教を捨てずして

我三五の道を守れよ」

斯く四人は打ち解け、互に意見を交換して兄弟の如く、睦び合ふ事となつた。
あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

(昭和九・一一・三〇 王仁校正)

第一六章 開窟(一五—一六)

伊太彦は依然として、入口に坐つて居るとワツクス、エキス、ヘルマン、エルの四人が轉げ込むだ。次に、忽ちバラスをぶち開けたやうに、ドサドサドサと十七八人のチュウリツク姿の若者折り重なつて落ち込み來る。

伊太「ヤア、大勢さま、よく御下向になりました、サア此處は坂の下の小竹屋でムいます。大竹屋のやうに決してお客さまを床の下から手槍でついて、命をとり着物を剥取つて樽に詰めて海へ投りに行くやうな事はありません。まア安心して

お泊り下さい。せいぜい勉強してお安く願ひます。晝飯もこめまして、お一人さまに三圓づつで泊つて頂きます。あゝ、大繁昌だ。宿屋もこれだけ客があれば捨てたものぢやないわい。番頭さまも随分忙しい事だなア

一同はムクムクと起き上り、互にがやがやと呟いて居る。

甲「オイ、貴様が俺の云ふ事を聞かないから、たうとうこんな奈落へ落ちて仕舞つたのだ。一體どうして呉れるのだい」

乙「馬鹿云ふない。いつも目標の黒い棒杭が立つて居たぢやないか、あの脇を通ればよいのだ。誰かが、棒杭の位置を變へて置きやがつたと見えてこんな失策をしたのだ」

甲「馬鹿云ふない。ありや棒杭ぢやない、様子が違つて居るから、氣をつけと云つたぢやないか、然るに貴様が「ナニ」と云ふて我を張つたものだから、こんな所へ皆落ちて仕舞つたのだよ。誰か様子を知つて居るものが救ひ出して呉れるよりに外に出る道はない。まアミイラになる所まで辛抱するのだなア」

伊太「お客様ようお出なさいました。新規開業の宿屋でムいます。お安く願ひま

す

甲「ヤア貴様は三五教の奴ぢやないか、どうして居るのだえ」

伊太「エイ、餘り宣傳使と云ふ商賣も引き合ひませぬので、俄に岩窟ホテルを開

き、商賣替を致しました。奥にチルテルのキャプテンも、ヘールのユウンケルも

お出です。サア御遠慮なくお通り下さい、毎度御贔屓に有難うムいます」

乙「何だ、怪體な事があるものだなア。併し乍ら奥へ這入つてキャプテンに遇ひ

一時も早く助からねばならぬ」

と委細かまはずどやどやと奥へ進むで行く。

チルテル「ヤアお前達は大勢一度にこんな所へ落ち込むで来たのか」

甲「ハイ、旦那のお行方を探しました所、何處にもお姿が見えないので、大方岩

窟ホテルに御投宿かと思ひまして、部下を引き率れ、お迎ひに参りました」

チルテル「ヤ、それは御苦勞だ。よく迎へに来て呉れた。關所の入口は開けて置

いたらうなア。其處さへ開けてあれば出るのは甘いものだ。三千彦さま、デビス

さま、もう御安心なさい。萬古末代出られないかと思ひましたら入口を開けて部

下が迎ひに来てくれました」

甲「へエ、折角乍ら其入口から、開けてお迎ひに来たのなら都合がよいのですが、思はず知らず落ち込むで来たので、へエ、誠に困つて居ります。何處かに抜穴はムいますまいかな」

チルテル「あゝもう駄目だ。一人も残らず、此處へ落ち込むで仕舞つた。誰一人も助けに来るものはないか。残念ながら俺達一同は此處でミイラになるより仕方が無いわ。三千彦様貴方は何うお考へですか」

三千「何だか知りませぬが、私は玉國別の神司が、きつと救ひに来て呉れるやうな氣がします。それだから、少しも案じては居りませぬ。皆さま氣を落ちつけて御休息なさいませ」

一同はガサガサ云ふ疊に横になり、ガヤガヤと囁き乍ら、救ひの人の現はれ來るのを待つて居た。三千彦はデビス姫と共に拍手を打つて一生懸命「三五教の大神、バラモン教の大神、守りたまへ救ひたまへ」と祈願し初めた。伊太彦は口の間に依然として胡床をかいて居る。

日は暮れたと見えて又もや燐光キラキラと閃き初めた。

伊太「何と夜になると綺麗なものだな。まるで不夜城のやうだ。燈火を點す必要

も無く油も入らず、實に經濟に出來て居るわい」

と相變らず阿呆口を叩いて居る。そこへドスン ドスンと雪崩の如く落

ち込むだのは思ひがけなき、玉國別、眞純彦、アンチー、テクの四人であつた。

伊太彦は又バラモンの連中が落ちて來たと思ひ乍ら、宿屋の番頭氣分になり、

伊太「お出やすお出やす。これはこれはお客様毎度御鼻屑に有難うムいます。開

業間もなき岩窟ホテル、伊太屋の番頭です。一名坂の下小竹屋とも申します。サ

ア一つ十分勉強を致しておきますから、お泊り下さいませ。その代り木賃ホテル

ですから食物はさし上げませぬ。エへへへ、」

玉國「何だか妙な聲がするぢやないか、なア眞純彦」

眞純「玉國別様、偉い所へ落ち込むだものですワ。どこか出口がありさうなもの

ですなア」

伊太彦は此言葉を聞いて玉國別の一行と知り嬉しげに、言葉も元氣よく、

伊太「あ、先生で△いましたか。私は伊太彦ですよ。たうとう陥穽へ落ち込むで
出る所がないので因果腰を定めて居りましたが、貴方どうしてまア、こんな所へ
お出になつたのです」

玉國「あゝお前は伊太彦であつたか、妙な所で遇ふたものだなア。さうして三千
彦や、デビス姫は此處に居るのかなア」

伊太「へエへエ、奥に居られます。どうか早く御對面下さい。序にチルテル、ヘー
ルを初めバラモン軍の兵士がザツとニダース許り詰め込むであります。お蔭で此
岩窟ホテルも賑やかになりました」

眞純「オイ伊太彦、氣樂な事を云つて居る時ぢやない。何とかして此處を逃れ出
る工夫をせなくてはならないぢやないか」

伊太「お前は眞純彦だな、ようまア「おつき」合に落ち込むで呉れたな。併しも
うかうなれば萬事窮す矣だ。焦つた所で仕方がない。萬事天に任せて、騒がず、
焦らず、從容として死期の至るを待つのだな」

テク「あゝもう、斯うなりや仕方がない、因果腰を定めるのだな。助かるものな

ら皆一度に救かり、死ぬものなら皆一同に死ぬのだ。最早肉體は完全に保つ事は出来まい。此處へ落ちれば食料はなし、誰人も投げ込むでは呉れまいし、あゝ困った事になつたものだなア

玉國別は三人を従へ、伊太彦と共に奥へ進むで行く。大勢が種々と半泣き聲を出して咳いて居る。玉國別は聲高らかに歌ひ初めた。

玉國別 人は神の子神の宮

天地に神の在す限り

救はせたまはぬ事もある

三千彦司を初めとし

チルテル、へール其外の

天の益人村肝の

心を安く平けく

持たせたまへよ惟神

神の恵は草や木の

片葉の露に至る迄

宿らせたまふものなるぞ

如何に地底の岩窟に

落ち込み日蔭を見ぬとて

三五教を守ります

尊き清き皇神は

必ず救ひたまふべし

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くとも

假令大地は沈むとも
誠の力は世を救ふ

此岩窟に集まりし
吾等一同心をば

一つになして皇神の
其大恩を讃め稱へ

心の底から改良して
誠の道に叶ひなば

必ず救ひたまふべし
心を勞する事勿れ

勇めよ勇めよ皆の人
勇めば勇む事が來る

悔やめば悔やむ事が來る
假令千尋の海底に

身は沈むとも何かあらむ
神の守りのある中は

死なむと思へど死に切れず
これに反して大神が

吾等を見放したまひなば
地上に安く住むとても

命を召させたまふべし
唯何事も惟神

神に任して赤心を
皇大神の御前に

現はしまつるに如くはなし
祝へよ祝へよ神の徳

あがめよ あがめよ 神のいづ 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 唯何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ 身の過は宣り直せ

三教の吾々は 如何なる難に遇ふとて

些しも恐れぬ大和魂 生言靈を打ち出して

これの岩窟を委曲に 開きて救ひ助くべし

心安かれ諸人よ 皇大神の御前に

玉國別が赤心を 現はし祈り奉る

あゝ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

眞純彦 〆いや深き神の仕組に操られ

千尋の底に天下りけり。

黄昏て地上の世界は暗けれど

此この岩窟いはやどの光ひかる怪あやしさ
』

伊太彦いたひこ 光明くわうみやうの世界せかいに神かみは導みちびきて
心こころの岩戸いはと開ひらきたまひぬ
』

玉國別たまくにわけ 摩訶まか不思議ふしぎ暗くらき筈はずなる岩窟いはやどに
キラキラ光ひかるものは何なんぞや
』

伊太彦いたひこ 此岩窟このいはやみな燐礦りんくわうで固かためあり
神かみのまにまに光ひかるのみなり
』

テク□テクテクと闇やみの道みちをば歩あゆみつつ

土つちの底そこにと落おち込こみにけり。

初はつ稚わか姫かひめ神かみの命みことを娶めとらむと

争あひそひし身みの恥はづかしきかな□

アンチー□案内あんないを引き受うけ乍ながら地ちの底そこの

岩窟いはやに落おちし吾われぞ悔くやしき。

師しの君きみを知らしず知らしずに根ねの國くにへ

導みちびきし吾われの罪つみの重おもさよ。

如何いかにして此過このあやまちを詫わびむかと

思おもふも詮せんなき胸むねの闇やみかな□

玉國別たまくにわけ □ アンチーよテクの司つかさよ村肝むらきもの

心惱こころなやめな神かみの御業みわざぞ。

打ち揃うそろひ神かみの御名おんなを宣のり上げあて

吾人われひと共に世よに暉かがやかむ □

三千彦みちひこ □ 岩窟いはやどに皇大神すめおほかみも暫しばらくは

隠かくれましたるためしありけり。

尻込しりくめの繩なはをおろして吾々われわれを

救すくひ助たすくる人ひとの來こよかし。

三五あななひの皇大神すめおほかみは吾々われわれが

今いまの難なやみを知しろし召めすらむ □

チルテル 吾守る屋敷の中の陷奔へ

自ら落ちし事のうたてさ。

兵士が一人も残らず陷奔へ

轉げ込みしも不思議なるかな。

淺からぬ神の仕組のある事と

首を傾げて訝かり居るも

へール 初稚姫司の戀を争ひし

人の仕組の如何であるべき。

唯卑し心の雲に目を被はれ

奈落に落ちし身の終りかも

テク 『何事の在しますかは知らねども

苦しき痛さに涙こぼるる。

此穴に落ちたる人の間には

妻もあるべし御子もあるべし。

妻や子は云ふも更なり垂乳根の

御親はさこそ嘆きますらむ』

上から、
斯く互ひに述懐を述べ、胸の苦しみを紛らして居る。忽ち何處ともなく、頭の

『ウーウ、ウーウ、ワウワウワウ』

と猛犬の聲が聞えて来た。三千彦は雀躍りし乍ら、

三千彦 『有難や初稚姫の伴ひし

スマートの聲聞え来にけり。

スマートが此處に現はれたる上は

初稚姫は近く來まさむ

デビス姫「初稚姫君の命の神人が

現ます上は何か怖れむ。

人々の早救はるる時は來ぬ

彼の吠聲は神の御聲

かく歌ひ居る時しも、スマートを先に立てて初稚姫は關所の庭の錠を外し石段を下つて燈火を左手に捧ながら莞爾として現はれ來る。玉國別外一同は欣喜雀躍の餘り初稚姫の傍近くよつて聲を放つて泣き伏しぬ。一同期せずして兩手を合せ、初稚姫の後に従つて漸く岩窟を無事に抜け出す事を得た。此初稚姫は決して白狐の化身では無かつた。神の命を受け玉國別一行が危難を救ふべく向はせたまふた

のである。一同は初稚姫、スマートの後に従ひ、入口迄還つて見れば、イク、サー
ルの兩人が嚴然として警固して居た。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

(昭和九・一一・三〇 王仁校正)

第一七章 倉明(一五一七)

第一倉庫の中にはカンナ、チルナの兩人が互に悲歎の涙に暮れ乍ら世を果敢な
みて述懐を歌つて居る。

チルナ姫 恋ひ慕ふ吾背の君は曲神に

カンナ …… 襲はれ玉ひし事の悲しさ。

チルナ姫 暗がりの倉に情なく投げ込まれ

カンナ ……
□ 乾く由なき吾涙かな。

チルナ姫 ……
□ 初稚の姫と稱ふる曲神は

カンナ ……
□ 此世を亂す人鬼ならめ。

チルナ姫 ……
□ 何時の日かこれの鐵門や開かれむ

カンナ ……
□ 頼り無き身を悶え苦しむ。

チルナ姫 ……
□ 飢ゑ喝く此苦しみを如何にせむ

カンナ ……
□ 唾さへ出ぬ二人の身の上。

チルナ姫 ……
□ 悲しさは涙となりて溢れけり

カンナ ……
□ 世の荒波に揉まれし身には。

チルナ姫 ……
□ 大空に月日は清く輝けど

カンナ ……
□ 心の空を黒雲包めり。

チルナ姫 ……
□ 如何にしてこれの鐵門を開かむと

カンナ ……
□ あせれど最早力盡きぬる。

チルナ姫 ……
□ 此上は只大神に願ぎ奉り

カンナ …… 救はるる時を待つばかりなり。
 チルナ姫 恋雲に深く包まれ身の光
 カンナ …… 隠して一人吾は苦しむ。
 チルナ姫 背の君は女に心とられましぬ
 カンナ …… 吾も變らず迷ひ苦しむ。
 カンナ デビス姫 娶らむものと村肝の
 チルナ姫 …… 心碎きし人の憐れさ。
 カンナ 太腿に噛りつかれた苦しさを
 チルナ姫 …… 思ひやるだに涙ぐまるる。
 カンナ チルナ姫 暗に紛れて吾腿に
 チルナ姫 …… 獅噛みついたる事の悔しさ。
 カンナ 惟神の御前に罪を悔い
 チルナ姫 …… 詫びつ恨みつ泣き渡るかな。
 カンナ バラモンの皇大神は吾身をば

チルナ姫……
救ひまさずやいとど悲しき。

チルナ姫 月に村雲花には嵐 吹き荒むなる世の中に

花を翳して永久に 此世を安く渡らむと

祈りし事も水の泡 初稚姫と云ふナイス

現はれ來りて吾夫の 清き心を濁らせつ

心にもなき枉業を 盡させ玉ふ恨めしさ

吾背の君はバラモンの キヨの關所を預りて

ハルナの都へ攻め寄する 三五教の宣傳使

一人も残さず引捕らへ 地底に深く穿ちたる

その岩窟に投げ込みて 此世の災拂はむと

誠心を捧げつつ 朝な夕なに大神に

感謝祈願の太祝詞 宣らせ玉ひし折もあれ

木花散らす夜嵐に 吹き捲られて妹と背の

道みちを誤あやまり玉たまひつつ

妾わらはの身みをば館やかたより

追放つゐはうせむとなし玉たまふ

その曲業まがわざぞ悲かなしけれ

吾背わがせの君きみの迷まよひをば

覺さまし呉くれむと心こころにも

なき偽いつはりを構かまへつつ

半狂亂はんきやうらんを装よそほひて

戸障子としゃうじ手道具てだうぐ悉ことく

打折うちをり碎くだき警告けいこくを

與あたへし事ことの仇あだとなり

忽たちまち手足てあしを縛しばられて

無慙むざんや暗くらき倉くらの中なか

投なげ入いれられし悲かなしさよ

これも全まくりユウチナント
カannaの司つかさの待遇もてなしが

面白おもしろなかりし其その爲ためと

一いちど度は怨うらみ居あたりしが

カannaの司つかさも今いまここに

吾等われらと共に苦くるしめる

姿すがたを見るみより同情どうじやうの

涙なみだに濡ぬれて吾怨わがうらみ

春野はるのの雪ゆきと消きえにけり

あゝ惟かむながら神かむながら々々

神かみの恵めぐみの幸さちはひて

一ひとひ日も早はやく片時かたときも

吾等われら二人ふたりの身魂みたまをば

廣ひろきに救すくひ玉たまへかし

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

梵ぼん天帝釋てんたいしやく自在じざいてん天

大國彦おほくにひこの大御神おほみかみ

大國彦おほくにひこの神柱かむばしら

御前みまへに慎つつしみ鹿兒かごじ自物もの

膝折ひざをりふ伏ふせて願ねぎ奉まつる。

天地あめつちに神かみは在まさずや居ゐまさずや

この願ねぎ事ことも聞きこし召めさずや。

村肝むらぎもの心こころの暗やみの戸と打うち開あけて

救すくはせ玉たまへ大御神等おほみかみたち」

カンナカバラモン教けうの神柱かむばしら ハルナの都みやこに在あれませる

大黒主おほくろぬしの命令みこともて リユウチナントにんに任にんぜられ

チルテル司つかさに従したがひて 己おのが務つとめを忠實ちうじつに

仕へまつりし此カンナ 如何なる悪魔の魅りしか
 思ひも寄らぬ災難に 不遇を啣つ今日の身は
 あるにあられぬ悩みなり チルテルキヤプテンに頼まれて
 チルナの姫の御前に 心にあらぬ偽りを
 圖う圖うしくも竝べ立て 清き心を曇らせて
 姫の災招きたる その罪惡を省みて
 いと恐ろしくなりにけり 暗の中とは云ひ乍ら
 吾太腿を峻烈に 噛み切り玉ひし其痛さ
 無念の齒噛みなし乍ら 怨みを晴らし呉れむずと
 拳を固めて二つ三つ 尊き面を殴りしは
 悔むで返らぬ過失ぞ 事の起りは此カンナ
 物の黑白も分らずに 欲に迷ひし其爲ぞ
 許させ玉へチルナ姫 人は神の子神の宮
 もとより鬼の子でもない 大蛇の腹に生れたる

蛇じやでもなければ曲まがでない 何いづれも神かみの分わけ霊たま

水晶魂すいしやうだまの持もち主ぬしよ さはさり乍ながら大空おほぞらの

月日つきひも暫しばし黒雲くろくもに 包つつまれ姿すがたを隠かくす如ごと

吾魂わがたましひも何時いつしかに 惡魔あくまの虜とりことなり果はてて

思おもはぬ不覺ふかくをとりました かうなり行くも己おのが身みの

犯をかせし罪つみの報むくひぞや チルテルさまや姫ひめ様さまを

最早もはや少すこしも怨うらまない 梵ぼん天てん帝たい釋しやく自在じざいてん

二人ふたりの惱なやみを逸いち早はやく 救すくはせ玉たまへ惟かむ神ながら

黑白あやめも分わかぬ暗やみの中なか 雙もろ手てを合あせ眞ま心ごころを

捧ささげて祈いのり奉たてまつる 〆

斯かく歌うたふ折をりしも俄にはかに四邊あたり騷さわがしく、數すう十じふ人にんの足音あしおとが聞きえて來きた。二人ふたりは耳みみをす

まして何者なにものの襲しふらい來きなるかと暫しばし様やう子を窺うかがつて居あた。忽たちまち、ガチャリと戸とを開ひらく音おと、

見みれば初はつ稚わか姫ひめ初はじめチルテル其外そのほか澤山たくさんな宣傳せんでん使しや兵士へいしが立たつて居ある。チルナ姫ひめは矢やに

庭はに倉くらを飛とび出だし、初稚姫はつわかひめ目蒐めけて夜叉やしやの如ごとく飛とびつといた。初稚姫はつわかひめはヒラリと體たいを躲かはし、

初稚姫はつわかひめ「三五あななひの誠まことの道みちを傳つたへ行ゆく

吾われは初稚姫はつわかひめの神かみぞや。

チルナ姫ひめわらは妾すがたの姿みあやまを見誤みり

怨うらみ玉たまふか心こころもとなや

チルナ姫ひめ「よく見みれば何處どことはなしに御姿おんすがた

變かはらせ玉たまひぬ許ゆるさせ玉たまへ

チルテル「いと戀こやの妻つまの命みことよ心こころせよ

吾も初稚姫に救はれしぞや

チルナ姫 背の君に刃向ひまつりし吾罪を
赦し玉はれ神の心に

チルテル 吾胸に巢へる曲に誘はれ
思はぬ罪を犯しけるかな。
今日よりは心の駒を立て直し
チルナの姫を厚く愛なむ

チルナ姫 有難し其の宣り言を聞く上は

假令死すとも怨まざらまし
『』

カンナ 〇チルテルの司よ清く許しませ
罪に溺れし吾魂を
『』

玉國別 〇皇神の恵みの露に霑ひて
吾人ともに勇みけるかな
『』

三千彦 〇日影なき地底の洞に落されて
心碎きし事の果敢なさ。
『』

初稚姫神の命があれまして

吾等が命を救ひ玉ひぬ。

何時の世か此御恵を忘るべき

彌勒の御世の末の末まで

ワックス□テルモンの神の館に色々の

枉企みたる吾はワックス。

今こそは誠心に歸りけり

許させ玉へ三千彦の君□

三千彦□村肝の心の花の咲きぬれば

世に憎むべき人はあらまし□

ヘルマン□如何いかにして己おのが犯をかせし罪科つみとがを

詫わびむと思おもふ心苦こころくるしさ。

デビス姫ひめの清きよき身魂みたまを曇くもらせし

吾われは此世このよの魔神まがみなりしか□

エクス□五百いほむち笞いましの戒うめ受はるけて遙々はるはると

來きたりて此處ここに夢ゆめは覺さめけり□

エル□三千彦みちひこの厚あつき情なさけの御計おはからひ

仇あだに返かへせし吾身わがみの嘆うたてさ。

三千彦みちひこの情なさけの盥たらひなかりせば

吾身わがみ體からだの如何いかで保たもたむ。

海山うみやまの恵みめぐを受けし身みながらに
仇あだと狙ねらひし事ことの苦くるしさ〆

イク〆初稚はつわかひめ姫神かみの命みことの後あとになり
前さきになりつつ進すすみ來きにけり〆

サール〆キヨ港みなとせきもり關守館やかたに尋たづね來きて
思おもはぬ人ひとに巡めぐり合あひしよ〆

テク〆いざさらばバーチル主ぬしの館やかたへと
急いそいで行ゆかむ皆みなの人ひと等たち〆

チルテル□今いま暫しばし館やかたの中なかを片かたづけて
後のちに行ゆくべし先さきに出いでませ□

初はつ稚わか姫ひめ□いざさらば吾われはこれより皇すめ神かみの
宣のりのまにまに別わかれ行ゆかなむ□

玉たま國くに別わけ□今いま暫しばし待またせ玉たまへよ初はつ稚わか姫ひめ
君きみの惠めぐみに報むくゆ術すべなき□

初はつ稚わか姫ひめ□玉たま國くに別わけ神かみの命みことの眞まご心ころを
力ちからとなして進すすみ行ゆくべし□

斯く歌ひ乍ら一同に目禮し、スマートを従へ足許早く館の門を出づるや、忽ち姿は霞と消えさせ玉ふた。初稚姫はスマートの背に跨り木の間を潜つてハルナの都へと急がれたのである。イク、サールの兩人は折角追つついた姫様に見捨てられては大變と、兩人は取る物も取り敢ず、トントントンと地響き打たせ水晶の寶玉を片手に固く握り乍ら追つて行く。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)
(昭和九・一二・一 王仁校正)

第四篇 六根狸々

第一八章 手苦番(一五一八)

玉國別の一行は 九死一生の危難をば

思ひもよらぬ神柱 初稚姫に救はれて

醜の岩窟を抜け出し 初稚姫に相別れ

アヅモス山の南麓に 蕨も高く立竝ぶ

スマの里庄のバーチルが 館を指して歸り行く

バラモン教のスパイをば 勤めゐたりし大酒豪

テクは一行の先に立ち 足に力を入れ乍ら

羽ばたきテクテク歌ひ行く。

テルモン山の山嵐 キヨの湖水の面をば

ゆたかになでて通り行く 其鼻先はアヅモスの

山の麓のバーチルが 館に當りガヤガヤと

物騒がしき今日の空 老若男女は勇み立ち

呑めよ唄への大騒ぎ テクは忽ちバーチルの

家の奴となりすまし 祝ひを兼て里人に

酒をすすむる折もあれ

バラモン教の關守と

古く仕へしチルテルが

三五教の神司

一人も残らず捉へむと

駒に鞭打ちシトシトと

表門へと進み來る

コリヤ叶はぬと此テクが

孫呉が祕書をまき擴げ

長柄の杓に甘酒を

汲むより早く鼻の先

ブンと鼻がせば麻醉劑

吸收したる其如く

始めの權幕どこへやら

ヒラリと駒を飛おりて

老若男女の中に入り

口汚くもガブガブと

鯨飲馬食の爲體

何程威張つたキャプテンも

酒にかけたらもろいもの

ソロソロ酔がまはり出し

館の離室に隠したる

初稚姫のナイスをば

誘ひ來れ成功すりや

リユーチナントにしてやると

酒の上にてチヨロまかす

元より嘘とは知り乍ら

之も一興と勇み立ち

初稚姫はつわかひめのまへ前にい出で
軍人氣取りぐんじんきどで「あります」を

連發れんぱつしたる可を笑かしさよ
初稚姫はつわかひめと思おもひしは

誠まことの人ひとにあらずして
しまひの果はてにや尻尾しつぽ出し

小牛こごしのやうな白狐びやつこと變なり
這はい出いだしたる怖おそろしさ

怪事くわいじ百出ひゃくしゅつとめどなく
遂つひには一同いちどう穴倉あなぐらに

突倒つきたふされて吐息といきつく
折をりしも眞まことの姫様ひめさまが

猛犬まうけんスマート引連ひきつれて
吾師わがしの君きみを始はじめとし

チルテル其外そのほか一同いちどうを
救すくはせ玉たまひし有あり難がたさ

あゝ惟かむながら神々かむながら
神かみの惠めぐみは忽たちまちに

旭あさひの如ごとく輝かがやきて
まだ明あけやらぬ夜よの道みちも

何なんとはなしに氣分きぶんよく
バーチル館やかたへ指さして行ゆく

こんな騒さわぎのありしとは
夢ゆめにも知しらぬスマの里さと

集あつまり來きたる老若らうじやくは
七日なぬかななよ七夜さかもりの酒宴さかもりに

胴腰どうし据すゑてガブガブと
泣ないたり笑わらうたり怒おこつたり

牛飲馬食の大酒宴

喉を鳴らしてゐるだらう

サア是からは是からは

此テクさまも久しぶりに

思ふ存分般若湯

グイグイグイとひっかけて

一つ「げん」をば直ませう

あゝ惟神々々

玉國別の宣傳使

其外百の司たち

向方に見える森蔭は

夜目には確り分らねど

正しくバーチル神館

モウ一息だ膝栗毛に

鞭打ち進み歸りませう

旭は照る共曇るとも

月は盈つ共虧くる共

お酒の味はいつ迄も

萬劫未代變らない

酒程笑顔のよいものが

三千世界にあるものか

笑ふも泣くも面白い

怒り狂ふも一興だ

酒の上にてした事は

決して世人は咎めない

「よい」要口が出来たもの

あゝ爛酒ぢや爛酒ぢや

冷酒鯛汁は甘くない

などと下らぬ歌歌ひ
勇み進むで表門を
潜れば數多の老若が
夜晝かまはず赤裸
黒い體を曝つつ
鯖の鮓をばつけたよに
肚一杯に膨らして
ゴロリゴロリと高躰
寢言の聲や屁の響
人形箱をぶちあけた
大亂雜の光景を
眺めてテクは吹き出し
アハ、ハツハ
アハ、ハツハ
面白うなつてお出たと
大玄關を一跨げ
ドスンドスンと奥の間へ
勢込んで進み入る。

アキス、カールの兩人は一行が奥の間へ進まむとする途中、疊廊下でベツタリ
出會した。テクは見るより、
テク「サア、番頭さまのお歸りだ。早く酒を一斗許り持つて来い。何をグツグツ
してゐるのだ。新番頭さまの天晴功名手柄話、汝も奥へ来てトツクリ聞くがよか

らうぞ」

アキス「ヘン、馬鹿にすな。番頭だなぞと、勝手に定めやがつて、番犬のバンタ奴、汝等が當家の番頭にならうものなら、それこそ大變な番狂はせだ」

テク「馬鹿云ふな、俺は主人公からチャンと委任をうけてるのだ。バーチル家の家政一切は皆此テクさまの御支配だぞ」

玉國「コラコラ、こんな所で喧譁をしても約らぬぢやないか」

テク「ハイ、心得ました。アキスの奴、バンタだの番犬だのと、餘り失敬なこと
をいふものですから、チツと癩に障つたのですよ。サア、兔も角、今度の功名手柄を主人公に報告致しませう」
と故意とに大手を振り、大股にドスン　ドスンと四股をふみ乍ら主人の居間に進み入る。

バーチル、サーベル姫は一生懸命に神前に向つて玉國別一行の無事安全を祈願してゐる最中であつた。玉國別一行も拍手を拍ち神前に無事凱旋せしことを感謝し了つて席に着いた。夫婦は拜禮を了り、玉國別一行の無事な顔を見て打喜び、

涙をハラハラと流し乍ら、

バーチル「あ、先生能うまア歸つて下さいました。御案じ申て居りました」

サーベル「あ、デビス姫様、三千彦様、伊太彦様、何うしてゐられました。旦那

様と大變な心配を致しまして、神様の前にしがみついて泣いてお願をして居りま

した。マアお目出たうムいます」

玉國「ハイ有難う。いろいろと神様の御試しに會つて参りました。やアもう、エ

ライ御心配をかけ申譯がムいませぬ。マア此通り一人の怪我もなく無事に歸りま

したからお喜び下さい」

夫婦は一度に頭を下げ、喜びの餘り嬉涙にかきくれてゐる。

テク「(のり)モウシ 旦那様 一應お聞きなされませ

三千彦司を救はむと 玉國別の神司

眞純の彦に従ひて 先の番頭のアンチーを

案内させてスタスタと 裏道指して出でて行く

空には日輪カンカンと

輝き玉ひ頭上から

火熱を浴びせる苦しさに

森の木蔭に立寄つて

玉國別や眞純彦

アンチー三人を休ませつ

此テク奴は只一人

チルテル館の裏門へ

進むで見ればピツタリと

戸締り厳しくありければ

肝玉放り出し表門

廻つて見れば人もなし

事務室いかにと眺むれば

猫の子一匹居らばこそ

天井に鼠がチウチウと

戀を争ひ狂ふ聲

此奴ア不思議と裏口に

立出でみれば離屋の座敷

初稚姫と云ふナイス

白い面してニコニコと

二人の裸を前におき

何か命令下し居る

コリヤ面白い面白い

仔細あらむとかげよれば

豈計らむやチルテルと

ヘールの二人が角力取り

勝つたお方の女房に

ならうとお化が甘い事

いふた嘘うそをば眞まに受うけて 此このテク奴やつこも釣つり込こまれ

ドスンドスンと四し股こふみならし 汗あせをタラタラ絞しぼりつつ

俄にはかに變かはる力士すまふとり 難なんなく二人ふたりを投なげ付つけて

地底ちていの洞ほらへと投なげ込こむだ 初はつ稚わか姫ひめはテク奴やつこの

お手てを握にぎらしくれぬかと 優やさしい顔かほしてつめかける

コリヤ面白おもしろい面白おもしろい 男をとこと生うまれた上うへからは

一ひとつ握あく手しゆしキツスをば やつてみようと手てを伸のばし

グツとつかめばこはいかに 細ほそい腕かひなは毛けだらけだ

忽たちまち白びやつこ狐ことなり變かはり 眼まなこを怒いからし睨にらみたる

其その權けん幕まくの恐おそろしさ あとをも見みずに

エツサツサ エツサツサ スタコラヨイヤサと驅かけ出いだし

玉國たまくに別のわけ待まち玉たまふ 森もりの中なかをば暗くらがりで

當途あてどもなしに走はしり入いる 暗くらさは暗くらし眞純ますみひこ彦ひこ

胸むねに頭かしらをうちつけて アツと倒たふれた苦くるしさよ

まだまだ先は長けれど

お酒を一杯貰はねば

どうやら息が切れさうだ

コレコレもうしアンチーさま

早くお酒をついでくれ

之より先はいはれない

玉國別や皆さまの

一生の恥になりまする

言はぬが佛神心

あゝ惟神々々

之にて中止仕る

アハゝゝアツハ、アハゝゝゝ

一同「ウツフゝゝ」

バーチル「オイ、テク、芝居がかりで、種々と報告してくれたが、どうも真相が

分りにくい。併し乍ら皆さまが無事に歸つて下さったのだから、こんな嬉しい事

はない。サア彼方へ行つて、充分酒でもあがつて下さい。そして、アキス、カー

ル等を、決して擲擄つてはなりませんぞ」

テク「ハイ、畏まりました。然らば御主人夫婦様、玉國別一統様、一寸暫時御免

を蒙ります。左様ならば」

といふより早く酒の場さして驅けて行く。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第十九章 猩猩舟(一五一九)

玉國別一行は晚餐を與へられ、再び神に拜禮し、寢に就かむとする時しも、サー

ベル姫は言葉靜かに玉國別の耳に口を寄せ、

サーベル「モシ先生様、猩猩島に残しおかれた三人の男を助ける爲、船を出して

頂けませぬでせうか、どうか神様に御願ひ下さいまして、御差支なくば彼等三人

を助けてやりたう思います。そしてモ一つの御願ひは、天王の森に一日も早く二

棟の宮様を建築し、一方は三五の大神様、一方はバラモンの大神様を鎮祭して頂

く事は出来ませぬか」

玉國「成程、夫れは可いお考へでムいます。併しあの猩猩ヶ島の澤山の眷族は、

元はアツモス山のお宮に仕へてゐたもののやうに直覺致しましたが、差支なくば、澤山の船を用意し、一匹も残らず天王の森へ伴れて歸つてやりたいと思ひますが、如何でムいませうかな」

サーベル姫は俄に此言葉を聞くより、嬉し相に飛び上り、「キヤツ キヤツ」と怪しき聲を立て乍ら兩手を合せ、

サーベル「妾は猩猩姫でムいます。澤山の子や孫が残してムいますから、それ許りが氣になつて、夜もロクに寝られませぬ。能うまア言うて下さいました。何卒神様のお許しがあれば、一匹も残らず此方へ迎へさして頂きたうムいます」

玉國「ヤアそれは尚々結構です。左様ならば明日早く船の用意を致しまして、村人に命じ迎ひ取りにやりませう」

サーベル「どうか貴師の御弟子を一人か二人、行つて頂く事は出来ませぬか」

伊太彦は側に居つて、小耳に挟み、

伊太「先生、其御用は伊太彦が承はります。三千彦さま夫婦はどうかお館に暫く逗留して、お宮の普請の設計圖でも書いて貰ひませう。そして先生は暫く村人に

布教ふけうをして頂いただきまして、眞純彦ますみひこさまが其間そのあひだを補おぎなふといふ都合つがふに願ねがひますれば誠まことに結構けつこうですがなア」

玉國たまくに「イヤ、お前まへのやうな慌者あわてものは絶對ぜつたいに許ゆるす事は出來できませぬ。三千彦夫婦みちひこふうふに願ねがひませう」

伊太いた「オイ、三千彦夫婦みちひこふうふ、あんな、能よく荒あれる海うみの上うへ、女房にようぼうのある者ものが行ゆくものぢやないよ。私わしのやうな獨身者どくしんものなら假令たとへし死しんでも女房にようぼうの悔くやむ心配しんぱいもいらす、大變たいへん都合つがふが好よい。そこは俺おれにお株かぶを譲ゆづつて貰もらいたいものだなア」

三千みち「先生せんせいのお許ゆるしさへあれば、どうでもしてやる」

伊太いた「先生せんせい、是非ぜひわたし私わたしに御下命ごかめいを願ねがひます」

玉國たまくに「ウン、ヨシ、それならお前まへに一任いちにんせう。相當さうたうの人物じんぶつをお前まへから選えらむで伴つれて行いつたがよからう」

伊太いた「イヤ、有難ありがたい、拵べんぶじやくやく舞雀躍やくやくだ、エへ、へ、へ。サア、是これから北極探險隊ほくきよくたんけんたいだ。オ

イ、アンチーさま、お前まへは副艦長ふくかんちやうだ。アキス、カールの兩人りやうにんは分隊長ぶんたいちやうだ。テクの番頭ばんとうさまは家事萬端かじばんたんを管掌くわんしやうせなくてはならないから、出陣しゅつちんは許ゆるされない。サア、

アキス、カール、兩人さま、屈強な人間を選抜して貰ひませう。猩猩先生を迎へに行くのだから、猩猩潔白の靈をよりぬいて伴れて行くやうにして貰ひませう。それから潰れかけたボロ船があれば一艘つもりをして貰ひたい。此奴ア、ヤッコス、ハール、サボールの人一化九を乗せる船だ。アハ、ハ、ハ、

アキス「そんなボロ船は一隻もムいませぬよ」

伊太「ア、仕方がない。人間の姿をしてゐるのだから、中でも堅牢な船を選ぶで持つて行く様にしてくれ、一體猩猩々の數は何人さま程ゐられるのだらうな」

サール「ハイ、三百三十三匹だと思つて居ります」

伊太「成程、猩猩潔白の身魂が三百三十三人、バラモン、ヤッコスのなまくら者のサボール屋の人の頭をよくハールといふ人一化九が三匹、アキス、カールさま、抜目なく、至急用意して貰ひませう。サアいよいよ伊太彦も三百三十三人竝に三匹の總司令官となつたのだ、アハ、ハ、ハ、。イヤ先生、どうも有難うムいます。之が私の登龍門、出世の門口、移民會社の社長となつて、大活動を致します。何卒巧く凱旋致しましたら花火を打上げ、里人一同を濱邊に整列させ、伊太彦萬歳を

唱へて下さいませ。之が何より吾々の樂みで△いますから』

サーベル姫 『伊太彦の教の君よ一時も
早く出ませ吾子迎ひに』

伊太彦 『これは又不思議な事を聞くものだ
猩々の群を吾子なりとは』

サーベル姫 『からたまはよし猩々に生るとも
靈は人に變らざりけり。』

今の世の人は獸の容器よ
獸の中に人の魂あり』

玉國別たまくにわけ 面白しおもしろサーベル姫ひめの御言葉おんことば

聞くきにつけてもうら恥はづかしきかな
□

眞純彦ますみひこ 人は皆みな獣けものの棲すみかとなりはてて

誠まことの人は影かげだにもなし。

吾われとても罪つみに汚けがれし獣けだものの

魂たまの棲家すみかぞ恥はづかしき哉かな
□

三千彦みちひこ 恐おそろしき八十やその曲津まがつの猛たける世よは

人ひとの身みとして立たつ術すべもなき。

それ故ゆゑに人ひとの心こころは鬼おにとなり

大蛇おろちとなりて世よを渡わたるなり
□

伊太彦いたひこ「これはしたり三千彦みちひこ司つかさの世迷言よまいごと
神かみの宮居みやゐを獸けだものと宣のらすか」

デビス姫ひめ「背せの君きみの宣のらせ玉たまひし言靈ことたまは

人ひとの皮着かはきる獸けだものの事ことよ。

伊太彦いたひこの珍うづの司つかさは神様かみさまよ

人ひとの中なかなる人ひとの神かみなり」

伊太彦いたひこ「いざさらばアキス、カールよアンチーよ

用意ようい召めされよ猩々しやうじやうの船ふね」

これより伊太彦いたひこは夜よるも碌ろくに眠ねむらず、アキス、カール、アンチーを指揮しきし、船ふねに

熟練たる荒男を選抜し、船をキヨの港や其外附近の磯邊より集め來り、漸く二十艘の小舟をしつらへ、各酒樽を満載し、猩々の眷族を迎ふべく夜明くる頃迄にすべての準備を整へた。

(大正一二・四・二 舊二・一七 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第二〇章 海龍王(一五二〇)

猩々の島へ渡るべく 使命を受けし伊太彦は

アキスやカールやアンチーを 左右の柱と定めつつ

二十の舟に酒樽を 半つめこみ四十人

船頭を選び朝まだき 大海原を勇ましく

波に鼓をうたせつつ 旗鼓堂々と迂りゆく

をりからふきく
折柄吹來る南風に
眞帆を掲げて驀地
いっしやせんりの勢は
見るも目覺しき次第なり。

アンチーは船頭頭として、
旗艦の先に立ち、

アンチー「ここは名に負ふキヨメの湖よ

波に浮かべる狸々ヶ島へ

やらるる此身は厭はねど

跡に残りしバーチルさまの

どうして女房子が永い月日を暮すやら。

なぜなれば

人の體で人でなし

ぢやとて神ではない程に

さぞや皆さまが困るだる

案じすごして舟を待つ。

舟を待つ間の狸々の姫は

奥の一間でキヤツ キヤツ キヤツと

怪體な聲を張あげて

玉國別の一行に

鎮魂歸神で責められる

どうして其間が暮れるやら

アキス 内の主人は偉い人 三年三月も和田中の

狸々ヶ島に現はれて お猿の王をば妻となし

三百餘りの子を持つて 一つの島の王となり

誰憚らず悠々と 暮し玉ふた猛者ぞ

玉國別の神様が 迎ひの舟に乗せられて

アツモス山の聖場に 歸らせ玉ひし今日の日は

スマの神村勇み立ち 老若男女の分ちなく
 呑めよ騒げよと勇み立つ たつた一人のバーチルが
 歸つてムつた許りに イヅミの國のスマの里
 濕り勝なる草村も 俄にかわきはしやいで
 夜明の如くなつたぞや サア是からは是からは
 アヅモス山の古社 眷族さまの木像を
 刻み直して古の 健康體に造り替へ
 手が折れ足は蟲が喰ひ 首までぬけた負傷者を
 一つも残らずアヅモスの 衛黙病院に擔ぎこみ
 彫刻醫者をば招んで來て 完全無缺に修繕し
 新舊兩派が睦まじく 一つの宮に集まつて
 眞善美愛の實況を 現はし玉ふ世となつた
 其魁けと吾々は 肝心要の眷族を
 伊太彦さまに従ひて 迎へむ爲に二十艘の

舟を拵へ波の上 眞帆を上げつつ進むのだ

あゝ惟神々々 神の恵の深くして

狸々ヶ島のお客さま 一人も残さず此舟に

收容なして恙なく アツモス山の聖場に

歸らせ玉へと願ぎまつる 旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くる共 假令大地は沈む共

狸々ヶ島に預けたる バラモン教のヤツコスや

ハール、サボール三人は 助けてやらない積だが

伊太彦さまの御心は 私に計りかねてゐる

もしもあんな者舟に乗せ 連れて歸らうものなれば

天國浄土と治まつた イヅミの國のスマ里は

再修羅の八衢と なるかも知らぬ恐ろしや

鬼や大蛇や狼を 野原に放ちし如くだと

里人たちが案じてる 只何事も吾々の

考へ通りかんが どもにやゆきませぬ 皇大神すめおほかみの御心みこころを

奉戴ほうたいしたる伊太彦いたひこの 艦長かんちやうさまの思召おほしめし

只ただ吾々われわれは只管ひたすらに 従したがひまつる許ばかりなり

あゝ惟かむながらかむながら神々かむながらかむながら々々 バラモン教けうの三人さんにんを

何卒なにとぞスマの聖場せいぢやうへ 歸かへらぬ様やうに頼たのみますす

伊太彦いたひこの乗のつた舟ふねは一艘いっそう目立めだつて新あたしく大おほきい。さうしてアキス、カールの兩りやう

人にんが左守さもり右守うもり然ぜんと控ひかへてゐる。十九艘じふくそつの船ふねを指し揮きしてゐるのはアンチーであつた。

各船かくせんは雁列がんれつの陣ぢんを張はつて、旭あさひの照てり輝かがく浪なみの上うへを、各舷おのおのへばたを叩たたき、唄うたを唄うたひ、鉦しやうを

すり、豆太鼓まめだいこを打うち鳴ならし、海若かいじやくを驚おどろかしつつすべつつて行ゆく。神かみの守まもりか猩々しやうじやく島がしまに向むかつて船頭せんどうの

靈れいの守護しゆごか、二十哩にじふマイル以上いじやうの速力そくりよくにて矢やの如ごとく自然しぜんに船ふねは猩々しやうじやく島がしまに向むかつて船頭せんどうの

櫓ろ櫓かいも、帆ほの力ちからも何なんの者ものかはと言いはぬ許ばかりに、帆ほを逆さかさまに膨ふくらせ乍ながら走はしつて行ゆく。

風かぜは南みなみから吹ふいてゐる。どうしても帆ほは北きたの方ほうへ膨ふくれねばならぬ。それにも拘かはら

ず、帆ほは風かぜの方向ほうかうへ膨ふくれてゐるのを見みても、其速力そのそくりよくの早はやきを伺うかがひ知しる事ことが出来できる。

七八十里の湖路を早くも正午頃には、猩々ヶ島の岸に、一艘の落伍船もなく横着になつた。よくよく見れば、幾丈とも知れぬ大蛇が猩々島の中心に屹立せる岩山を取巻き、岩の上から大口をあけ、舌をペロペロ出し乍ら、猩々の群を一匹も残さず呑み喰はむとしてゐる最中である。これはキヨメの湖の底深く潜んでゐる海龍で、サアガラ龍王と稱へられ、三年に一度位此島に現はれて、所在生物を食ひ盡さむとする怖ろしき悪龍である。今迄猩々王が此島に嚴然として控へてゐた爲、流石のサアガラ龍王も上陸する事を恐れてゐたが、王が亡くなつたのを幸、其死骸を只一口に呑んで了ひ勢に乗じて上陸し、岩山を長大なる體にて巻きつけ、一匹も残らず食ひ絶さむとしてゐる眞最中なりける。

猩々はキヤツキヤツと泣叫び、磯端に集まり、ヤツコス、ハール、サボールの側に集まり來つて、かの悪龍を退治し、吾等の危難を救へと、形容を以て歎願した。ヤツコス外二人も猩々のみか、グツグツしてゐては、自分等も共に吞まれて了ふのだ。同じ食はれるのなら、與ふ限りの抵抗をやつてみようと思つて覺悟を定め、何一つ武器がないので、磯端の手頃の石を拾ひ、龍神の急所を狙つて石礫を投げ

つける。三百有餘の猩々は三人に倣つて、各石を拾ひ、雨霰と打ちつけてゐる。
遠の龍王も石礫に辟易し、岩山を力にグツと尻尾を以て巻きかかへ乍ら、鎌首を
立て、先づ人間より呑み喰はむと目を怒らし、隙を狙つてゐる、其光景の凄じさ。
伊太彦は見るより船の舳に立上りつつ、一生懸命に天の數歌を奏上した。龍王は
俄に身體の各部より煙を吐出し、一枚々々鱗の間から火焰立ちのぼり、熱さ苦し
さに堪へかねてや、矢庭に身を躍らして、岩山を轉げ落ち乍ら、バサリと音を立
てて海中に飛込むで了つた。四邊一里許りは忽ち海水は湯の如く熱くなり、澤山
の魚が白、青いろいろの腹を水面に現はし、ブカブカと浮き來たる。
伊太彦は又もや魚族を助けむと天津祝詞を奏上し、天の數歌を稱へた。漸くに
して水は熱冷え、魚は澆刺として動き出し、幾十萬とも知れず磯端に泳ぎ來り、
伊太彦に向つて感謝の意を表はすものの如く、何れも一齊に首を上下に振り乍ら
大小無數の魚族は一齊に水中に姿を隠しけり。
ヤッコス始め猩々の群は磯端に立つて列を造り、伊太彦の船に向つて掌を合せ、
感謝の意を表してゐる。伊太彦は一同に向つて酒樽の鏡をぬく事を命じた。忽ち

酒さけの匂におひは四邊あたりに漂ただようた。猩々しやうじやうの群むれは先さきを争あらそうて、吾身わがみの危き險けんを忘わすれ、二十にじふの船ふねに思おもひ思おもひに飛とび乗のつた。三人さんにんの男をとこも恐おそる恐おそる、伊太彦いたひこの船ふねに飛とび乗のり、兩手りやうてを合あはせ涙なみだを流ながして、感謝かんしゃの誠まことを表あらはしめる。

伊太いた「アンチーさま、モウこれで猩々しやうじやう潔白けつぱくさまはスツカリ乗船じやうせんなされただらうかなア。一人ひとりでも残のこつてゐるやうな事ことがあつては、歸かへつて申譯まをしわけがないから、能よく査しらべて下ください」

アンチー「ハイ大抵たいてい皆みなお乗のりになつたと思おもひますが、念ねんの爲ためモ一度いちど査しらべてみませうか」

ヤッコス「お査しらべには及およびませぬ。此島このしまの猩々しやうじやうは決けつして一人ひとり離はなれて遊あそんだりは致いたしませぬ。暫しばらくの間あひだに吾々われわれに能よくなづき、一いつしよ緒しよに暮くらして居をりましたが、本當ほんたうに友いう誼ぎの厚あつい動物どうぶつで親切しんせつな者ものです。又また一匹いっぴきでもゐないやうな事ことがあれば、キツと猩々しやうじやうがどんな場合ばあひでも探さがして伴つれて参まゐります。御安心ごあんしん下くださいませ」

伊太いた「島の王わうが言いふ言葉ことばにはヨモヤ間違まちがひはあるまい。サア是これから天津祝詞あまつのりとを奏そうじ上やうし、此島このしまに別わかれを告つげる事こととせう」

と言ひ乍ら、船首を全部島の方に向け直し、伊太彦が導師の下に天の數歌を歌ひ祝詞を奏上し了つて、再船首を轉じ、此度は帆を巻き下し、波のまにまに海上を漕ぎ歸る事となつた。

(大正一二・四・三 舊二・一八 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第二章 客々舟(一五二一)

猩猩王の肉體の 亡びし姿を見るよりも

海龍王は雀踊し 猩猩島に驅け上り

小猿の群を悉く 呑み喰はむと蜒々と

體も太く彌長く 島のかための岩石に

三周り四周り巻きつきて 大きな口を開け乍ら

ひとつも残さず丸呑みに なさむものぞと控へ居る

數多の狸々は驚いて 狼狽へ騒ぎキヤツキヤツと

悲鳴をあげてヤツコスや ハール、サボールの前に寄り

救ひを乞へば三人は 狸々よりか身の大事

假令悪龍に喰はるるも 能ふ限りの抵抗を

試み其身の萬一を 僥倖せむと磯端の

石を掴んでバラバラと 悪龍目蒐けて打ちつける

三百有餘の狸々は 猿の人眞似各自に

石を手にして投げつける 流石の悪龍も面喰ひ

少時躊躇ふ折もあれ 三五教の宣傳使

伊太彦司が現はれて 天津祝詞を奏上し

嚴の言靈一二三四 五六七八九十

百千萬の聲共に 打出す言靈石の玉

見る見る龍の體より 黒煙濛々立昇り

硬き鱗の閒より
紅蓮の舌を吐き出し

その極熱に堪へかねて
海龍王は岩山を

下りてバツサリ海中に
姿隠せし嬉しさよ

ヤッコス、ハール、サポールは
ハツと胸をば撫で下ろし

伊太彦司の率ゐたる
二十の船に打向ひ

両手を合せて感涙に
咽びかへるぞ憐れなれ

數多の狸々は掌を合せ
伊太彦司に打向ひ

キヤツキヤツキヤツと鬨の聲
嬉し涙に泣き叫ぶ

忽ち湖水は湧き返り
熱湯の如くなり變り

大小無数の鱗族は
皆水面にポカポカと

腹を覆して浮び居る
伊太彦之を憐れみて

忽ち天地の大神に
向つて祝詞を奏上し

一二三四五つ六つ
七八九つ十百千

萬の聲に千萬の
海に浮びし鱗族は

忽ち元氣恢復し

澆刺として撥ね廻り

一同首を竝べつつ

感謝の意をば表しける

神の使の伊太彦は

島に残りし三人の

神の御子をば相救ひ

天王の森の眷族と

仕へまつりし數百の

猩々の命を救濟し

海に浮べる鱗族の

生命までも救ひつつ

眞善美愛の神業を

最と極端に發揮して

心も勇む波の上

天津神等國津神

三五教を守ります

百のエンゼル神使

その外海の神々に

感謝の祝詞を捧げつつ

科戸の風に送られて

心いそいそ歸り行く

かかる例はあら尊と

天地開けし初めより

又と世界に荒波の

上漕ぎ渡る神の船

實にも目出度き次第なり

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして
この物語詳細に

水も洩らさずスクスクと
述べさせ玉へと瑞月が

疊の波に浮びたる
長方形の方舟に

横たはりつつ舵をとり
敷島煙草のマストより

歪まぬ煙を吹き乍ら
四月三日も「北村」の北村隆光

「隆」々「光」る朝日影
背に浴びつつ述べて行く

伯耆の國の米子驛
一里半を隔てたる

名さへ目出たき皆生村
濱屋旅館の二階の間

生きた神代の引うつし
處女の著作の物語

諄々ここに述べて行く
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ
身の過ちは宣り直す

三五教の大御神
三十萬年末の世に

生れ出でたる瑞月が
雲霧分けて朦げに

宣^のべ傳^{つた}へ行^{ゆく}く物語^{ものがたり}

脱^{だつ}線^{せん}誤^ご謬^{びう}は多^{おほ}くとも

廣^{ひろ}き心^{こころ}に宣^のり直^{なほ}し

許^{ゆる}させ玉^{たま}へ惟^{かむ}神^{ながら}

神^{かみ}のまにまに述^のべ進^{すす}む

そも瑞^{ずゐ}月^{げつ}が此^{この}里^{さと}に

一^{いつ}行^{かう}五人^{ごにん}來^{きた}りしゆ

例^{ためし}もあらぬ豐^{ほう}漁^{れふ}と

里^{さと}の男^{なん}女^{によ}が囁^{ささや}くを

聞^きくともなしに聞^き居^をれば

大^{おほ}本^{もと}教^{けつ}の神^{かみ}様^{さま}が

此^{この}地^ちに來^{きた}りませしより

こ^{この}の神^{しんとく}德^{とく}を村^{むら}人^{びと}が

頂^{いた}きたり^だと口^{くち}々^{ぐち}に

語^{かた}り居^あるこそ床^{ゆか}しけれ

日^に本^{ほん}海^{かい}に連^{つら}なりし

夜^よ見^みの濱^{はま}邊^べの波^{なみ}清^{きよ}く

日^に本^{ほん}國^{こく}の要^{かなめ}ぞと

海^{かいてい}底^{ふか}深^わく湧^わき出^いでし

簸^{ひの}野^{かは}川^{かみ}上^の大^{だい}山^{せん}は

清^{きよ}き姿^{すがた}を天^{てん}空^{くう}に

雪^{ゆき}の衣^{ころも}を被^{かぶ}りつつ

海^{うみ}を覗^{のぞ}いた水^{みづ}鏡^{かがみ}

天^{てん}も清^{しやう}淨^{じやう}地^ちも清^{しやう}淨^{じやう}

松^{まつ}の林^{はやし}も海^{かい}水^{すい}も

人^{ひと}の身^み魂^{たま}の六^{ろく}根^{こん}も

皆^{みな}清^{しやう}淨^{じやう}と清^{きよ}めつつ

猩^{しやう}々^{じやう}島^{しま}の物^{もの}語^{がたり}

心こころ勇いさみて宣のり傳つたふ

波なみは太たい平へいの鼓つづみうち

清きよめの湖うみは塵ちりもなく

龍りゅう宮ぐう海かいの乙おと姫ひめが

數あまた多たの魚ぎよ族ぞくに送おくらせつ

方はこ舟ぶねならぬ猩しやう々じやう舟ぶね

幾いく百ひやく萬まんとも限かぎりなく

大だい小せう無む數すうの鱗うろ族くづが

ピンピンシヤンシヤン撥はね乍ながら 神みふ船ねを推おして進すすみ行ゆく

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら 御み靈たま幸さちはひましませよ。

伊い太た彦ひこは聲こゑも清きよらかに歌うたふ。猩しやう々じやうは聲こゑを揃そろへて拍ひや子つしをとる。

伊い太た彦ひこ 天津あまつ御み空そらの影かげ映うつす 塵ちりもとどめぬキヨの湖うみ

二に十じふの船ふねを相あひ竝ならべ 猩しやう々じやうの島しまに立たち向むかひ

天てん王のうの森もりの眷けん族ぞくを 三さん百ひやく三さん十じふ三さん人にんと

人にん一いち化ば九けきうの三さん人にんを 漸やっく救すくひ歸かへり行ゆく

キヤツキヤツキヤツキヤツキヤツ ドンドコ ドンドコ ド

コドコドン

波も静なみ しづかに治をさまりて

一直線いっちょくせんに水平すいへいの

上うへにすべ行くゆ此船このふねは

天津御國あまつみくにの助たすけ舟ふね

處女しよぢよの航路かつろに猩々しやうじやう隊

二十にじふの船ふねに満載まんさいし

酒さけの鏡かがみを拔ぬき放はなち

勝手かつて次第しだいに飲のみ乍ながら

天國てんごく淨土じやうとの光景くわうけいを

今目いままのあたり眺ながめつつ

人も獸けものも化物ばけものも

喜びよろこび勇いさむ今日けふの空そら

實げにも目出めで度たき次第しだいなり

キヤツキヤツキヤツキヤツキヤツキヤツキヤツ

ドンドコ ドンドコ

ドコドコドン

三五教あななひけうに仕つかへてゆ

此伊太彦このいたひこは行先ゆくさきで

瓢輕者へうきんものだ狼狽者あわてもの

出洒でしやばり張者ものと笑わらはれて

玉國別たまくにわけの師しの君きみに

輕蔑けいべつされて居あたけれど

誰憚たればばからぬ今日けふこそは

一人ひとり舞臺ぶたいの艦長かんちやうさま

何程なにほど大おほきいと云いつたとて

牛うしの尻尾しつぽになるよりも

鷄とりの頭あたまになるがよい

凱旋將軍伊太彦が

此武者振を逸早く

吾師の君や眞純彦

三千彦夫婦に知らせ度い

あゝ勇ましや勇ましや

今日は天地も殊更に

清く涼しく廣く見ゆ

キヤツキヤツキヤツキヤツ
キヤツキヤツキヤツ

ドンドコドンドコ

ドコドコドン
人には一度は添ふて見よ

馬には必ず乗つて見よ

何處の何處に何んな人が

隠してあるか知れないと

三五教の筆先に

明瞭り現はれ居りまする

誰様の事かと思ふたら

一行の中の沓取と

自分でさへも信じたる

此伊太彦の事だつた

眞純の彦や三千彦が

何程偉いと云つたとて

三百有餘の團體の

頭となつて權力を

振り廻したる事はない

俺の身魂は何として

清淨のものであつただる

キヤツキヤツキヤツキヤツ

キヤツキヤツキヤツ

ドンドコドンドコド

コドコドン

いや待て暫し待て暫し

三百人の頭ぢやと

何程メートル上げたとして

あんな顔した人間を

統率したとて偉さうに

威張れた道理ぢやない程に

人の面した奴ならば

乞食でも泥棒でも構やせぬ

頭になつたら面白い

一寸此奴は閉口だ

とは云ふものの魂は

矢張り人に優れたる

狸々さまと云ふからは

チツとは誇つてもよいだらう

こんな事迄考へりや

俄に力が落ちて來た

大きな顔してベラベラと

誇る譯にはゆくまいぞ

玉國別の師の君が

汝が身魂の相應ぢやと

選て迎へにやつたぞと

もしも一言仰有らば

それこそサツパリ水の泡

眞純の彦や三千彦や

デビスの姫に殊更に

馬鹿にされるに違ひない

思へば思へば阿呆らしや
阿呆と云はれる悲しさに

せめてはマストを裸にし
阿帆の帆をば巻き下し

腕の力で漕ぎ歸る
俺の勇氣はこんなもの

あゝ惟神々々
神のまにまに任します

キヤツキヤツキヤツキヤツ
キヤツキヤツキヤツ
ドンドコ ドンドコ ド

コドコドン。

(都々逸調) 浪も静まるキヨメの湖に

瑞の御魂の水鏡。

水鏡、チヨイと覗けばアラ不思議

俺の面まで皺が寄る。

その筈ぢや、波の上漕ぐ此船は

板と板との継ぎ合せ。

年竝としなみも寄よらぬ姿すがたに波なみが打うつ

人竝ひとなみ勝すぐれた吾わがちからら」

と歌うたひ乍ながら長柄ながえの杓しやくで酒さけをグイグイひつかけつつ數萬すうまんの魚族ぎよぞくに送おくられて南みなみをさし
て歸かへり行ゆく。

(大正一二・四・三 舊二・一八 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二章 五葉松ごえふまつ (一五二二)

伊太彦司いたひこつかさに従したがひて 猩々じやうじやう迎むかひの副官ふくわんと

選えらみ出だされたアンチーは 船頭せんとうに立たちて勇いさましく
凱旋歌がいせんかをば歌うたひ出だす 數多あまたの猩々じやうじやうは勇いさみ立たち

一聲々々手を拍つて
キヤツキヤツキヤツとなきながら
拍子を取るぞ面白き。

アンチーは歌ひ初めた。
其歌、

猩猩々の島に来て見れば
この湖の底深く

潜みし海龍王が
猩猩王の歸幽をば

見濟し海より躍り出で
島の固めと聞えたる

大岩山に蟠まり
長い首をば垂れ下ろし

大きな口をパツとあけ
毒焰吐いて此島に

集まり居たる猩猩々を
唯一匹も残さずに

丸呑みなして吾腹を
肥さむとする怖ろしさ

斯る所へ三五の
神の使の伊太彦が

二十の船を引きつれて
現はれ給ひ數歌を

聲も涼しく宣りつれば 遠の海龍王も

進退茲に谷まりて 體一面焦熱の

悩みにたへずペラペラと 紅蓮の舌を吐き出し

グレングレンとのた打つて 苦しみ悶へ湖原に

落ち込み逃れし可笑しさよ キヤツキヤツキヤツ キヤツキヤツキヤ

ッ

ドンドコ ドンドコ ドコドコドン バーチルさまと諸共に

湖水の魚を漁らむと 三年前に館をば

そつと抜け出し怖ろしき 大海風に出會して

船諸共に水中に 沈みて苦しみ悶へつつ

神の恵に救はれし 事を思へば今は早

地獄を出でて天國に 登りし如き心地なり

キヤツキヤツキヤツキヤツ ドンドコ ドンドコド

コドコドン

呑めよ呑め呑めどつさり飲めよ 二十戸前の酒の倉

蓄へおいた此酒は 狸々さまに飲ます爲

バーチルさまはお前等の 身魂の親である程に

狸々姫はお屋敷の サーベル姫に憑依り

二重生活してゐる 三百三十三人の

狸々無垢のお客さま 決して心配要りませぬ

お前の父と母さまの 常磐堅磐に現れませる

アヅモス山の南麓の 廣き館に歸るのだ

悦び勇め狸々よ キヤツキヤツキヤツ キヤツキヤツキヤツ

ドンドコ ドンドコ ドコドコドン これだけ澤山船客が

あつても人語を發せない キヤツキヤ連中許りで

何だか氣乗が致さない さはさりながら天地の

間に生きとし生けるもの 何れも神の分け御靈

言葉かよはぬ外國の 人を乗せたと諦めりや

それで心は濟むなれど

頭の多い割合に

話の相手がやつと無い

あゝ惟神々々

常夜の闇の現世は

萬の曲のさやぎたて

岩の根木の根も立ち騒ぎ

草の片葉も言問ひて

普通選挙ぢや社会主義

四民平等なにかにと

騒ぎ廻つて治まらぬ

其惨状に比ぶれば

キヤツキヤツキヤツと云ふ許り

自分の意見を主張せぬ

お方の制統は易いもの

キヤツキヤツキヤツキヤツキヤツキヤツキヤツ

ドンドコドンドコドコドコドン

三五教の筆先に

誠の神徳備はらば

人は黙つて俯むいて

小理窟云はず神徳を

頂くものだと云ふてある

これを思へば狸々さま

天地の神の御恵を

靈に受けてゐるのか

ほんに秩序の整うた

狸々の群を眺むれば

人間界が嫌になる

人間にんげんなればよいけれど 人の皮かは被おほる狼かみや

狐狸きつねの化物ばけものと 暮くらして居をるかと思おもふたら

ほんに怖おそろしうなつて來きた あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

人は神かみの子こ神かみの宮みや 天てんはいつ迄までも物もの云いはず

地ちはどこ迄までも言こと問とはぬ 人は天てん地ちに神かむなら倣なひ

下くだらぬ事ことを喋しゃべる舌しより 心こころに神しん徳とく頂いたいて

いつも確しつり口くちをつめ 人の譏そしりや陰かげ言ことを

決けつして言いふべきものでない 言いはぬは言いふにいや勝まさる

言葉ことばを知らぬ狸しやうじやう々々も やつぱり天てん地ちの御み惠めぐみで

生活せいくわつするを窺うかがへば 言葉ことばの必要ひつえうは無ないだらう

神かみの玉たまひし眞しん善ぜん美び 善みやび言ことば美ことば詞ことばを外ほかにして

人ひとを怒いからせ恨うらませる 禮い無なき言ことば葉はは云いはぬもの

狸しやうじやう々じやうさまがよい鑑かがみ ほんと感じかん入いりました

キヤツキヤツキヤツキヤツ キヤツキヤツキヤツ ドンドコ ドンドコ ド

コドコドン

私わたしもこれからスマの里さと

無ぶ事に歸かへつた事ことならば

生うまれ赤あか子こになりかはり

無む言ごんの行ぎやうを致いたしませう

あゝ勇いさましや勇いさましや

浪なみもをさまる湖うみの上うへ

風かぜも涼すずしき湖うみの上うへ

百ひやく鳥てう翼うばを打うち擴ひろげ

いと樂たのしげに舞まひ遊あそぶ

神かみの御み國くにか海うみの上うへ

大だい小せう無む數すうの魚うろ族くづは

吾われ等らの船ふねを送おくりつつ

ピンピンシヤンシヤン

跳は廻ねり 無ぶ事じ泰たい平へいを祝ことほぎて

吾われ等らの行いっ行かうを送おくるなり

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

神かみの惠めぐみの有あ難りがたき

キヤツキヤツキヤツキヤツ

ドンドコ ドンドコ ドコドコドン』

物は云ふまい物云ふた故に

父は長良の人柱

雉も鳴かねば打たりよまい。

歌を歌ふなら快く歌へ

歌は天地の神の聲。

船を竝べて猩々ヶ島に

進むアンチーの身の冥加。

五十九の巻眞善美愛

猩々潔白物語り。

靈界のありのままをば委細に

説いて教ゆる神の教。

物言はにや遠き神世の有様を

今の世人に知らされぬ。

加藤明子口を尖らし萬年筆の

首筋掴むでかきなぐる。

大山の雪の衣をはぎながら

高麗の峰をば瞰下する。

一點の曇りさへなき彌生空

船に臥しつつ空を行く。

方舟は口述臺の又の御名

床に飾りし五葉の松。

千年の齡保てる五葉の松

萬年筆の針のやうに

五の御靈の葉も茂る。

(大正一二・四・三 舊二・一八

於皆生温泉濱屋

加藤明子録)

(昭和九・一二・一 王仁校正)

第二三章 鳩首（一五二三）

ヤツコス、ハール、サボールの三人は、伊太彦丸の片隅に小さくなつて不安の面をさらし乍ら、コソコソ密談をやつてゐる。

ヤツコス「オイ兩人、此奴アちと怪しいぞ。俺達を置去にして行きやがった宣傳使の片われ伊太彦が大將になつて、これ丈澤山の船を拵へ、狸々の一族を引率れ歸るに就いては何か深い企みがあるに違ひない。狸々の前で、俺等を一つ掻きむしる眞似でもせうものなら、あれ丈の狸々が一所へ固まつて来て、眞似の上手な奴だから、掻きむしり、結局にや一つよりない命まで取つて了ふかも分らぬぢやないか。之を思へば俺はモウ酒を呑む氣にもなれない、汝等どう思ふか」

ハール「ナア二、三五教は無抵抗主義、博愛主義だと聞いてるから、俺達三人位殺した所で、世界の米が安うなるといふ譯もなし、悪魔が根絶するといふ道理もないから、滅多にそんなこたア致すまい。マア安心したが宜からうぞ。俺は何だか助けてくれるやうな氣がするのだ」

サボール「イヤ、さう安心も出来まい。どつかの磯端へ伴れて行つて猿攻に會はず積だらう。三五教といふ奴ア、ズルイから、自分が手を下して人を殺せば天則違反になるのを虞て、猿公の手をかり、俺達三人をバラモンとやる積だらう。一層の事、今の内に先んずれば人を制すだ。伊太彦の素ツ首を捻ぢ切つてやらうでないか。さうすれば猿の奴真似しやがつて、どの船も此船も船頭の首を捻ぢ切るだらう。猩猩は何と云つても俺達と假令三日でも同棲して居た馴染もある。又大蛇に呑まれかけた時に應援もやつたし、恩を知つてる獸だから、俺達の危難を見て救はぬといふ道理がない。併し猿といふ奴、先にやつた者の真似をするのだから、遅れた方が敗だ、一つ決行せうぢやないか」

ヤッコス「まてまて、伊太彦一人ぢやない、此船にはアンチーといふ力強が乗つてゐるから、ウツカリ手出しをせうものなら、それこそ窮鼠却て猫を咬むやうな破目になるかも知れぬ。何とかかとか云つて、澤山酒を吞ませ機嫌を取つて酔ひ潰し、寝鳥の首を締めるやうに甘くそこはやらかそぢやないか」

ハール「お前達兩人はどこ迄も人を疑ふのか。疑心暗鬼といつて、自分の心の鬼

が自分を責めるのだ。何程三五教の魔法使だとして、おとなしい者を苦しめることが出来ぬからのう。マアそんな取越苦勞をするよりも大自在天様を御祈願した方が安全かも知れぬぞ」

ヤツコス「あ、兔も角俺は險難で堪らない。併し乍らサボールの言つた通り、一方は神力無雙の宣傳使、一方は力強だから、先づ甘く機嫌を取り酒に酔ひつづし、其上決行しよう。それが最良の手段方法だ。オイ、サボール、汝常から聲自慢だから、一つ慄ひつくやうな美聲を出して唄つてみよ。さうすりやキツと伊太彦が氣を許すに違ひない」

サボールは首を三つ四つ縦にしやくり乍ら、細い涼しい聲で、船の隅の方から唄ひ出したたり。

三千世界の世の中に 尊いものが四つある
第一番に尊きは 豊榮昇るお日イ様
次には夜を守ります 圓満清朗のお月様

大地を造り固めたる
三五教の守り神

大國常立大御神
此神様の御恵で

梵天帝釋自在天
大國彦の神様も

此世に生きてゐるのだ
モ一つ尊い御方は

三五教で名も高き
此船守る伊太彦司

こんな尊い御方と
一つの船に乗せられて

鏡のやうな海原を
歸つて行く身は有難い

至仁至愛の神様は
禽獸蟲魚の隔てなく

皆夫れ夫れに生命を
一日なりと永かれと

守らせ玉ふぞ有難き
まして天地の神様の

大經綸に仕ふべき
神の鎮まる生宮を

憐れみ玉はぬ事もある
モシ神様が人間を

假令猩々の手を借つて
惱め玉ひし事あるも

ヤツパリ愛の本體が
根本的に崩解し

神かみの資格しかくがゼロとなる　　こんなみやすい道理だうりをば
 悟さとらせ玉たまはぬ事ことあるか　　かくも仁慈じんじの神様かみさまに
 朝あさな夕ゆふなに赤心まごころを　　捧ささげて仕つかへ奉まつります
 三あななひけう五かむつかさ教かむつかさの神司かむつかさ　　中なかにもわけて美うるはしき
 身み魂たまを持もたせ玉たまひたる　　伊いたひこつかさ太こつかさ彦かみさま司かみさまは神様かみさまの
 珍うづの化身けしんと人ひとが言いふ　　こんな尊たふとい神人しんじんに
 守まもられ歸かへる吾々われわれは　　大舟おほぶねに乗のつた心地こちして
 先さきの事ことをば案あんじずに　　結けつこう構こうなお神酒みきを頂いたいて
 猩々しやうじやうさまの御伴おんともを　　さして貰もらふが宜よからうぞ
 これこれモウシ宣傳せんでん使し　　三あななひけう五かみさま教かみさまの神様かみさまの
 深ふかき恵めぐみに絆ほだされて　　貴方あなたの顔かほを見みるにつけ
 高たか天原あまはらの靈國れいこくの　　天人てんにんのやうに思おもひます
 これを思おもへばバラモンの　　教をしへを守まもる神かみさまは
 月つきとスツポン雲くもと泥どろ　　天地てんちのけじめがあるやうに

何だか思へてなりませぬ　これから素張りバラモンの

教を捨てて三五の　誠の信徒となります

スパイの役を勤めたり　片商賣に海賊を

やつて來ました吾々は　心の底から悔悟して

貴師のお弟子になります　何程罪があるとても

天地の神の御心を　思ひ出されて吾々を

必ず殺して下さるな　最早私は悪神の

影さへとめぬ【みづ】　御靈　鏡の如き魂と

俄に研き上げました　貴師の清き魂で

私の心の奥底を　隅から隅迄透視して

疑晴らし三人を　何卒御助け下されや

梵天帝釋自在天　オツトドツコイこら違うた

天地を造り固めたる　天の祖神三五の

大國常立大御神　其外百の神達の

御前みまへに畏かしこみ願ねぎ奉まつる

旭あさひは照てる共とも曇くもる共とも

月つきは盈みつ共とも虧かくる共とも

假令たとへ大地だいちは沈しづむ共とも

一旦いつたん改かい心しんした上うへは

決けつして元もとへは返かへらない

天地てんちの神かみも御照覽ごせうらん

安あん心しんなさつて澤山どっさりと

結構けつこうなお神酒みきをあがりませ

さうして下くださる事ことならば

吾等われら三人さんにん一時いちどきに

直接行動ちよくせつかうどうドツコイシヨ

直接ちよくせつ間接かんせつ神様かみさまに

誠まことを捧ささげまつりませう

あゝ惟かむながら神々かむながら

御靈みたま幸さちはひましませよ

伊太彦いたひこ『バラモンの醜しこの司つかさが村肝むらぎもの

心こころいらちて疑うたがひて三人みたり。

吾心わがこころすかして三人みたりバラモンの

醜しこの司つかさよ心安こころやすかれ』

ハール 有難し其御言葉を聞きしより

心も廣くゑみ榮えぬる

ヤツコス 疑の雲霧晴れて和田の原

波に揺られて歸る嬉しさ。

人は皆尊き神の生身魂

悩むる人は鬼か悪魔ぞ。

吾れも又鬼や大蛇とよばれつつ

世人なやめし事を悔ゆなり

アンチー こそこそと船の小隅に集まりて

疑三人酒に四人。

伊太彦いたひこの神かみの司つかさよ心こころせよ
うはべを飾かざる人ひとの心こころに

伊太彦いたひこ何事なにことも只ただ惟かむ神かみ々々ながら

神かみの恵めぐみに任まかすのみなり。

和田わだの原はら五百いほ重への波なみを迂すべりつつ

心こころもスマの岸きしを目め當あてに。

歸かへり行く猩しやうじやう々ぶね舟ふねは勇いさましく

常世とこよの春はるを齋もたらし歸かへるも

ハールハール伊太彦いたひこの道みちの司つかさは神かみなれや

其言そのこと靈たまに心こころ榮さかえぬ

ヤッコスなにごと 何事も伊太彦さまの御心の

御船みふねの舵かぢに任まかすのみなり。

さり乍ながら何時いつ荒風あらかぜの吹ふきすさみ

船覆ふねくつがへす事ことのこはさよ〆

ハールうたがひ 疑ごころの心は暗やみの鬼おにとなる

早くはや晴はらせよ胸むねの曇くもりを〆

(大正一二・四・三 舊二・一八 於皆生温泉濱屋

松村眞澄録)

(昭和九・一二・一 王仁校正)

第二四章 隆光りゅうくわう〔一五二四〕

アキスの歌、

金鳥銀鳥は翼を擴げ

波の上をば縦横に

いと愉快げに迂り行く

天津御空にカンカンと

夏の太陽は照り渡る

照りつけられた頭には

飲んだお酒が逆上し

船諸共にフラフラと

なんとも知れぬ上機嫌

面白可笑しくなつて来た

人の皮着た獣やら

獣の皮着た人間を

二十の船に満載し

泣くやら笑ふやら慄ふやら

千姿萬態波の上

吹き来る風は吾袖を

オチオチし乍ら吹いて来る

バラモン教の御連中は

半安半危の状態

伊太彦丸の船底に

蟠り居て密々と

前途の光明樂しみつ

囁き玉ふ訝かしさ

假令天地は覆るとも

清めの湖は涸くとも 海龍王が現はれて

船諸共に呑み喰らふとも 何か恐れむ神の道

天津御空の日の影は 波間を隈なく照らしまし

打つ度毎にキラキラと 魚鱗の如く輝きぬ

かかる目出度き太平の 大湖原に舵をとり

三百有餘の喜びを 乗せて靈地へ歸り行く

アキス、カールの兩人は バーチル館の番頭さま

主人の所在を尋ねつつ 日日毎日泣き暮し

悲しく淋しく月日をば 送り居たりし時もあれ

天地の神の御恵みに 主の君はニコニコと

神の使に助けられ 寄る年波も穩かに

アンチーさまと諸共に 歸り來ませる嬉しさよ

吾々二人は磯端に 手を繋ぎ合ひトントンと

燕のダンスを演じつつ 主の君や宣傳使

尊たふとき一いつかう行ぎょうの先さきに立たち

凱がい歌かを奏そうして歸かへりけり

一いちど度どに開ひらく心こ地ちして

貯たくはへ置おきし酒さか樽だるを

七なぬ日か七な夜なの大だい酒しゆ宴えん

姫ひめの命みことの神かむ懸かり

三さん百ひやく三さん十じふ三みは柱しらの

迎むかへ歸かへれの御ご託たく宣せん

伊いた太ひ彦こつ司かさに從したがひて

波なみを押お分しけ進すすみ行ゆく

地つち球かた固かたまりし昔むかしより

猩しやうじやう々ひめ姫ごの御げん眷ぞく族く

滿まん載さいなして鞆とう々とうと

あゝ惟かむ神な々な々な

ババーーチチルル館やかたへドシドシと

そそのの嬉うれしさは天あめ地つちの

二にしつ十と戸ま前への倉くらを開あけ

里さと人びととともに擔かつぎ出だし

そその最さい中ちゆうにササーーベルベルの

猩しやうじやう々々の島しまに殘のこしたる

眷けん族ぞくささまを懇ねもころに

主あるじの君きみの命めいを受うけ

海うみに慣なれたるアアンンチチーと

かかかる例ためしは荒あら金がねの

夢ゆめにも聞きかぬ瑞ずい祥しやうぞ

一ひとり人ひとも殘のこらず此この船ふねに

波なみ間まを分わけて歸かへり行ゆく

アアツツモモス山さんの森しん林りんは

昔むかしの寂寥せきれうに相反あひはんし 朝あさな夕ゆふなにキヤツキヤツと
 猿まじらの聲こゑの賑にぎはしく 四邊あたりに響ひびく事ことだらう
 この船磯邊ふねいそべに着つくならば 酒さけに酔よひたる里人さとびとは
 バーチルさまに従したがひて 磯邊いそべに人ひとの垣かきをつき
 歡呼くわんこの聲こゑは中天ちうてんに 響ひびき渡りて吾々われわれの
 狸々隊しやうじやうたいを懇ねむろに 歡迎くわんげいなさる事ことだらう
 思おもへば思おもへば勇いさましや 神かみの御おん爲ため世よの爲ために
 誠まことを開ひらく宣傳せんでん使し 蒼生あをひとくさは云いふも更さら
 波なみに泛うかべる離はなれ島しま 人ひとなき島しまに現あらはれし
 狸々しやうじやうの群むれ迄まで救すくひ行ゆく その功績いさをしぞ尊たふとけれ
 人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや 神かみに等ひとしき身み魂たまぞと
 誇ほこりはすれど内實ないじつは 虎狼とらおほかみの棲處すみかぞや
 狸々隊しやうじやうたいの一行いっかうは 尊たふとき神かみの眷族けんぞくと
 なりてそれぞれ神業しんげふに 仕つかへて穢けがれし世よの人ひとの

百の災拂ひまし
いと安らけく平らけく
思へば思へば有難や
慎み三唱し奉る
神の造りし天地を
守らむ爲の御使
猩猩さまの萬歳を
萬歳々々萬々歳

猩猩の島の昔の物語

漸く記し「北村」の筆。北村隆光

「隆」々と昇る朝日の「光」をば
燈となして物語する。

(大正一二・四・三 舊二・一八 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二十五章 歡呼（一五二五）

太陽は漸く西の浪間に沈むと共に、大空には金銀の星光瞬き初めた。數多の小猿は、夜の海上を眺めて稍不安の念を起したと見え、三百有餘匹の口からキヤツキヤツキヤツと一齊に叫び出した。此聲に壓せられて、欸乃の聲も話聲も船底を打つ浪の鼓の音も、闇と共に包まれて仕舞つた。伊太彦は勢を見せ、小猿等の心を安むぜむと舷頭に立ち、手を左右にふり乍ら面白可笑しく、歌ひ踊つて見せた。夜目の光る猩々は此姿を見て稍安心しながら、俄に陽氣立ち、いづれも手を振り、嬉しげにキヤツキヤツキヤツと踊り出した。船頭は船の動搖を制すべく、頻りに櫓を握つて其平衡を保ちつつ北風に帆を揚げて海面を迂り行く。

伊太彦「夜の帳は下されて 漸く四邊は静まりぬ

天津御空を眺むれば 大小無数の星影は

金銀瑪瑙瑠璃碑磔 ダイヤモンドも畜ならず

おのもおのにもに丹精を
こらして光り輝きぬ

浪の底をば眺むれば
大小無数の鱗族が

前後左右にゆき通ふ
その度毎に燦々と

光り輝く星影を
遮り隠す床しさよ

船の中には猩々さま
赤子のやうな聲あげて

キヤツキヤツキヤツと歌ひつつ
戀しき母の御許へ

知らず知らずに進み行く
吾は伊太彦宣傳使

デビスの姫を救はむと
三千彦さまを伴ひて

キヨの港の關守が
館をさして夜に紛れ

足音忍ばせ進み入り
デビスの姫を救ひ出し

逃げ行く途端に曲神の
企みの罫に引つかかり

奈落の底に轉落し
因果を定め度胸据ゑ

心の中の煩悶を
湮滅せむと惟神

神に吾身を任せつつ
ホテルの番頭と洒落込みて

悲運ひうんを歎かこつ折をりもあれ 落ち込おみ來きたるバラモンの

へール司つかさのユウンケル チルテル司つかさのキャプテンが

禪まはし一つの眞裸體まっぱだか 落ち込おみ來きたるぞ怪あやしけれ

滑稽諧謔こつけいかいぎやく竝ならべ立て 奥おくの一ひと間に案内あんないし

又またもや帳場ちやうばに居坐あすわつて 客きやくを待まちける折をりもあれ

ドカドカドカと大勢おほぜいが 雪崩なだれの如ごとく落おちて來くる

千客萬來せんきやくばんらい大繁昌だいはんじやう なぞと洒落しやれつつ煩悶はんもんを

紛まぎらし居ある時ときもあれ 思おもひがけなき三五あななひの

玉國別たまくにわけの宣傳使せんでんし 眞純ますみの彦ひこやアンチーや

テクの司つかさと諸共もろともに ドスドスドスと迂すべり込こむ

思おもひもよらぬ此奇遇このきぐう 敵てきも味方みかたも一場いちぢやうに

首くびを鳩あつめて神界しんかいの 尊たふとき教をしへの物語ものがたり

互たがひに心打解こころうちけて 皇大神すめおほかみの神恩しんおんを

涙なみだと共に崇あがめ居ある 鼓膜こまくに響ひびく犬いぬの聲こゑ

はて訝かしと疑へば 思ひも寄らぬ助け舟

初稚姫の神司 猛犬スマート引き連れて

醜の岩窟の入口の 鐵戸を開けて來りまし

吾等一同を恙なく 尊き地上に救ひまし

忽ち尊き御姿を 隠し給ひし不思議さよ

玉國別の一行と バーチル館に立ち歸り

海川山野種々の 清き待遇し受け乍ら

嬉しく楽しく神恩を 崇め居る折サーベルの

姫の命の神懸 猩々の姫が現はれて

島に残せし眷族を 唯一刻も速に

これ館に迎へとり 救ひ給へと悲しげに

頼み入るこそ可憐らしき 玉國別の許可得て

二十の船を呼び集め 準備全く整うて

命のまにまに猩々島 浪路も安く到着し

使命を全く相果し

漸く此處に歸りけり

最早湖路も十四五里

朝日の豊榮昇る頃

日出にスマに着くだらう

思へば思へば勇ましや

天地百の大御神

吾師の君の御前に

謹み感謝し奉る

朝日は照るとも曇る共

假令大地は沈むとも

バラモン教のヤツコスや

ハール、サポール三人は

恨みず憎まずどこ迄も

神のまにまに救ふべし

心安かれ三人共

眞善美愛の神の道

如何でか人を損はむ

勇めよ勇め皆勇め

猩々でさへもあの通り

喜び勇むで舞ひ踊る

ましてや人の身をもつて

この瑞祥を祝はずば

神に對して濟まないぞ

勇めや勇め諸共に

伊太彦司が赤心を

籠めて汝を救ふべく

神に誓ひて宣り傳ふ

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち」

かく歌ひ終るや否や、東の空は茜さし、浪の中より金覆輪の太陽は、鮮麗なる光輝を放つて覗き玉ふた。前方を見ればスマの濱に數百千の老若男女が鉦や太鼓を鳴らし、鬨の聲を造りて、船影を認め、どよめき渡つて居る。此光景を見るよりヤツコス、サボールの兩人は俄に怖氣づき、身を躍らして海中に飛び込み姿を隠した。磯邊に立つた群衆は二人の入水を見て、アレヨアレヨと手を振り、聲を限りにぞよめき出した。かかる所へ矢を射る如く、一艘の小舟現はれ來り、二人の飛び込むだ波上を目蒐け進み行く。これは眞純彦、三千彦の操る船であつた。

日月の恵をうけて委曲にじつげつ めぐみ まつぶさ

説き「明」したる此物語。と あか このものがたり

いそのかみ古き神代の出來事をふる かみよ できごと

今【新】しく説き【明】すなり。

（大正一二・四・三 舊二・一八 於皆生温泉濱屋 加藤明子録）

（昭和一〇・二・一八 於彦根樂々園 王仁校正）

）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第五九卷 眞善美愛 戌の巻

終り